

[著者]



海冬レイジ

かいとう・れいじ

「好きなことなら頑張れる」

って言うけれど、本当は「頑張れるから好き」なのかも。

頑張るのって、本当は楽しいのかも！

——機巧いじり、大好き！

いまだに新人気分が抜けないキャリア6年目の機楽作家。

札幌市在住。1月8日生まれ、A型。ほかに『幻想魔グリモ

アリス』シリーズ(富士見ファンタジア文庫)など。

[イラストレーター]

るろお

某ゲーム会社を退職し、フリーになりました。

またして生きていけるのか、自分。

今日も明日も明後日も、ギリギリで頑張るよ!!



Facing
ELE
Shepherd

傷つかない

機巧少女は傷つかない3
Mechanical Machine-Doll



9784840134521

ISBN978-4-8401-3452-1
C0193 ¥580E

1920193005806

定価：本体580円(税別)

メディアファクトリー



11月発売

海冬レイジの本**機巧少女は傷つかない1 Facing "Carnibal Candy"**

[イラスト るろお]

機巧少女は傷つかない2 Facing "Sword Angel"

[イラスト るろお]

機巧少女は傷つかない3 Facing "Elf Speeder"

[イラスト るろお]

機巧少女は傷つかない3

機巧魔術——それは魔術回路を内蔵する自動人形と、人形使いにより用いられる魔術。そのトップを決める戦い〈夜会〉で負傷中の雷真は、飛び降りをはかった少女を偶然助ける。少女は〈悪魔〉シャルの妹・アンリで、学院転入後の一週間ずっと自殺未遂を繰り返しているらしい。「私を殺してください!」それがダメなら、いっそめっちゃくちゃにしてください!」「俺を何だと思ってるんだ!」そのとき、学院のシンボル・時計塔を閃光が撃ち抜く! 驚く雷真の前には、竜の背に乗るシャルの姿が。そしてシャルの目的は——学院長の暗殺!? シンフォニック学園バトルアクション第3弾!

マシンドール
機巧少女は傷つかない3
Facing "Elf Speeder"

海冬レイジ



機巧少女は傷つかない3

海冬レイジ





Feeling
Full
Speaker

機巧少女は

傷つかない


海をレイヴン
Shounen
2019



ほつとしたのもつかの間、
怯えたアンリは尻を浮かせ、
弾みで手をすべらせた。
雷真はあわてて
真下にすべり込み、
際どくアンリを受け止めた。







「つまり、私こそが（完全なる個）――
不完全な存在たる貴方たちには、
到底、勝ち目がないと申しました」

Raustin
Akakane

赤羽雷真

「アアにしてるぜ、
勝利の女神」

「雷真……♡」

Maya
夜々

Frey

フレイ

「私はロキのお姉ちゃんなのに……
役に立たない……」

Loki

ロキ

「でしゃばるな。
あんたがいても、足手まといになるだけだ」

アンリエット・ブリュー

「みんなさーい……」

Charlotte Iselen

シャルロット・ブリュー

「謝らないで。すべてが終わったら、
また一緒に暮らすのよ。いいわね？」

contents

Unbreakable Machine-Doll

Prologue	悲しき魔竜p11
Chapter 1	光、こぼれ落ちたものp22
Chapter 2	破滅の序曲p33
Chapter 3	奈落の底にてp89
Chapter 4	秘すべきことが明かされるp121
Chapter 5	敗北を禁ずp150
Chapter 6	心から望むことp181
Chapter 7	語り、微笑み、欺く妖精p216
Epilogue	優しさ修羅p249



マシンドール

機巧少女は傷つかない3

Facing "Elf Speeder"

海冬レイジ

MF文庫 

口絵・本文イラスト●るろお

編集●庄司智



Prologue

悲しき魔竜



「本当のことを言ってください雷真——そんなに夜々のことが嫌いですか!?」
ナース姿の夜々が、涙ながらに迫ってくる。

雷真はベッドの上で後ずさりしつつ、半眼になって言った。

「質問に答える前に、まずはそのぶつとい注射器を捨てろ」

「こ、これは本心を聞き出すために必要なんです」

「脅迫だろ——自分好みの回答を引き出そうとしてるだろ——」

ここは医学部の一階。医務室のとなり、学生用の病室だ。

先日の戦いで負傷した雷真と、同じくロキが入院中。そのロキはとなりのベッドで、苦虫を噛みつぶしたような顔をして、分厚い魔術書を読んでいる。

雷真の言うことはもつともだと思っただのか、夜々はしぶしぶ注射器を捨てた。

雷真はほっとため息をつき、それから、がしがしと頭をかいて、

「別に、嫌いじゃない」

「じゃあ好きですか? 夜々を愛してますか?」

ずずいっとベッドに這い上がってくる夜々。漆黒の瞳を潤ませ、つややかな唇を噛みし

め、頬をほんのり激情に染めて、じっと雷真を見つめている。

体温を感じるほどの距離。ふんわり甘い香りが漂ってくる。クラツときそうになるが、雷真は理性を総動員して、夜々の頭を押し返した。

「いい加減にしろ。俺たちがはるばる海を渡って、地球の反対側までやってきたのは何のためだ？ 物見遊山か？ 新婚旅行か？」

「それは……」

「俺たちにはやるべき仕事があるし、やらなきゃならない任務もある。惚れたの腫れたの言ってる場合じゃないだろう」

まさに正論。夜々は口ごもり、しゅんとした。

雷真はため息をつき、夜々の頭を撫でてやった。

「嫌いじゃないし、おまえは大事な相棒だ。それじゃ不足か？」

「ちょー不足です」

「即答で無下にするな！ 俺の精一杯の優しさを！」

夜々はよよと泣き崩れた。

「夜々がいつしようにけんめい据え膳を用意しても、誘い受けを試みても、ちっとも乗ってこない……。夜々はそんなに魅力がありませんか？」

「魅力うんぬんの前に、ここは病室だからな？ バブリックスペースだからな？ こんな



ところで妙な真似をするのは、人倫にもとるだろ」

「そんなもの、愛があれば簡単に乗り越えられます」

「人倫を簡単に乗り越えるな！ 愛を語る前に常識を学べ！」

問答には飽きたらしい。夜々は腰を浮かせ、じりじりとにじり寄ってきた。隙はらんらんと輝き、ネズミを追い詰める猫——もとい、虎のようだ。

一方、こちらは手負いの身。腕力の勝負になれば、どうしたって分が悪い。このままではまずい。どこかに救いの神は……。

「おっ、いろいろ！ 丁度いいところに！」

「え？ 姉さま？」

ぎくっとして、あわてて背後を振り返る夜々。

しかし、戸口のところには誰もいなかった。

しばし、放心。夜々がゆっくり顔を戻すと、既にベッドはもぬけのカラだった。開け放たれた窓から、初夏の涼しい風が入ってきて、カーテンを揺らす。

夜々はぼろりと涙をこぼし、

「逃げた——」

（まったく、夜々の奴にも困ったもんだ……）

雷真は瞬易しつづ、ベンチの背もたれに背中を預け、呼吸を整えた。

医学部の屋上。抜けるような青空の下、シーツやら白衣やらがはためき、鮮やかすぎるコントラストが目には痛い。

一度は窓から飛び出したものの、すぐに医学部校舎の中に戻り、屋上まで逃げてきたのだ。原則として、入院患者は外出が許されていない。

（ここ何日か、だよな……。夜々が手に負えなくなったのは）

十日間の入院生活。最初の五日に限って言えば、夜々はむしろ上機嫌だった。

転回点となったのは六日目。フレイが見舞いに訪れた、あの日。

その日から、フレイは毎日、ランチを差し入れていた。授業もあるし、夜は夜会で忙し
いだろうに、実にマメ。さながら通い妻のようだ。

（フレイは俺に義理を感じてるだけで、別に色恋沙汰じゃないんだがな……）

ため息をつき、ベンチの上に横たわる。ふと、頭上を影が横切った。

なじみの仔竜かと思つて、あわてて身を起こす。

「……ただの鳥か」

飛んでいく白い翼はハトのものだった。シグムントとは似ても似つかない。

（そーいや最近、あいつを見てないな）

シグムントの主、シャルロット・ブリュー。

雷真とはお互いに数少ない友人……ということになるだろうか。

「貴方って、本当に、ビッダベン級のバカー」

十日前、雷真が無茶をやらかす直前、シャルはそう言い捨て、涙のようなものを見せて去った。あれっきり、見舞いにもこない。

ひょっとして、怒らせたのかもしれない。

（それはまずいな……ん？）

はためくシーツの向こう、屋上の端っこに人影を見つける。

整った横顔。サラサラの髪を風に泳がせ、頭には帽子をのせている。細身の体軀がよく似ていて、雷真は一瞬、見間違えた。

（シャル——？）

いや、違う。シャルは輝くような金髪だが、少女の髪は亜麻色だ。帽子のかぶり方も変に目深で、野暮つたい感じがする。

少女はこちらには気付かず、じっと時計塔をにらんでいる。

時計塔は華やかな飾りつけがされていた。至るところ花で飾られ、旗がいくつもはためている。耳を澄ませば、楽隊の演奏も聞こえてきた。

そう言えば、建造百周年の記念式典がある、と聞いた。

少女が楯に手をかける。

雷真の鋭敏な知覚が、直感が、危険をビリビリと訴えた。

いけない、と思ったときにはもう体が動いている。ギブスが外れたばかりの足で雷真は駆ける。一方、少女は櫓を一息によじ登った。

案の定、櫓を乗り越え、虚空に身を躍らせる。

雷真は櫓を飛び越え、無謀にも少女に追いつがった。

空中で少女の腕をつかみ、もう一方の腕で櫓をつかむ。

強烈な加重。右の鎖骨に激痛が走り、思わず指から力が抜けた。あっけなく櫓が遠のき、重力は無慈悲に雷真を引き下ろす。ここは六階。真下は石造りのテラス。叩きつけられれば、到底、無事ではすまない！

「夜々……きてくれ！」

祈りを込めて、相棒の名を呼ぶ。きつと声は届かない。だが——
想いは、届く。

がしゃんつ、と一階の窓ガラスが砕け散り、黒い影が飛び出してきた。

どす黒い妖気をまき散らしながら現れたのは、黒髪の少女。

そのひたいには、ダイヤモンドのごとくきらめく、小さな一本角が生えている。

（夜々……!? 何だ、あの角——?）

いや、それどころではない。雷真は言葉をのみ込み、相棒に右手を向けた。

魔力を集中。夜々の五体に力がみなぎる。夜々は壁を駆け上がり、ふわりと雷真を抱き止めた。と同時に、校舎の壁に爪を立て、無理やりに減速する。

めきめきめきつ、と音を立てて、夜々の指が壁をえぐった。

そして、すどん、と着地。

「ありがとよ、夜々。おかげで助かつ——」

「雷真は馬鹿ですつー。どうしてこんな無茶をするんですか!?」

関口一番、怒鳴られた。

ひたいの角は消えている。その代わり、目に一杯、涙を溜めていた。

「……仕方ねーだろ。こいつが急に飛び降りたんだから」

ばつが悪い。雷真は逃げるように顔を背け、異変に気付いた。

腕の中の少女が、がくがくと震え出したのだ。

「おい、大丈夫か? どこか怪我でも——」

「いやー 男ー」

いきなり突き飛ばされた。

不意打ちだったので、反応できない。あっけなくコケてしまう。

少女は茂みの向こうに隠れ、恐る恐るこちらをうかがった。その顔はやはりシャルに似ていたが、怯えきった表情は似ても似つかない。

「いきなり何しやがる―」

少女はびくつと飛び上がった。帽子を両手で引き下ろし、目深にして顔を隠す。

「ごめんなさいっごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ」

「あ、いや、別に怒ってるわけじゃない。どうした？ どこか痛めたのか？」

「どうして顔色をうかがうんですか雷真」

夜々がひんやりとした声で割り込む。雷真は無視して、少女の方へ歩み寄った。

「おまえ、自殺志願者か？ 何でいきなり飛び降りたんだ？」

少女は帽子をつかんだまま、びくびくつと後ずさった。そして――

「りっ……理不尽です」

「あ？」

「邪魔です不愉快です妨害行為ですー どうして私を助けたんですか……!?」

少女はぼろぼろ泣きながら、雷真を非難した。

「責任を取ってくださいー 賠償してくださいー」

「責任……って言われてもな」

「私を殺してくださいー それがダメなら、いつそめちやくちやにしてくださいー」

「……めちやくちやって何だ」

「私なんか猥欲のおもむくまま蹂躪すればいいんですー さあ、もうどうにもしやがれ」

ですー 劣情をぶちまけてスツキリしろですー」

「しねーよー 俺を何だと思つてんだー」

はっとして相棒を振り向くと、夜々は殺人鬼のように微笑み、

「めちやくちやにしましょう雷真。こんな女狐」

「おまえのは意味が違うー」

その隙に、少女は茂みを飛び出し、泣きながら走り去った。

「あ、おいー 待てよー」

少女の足は速くない。あれなら、追いつけそうだ。しかし――

ごごと、と謎の地震が発生し、雷真の足を縫いとめる。

夜々はひく、ひく、としゃくり上げながら、

「追いかけてめちやくちやにするんですね……猥褻のおもむくまま劣情を……っ」

「なっ―― 違うー そんなわけあるかー 空気を読め夜々ー」

「夜々の誘い受けは無視するくせに……あんな女狐の誘いに乗って……」

なだめる暇もない。夜々は雷真に飛びかかり、首を締め上げた。

よほど不満を溜めていたらしく、今日の夜々はいつにも増して力が強い。氣道が塞がり、血流が途絶える。急速に意識が薄れ――

どーんっ、と凄まじい轟音が響き渡った。

夜々が驚き、雷真を取り落とす。げほげほと吹き込みながら目を開けると、雷真の頭上で、空が真っ二つに裂けていた。

まばゆい閃光が時計塔を直撃している。フライパンに落としたバターのように、時計塔はたちまち溶け落ち、地響きを立てながら、ゆっくりと傾いだ。

まるでピサの斜塔。いや、もっとひどい。傾きはどんどん大きくなる。

ヴァルブルギス王立機巧学院のシンボル。百年の歴史を誇る時計塔が、霧のような粉塵を噴き出しながら、あっけなく崩れ落ちた。

式典の参加者が逃げ惑う。粉塵は見る間にあたりを覆い尽くし、雷真と夜々をのみ込んでしまった。

その最悪の視界の中、ほんの一瞬、おぼろげに見えたものがある。

上空に浮かび上がるシルエット。金髪をなびかせ、銅色の竜にまたがって、自らが引き起こした破壊の結果を見守る者。

伝説の竜騎士を思わせる、勇ましくも可憐な姿。それは――

「シャル……!?」



Chapter 1 光、こぼれ落ちたもの

1

時計塔の崩壊から数時間経ち、正午。

差し出されたバスケットを一瞥し、雷真はそっぽを向いた。

「せっかくだが、いらん」

冷たく拒絶され、真珠色の髪の乙女——フレイは石化した。

彼女が抱いたバスケットの中で、クラブハウスでも出せそうな、豪華なサンドイッチがびよこんと揺れる。ついでに、胸の大きなふくらみも。

「どうせ今日も何か入れたんだろ、毒物を」

フレイはおとものオオカミ犬にしがみつき、すんすんと鼻を鳴らした。

「泣き落としすな！ 泣きたいのはこっちだー」

「う……だって、信じてもらえない……っ」

「日頃の行いが悪いんだからな？ あんたが積み重ねた結果だからな？」



道理を論ず雷真の首に、じやきつとブレードが突きつけられる。

夜々が驚き、腰を浮かせる。雷真を救い出そうとする試みはしかし、ブレードが雷真の首にめり込むことで、あつけなく封じられてしまう。

雷真のすぐ横に、悪魔とも天使ともつかない異形の機械人形が出現していた。全身刃物のような、鋭角的なフォルムが特徴的。ロキの自動人形ケルビムだ。

「……何の真似かな、おとなりのロキくん」

「オレは謙虚で寛大だ。……が、どうにも許せないものが三つある。オレに命令する奴。オレに歯向かう奴。そして、姉貴を泣かせるクソ野郎だ」

「被害者は俺だよな!? 毎日毎日、毒物を授与される身にもなってみろ！」
刃が食い込み、雷真は言葉をのみ込む。

「——わかったよー 食えばいいんだろ、食えばー」

さゆるさゆると歯車を鳴かせて、ケルビムが拘束を解く。

フレイは紅い瞳に期待の色を浮かべ、バスケットを差し出す。

夜々は漆黒の瞳をますます暗く、底なし沼のようにして、雷真を見ている。

雷真は処刑台に向かうような気分、フレイのバスケットを受け取った。

「……本当に妙なものは入れてないんだな？」

こくり、とフレイはうなずいた。

「塩もラム酒もイモリの干物もサソリの粉末も目薬も入ってないな？」
こくこく。

雷真は覚悟を決め、ふわふわのタマゴサンドをつかみ上げた。
深呼吸をひとつ。思い切って、ぱくりっ、とかぶりつく。

「――ぶほっ！」

舌がしびれるほどに苦い。喉が焼ける。雷真はしばし、咳き込んだ。
無言でにらみつけていると、フレイは半べそをかいて白状した。

「医学部の教授が……開発中のお薬をわけてくれて……」

「……どんな薬だ」

「牛や馬の繁殖力を高める……」

「そんなものを混ぜるな！　つか、俺を騙したのか！」

「う……嘘じゃない、もん」

オオカミ犬の首に抱きつきながら、フレイは珍しく強情に否定した。

「いつもは、サンドイッチの具に、何かを入れるけど……」

「けど、何だ」

「これは、お薬に具を混ぜて、パンで挟んだもの……」

「ヘリクツをこねるな！　つか、もうそれ人体実験しろ！」

がたんつ、と椅子を蹴倒して、夜々が立ち上がった。

「もうついい加減にしてくださいー」

「おう、そうだ夜々。言ってやれ言ってやれ」

「どうして学習しないんですか雷真ー」

「……え、俺？ 俺に怒るの？」

「そんなにされても食べ続けるなんて……まさか、この女狐を愛して……!?」

狼狽した様子でフレイを振り向く。

フレイはほんのり頬を染め、意味ありげに視線をそらした。

ひくつ、と夜々がしゃくり上げ、ごっこ、と地震が生じた。

そして、最終的に――雷真がワリを食うのだった。

「……飛び降り？」

雷真の顔に絆創膏を貼りながら、フレイはおうむ返しにつぶやいた。

傷だらけの雷真を手当てしているのだ。慣れた手つきで消毒し、絆創膏を貼っていく。

運動神経は壊滅的だが、手先は器用なようだ。

夜々はふてくされて出て行った。と言っても、怨念じみた気配が窓の外から漂ってくるので、すぐ近くで監視しているのだろう。

窓の外は騒がしい。ザラザラとほこりっぽい大通りを、学生たちがひっきりなしに往来し、教授や警備、市の役人までもが出張つてきている。先刻の時計塔崩壊によって、学院は全体的に浮き足立ち、夜会とは別の緊張感に包まれていた。

雷真は外の様子を気にしながら、話を続けた。

「ああ。ついさつき、屋上から飛び降りたんだ。時計塔がぶつ壊れる直前にさ」

「……どんな子？」

「こう……髪は茶色で、帽子をかぶってて」

フレイは小首を傾げる。それだけの情報では特定できない。

「ほかには……ああ、ちょうど、あんな感じだ」

雷真が示すのは窓の外。木立ちの手前に、ひとりたたずむ女子学生がいる。茶色の髪に、平均的な背格好。あまり印象に残らないタイプの少女だが、じつとこちらを見つめていて

——こちらの視線に気付くと、ふいっといなくなってしまう。

ちよっと気になる態度だが、知らない顔だったので、雷真は少女のことなどすぐに忘れて、フレイとの会話に戻った。

「あとは、そう、何かシャルに似てるんだよ。顔とか体つきが」

「それ……アンリ。たぶん」

「アンリ？ 女だぞ？」

「アンリエット・プリュー」

「プリュー、だつて？」

アンリエットは、英語読みなら「ヘンリエッタ」のはず。仏語読みのファーストネームに、プリューの家名——シャルと同じ構造だ。

雷真の疑問を見透かしたように、フレイはあつさりと言った。

「アンリは、^{イレーヌ}（暴竜）の妹で、ルームメイト」

「マジか。つか、あいつの妹、この学院にいたのか」

「ううん、いなかった。こないだ、入ってきた……」

一週間ほど前、突然、グリフォン女子寮に入寮したそうだった。

転入生、それも^{イレーヌ}（暴竜）の妹となれば、うわさが聞こえてきそうなものだ。単に自分が疎いだけかと思つたが、フレイも詳しい経緯を知らないらしい。

「ふうん、似てるとは思つたが……マジで妹なのか」

目鼻立ちは確かに似ている。しかし——

妖精^{オウガ}のごとき美貌を誇るシャルに比べると、アンリは少々、地味だった。

髪の色もシャルのような金ではないし、肌の色もわずかに違う。同じバラ科でも、大輪のバラといちごの花くらい違う。

なぜか、もやもやする。古傷をえぐられたような気分だ。

「アンリ、六回も、自殺未遂をしてる。ライシンが見たのを入れれば、七回」

「……七回も？」

「首吊りのロープが切れたり、解毒が間に合ったりして、助かった……」

「へえ……それだけやって助かったのか。運がいいのか悪いのか」

「一週間やそこで七回とは多すぎる。とれだけ死にたいというのだろうか？
雷真は腕組みをして、考え込んだ。

学院に入るには、相応の資質はもちろん、かなりの学費がかかる。

今年は夜会の開催年度なので、入学希望者が少なく、選抜がゆるい……と聞いた。一回生は戦闘技術が未熟なので、戦いで不利になるからだ。だが、それにしたって、シャルの家庭は没落貴族。金銭的な余裕はないだろう。後援者が必要になる。

今になってシャルの妹が現れたこと。果たして、これは偶然だろうか。

ふと、となりのベッドで、ロキが険しい顔をしていることに気付いた。

「何だ、ロキ。何か知ってるのか？」

「……オレは謙虚で寛大だが、憶測でものを言う奴は気に食わない」

だから言わない——ということらしい。

「何だよ。言いかけてやめるなよな」

「オレがいつ言いかけた。言いがかりをつけるな、バカが」

「バカはおまえだ。言葉尻をつかまえて揚げ足を取るなんざ、頭でつかちのいい見本だぜ。話しかけて欲しいオーラを出しまくってたくせに」

「何がオーラだ。そんなものが実在するか、夢見がちな東洋思想バカめ」

「慣用表現だ。文学だ。つか、東洋をバカにするな西洋バカ」

「黙れ世界一周バカ」「太陽系バカ」「銀河系バカ」「四次元バカ」

びきびきと血管を浮き立たせ、子どもじみた言い争いを始める二人。フレイがケンカを止めようとして、ふと、思い出したように言った。

「あ………（暴竜）って言えば。昨日から、行方不明」

雷真は耳を疑った。何だって？

「寮に、戻って……こなかった。寮監が、大騒ぎ」

最後まで聞いていない。雷真は跳ね起き、裸足で病室を飛び出した。

2

数分後、ロビーの電話機にとりついて、雷真は押し問答を繰り返していた。

「だから、硝子さんを出してくれー 急いで確かめたいことがあるんだー」

「雷真殿、少し落ち着いてください。主は今、少将殿と——あ、主」

誰かが受話器をもぎ取ったようだ。直後、いろりとは別の声がした。

「騒がしいわね、坊や。となりの部屋まで聞こえてきたわ」

「硝子さんー」

「遅い連絡ね。時計塔が砲撃されたと聞いて、心配していたのよ」

「……すまない。連絡するところまで、気が回らなかった」

「何事もなかったようでも何よりだわ。夜々に無茶をさせたようだけど」

ざくりとする。そう言えば、雷真は墜落死しかけたのだ。

この話題には触れたくないし、今はそれどころではない。雷真は改まって、

「それで、その……頼みがあるんだが」

「私は便利屋じゃないわ」

「それは……そうだが、その……」

「貴方もよ、坊や。自分の立場をわきまえなさい」

硝子はこう言っている。「これ以上、余計なことに首を突っ込むな」と。

雷真の考えなど、硝子はお見通しというわけだ。

「私との賭けを忘れたの？ 坊やには死ぬ自由すらないのよ」

「……命の危険があると決まったわけじゃない。探りを入れるだけでも」

「いい加減にして」

硝子の声がひび割れる。かつてない反応に、雷真は口ごもった。

「今すぐベッドに戻りなさい。口答えは許さないわ」

口答えする間もなく、がちゃんつと回線は切れた。

硝子は怒っていた……ようだ。声にいらだちがにじんでいた。

あの硝子をいらだたせるなんて、そうそうできることではない。こんなときだというのに、雷真はほんの少しだけ、誇らしい気分になった。

と言っても、もちろん最悪の気分だ。雷真は奥歯を噛み、受話器を置いた。

「雷真……」

いつの間にやってきたのか、背後に不安げな夜々が立っていた。

「硝子はだめって言ったんでしょ？」

「ああ」

「よかった。それじゃ、大人しく病室に戻ってください。シャルロットさんの行方が気になるなら、夜々が捜してみますから」

「支度をしろ、夜々。今すぐ退院するぞ」

雷真はくると向きを変え、急いで病室に取って返した。

「え——待ってください雷真——」

病室に戻るなり、雷真は病衣を脱ぎ捨てた。

包帯越しに引き締まった胸板がのぞく。腹筋は見事に割れている。フレイは飛び上がり、真っ赤になって、ラビと一緒に出て行った。

不審そうな口キを尻目に、制服に着替える。右腕が上手く動かせず、おまけに激痛が走るので、シャツを着るのにも難儀した。見かねた夜々が手伝おうとしたが、変なところを触ってきたので、でこびんをかまして遠ざけた。

着替えを終えると、次はとなりの医務室に向かう。

常勤医のクルーエル医師は、ピーカーでスーブを煮ていた。コンソメのいい香りが空腹にこたえる。雷真は香りを振り払い、クルーエルの前に進み出た。

「何だ、おまえ。その格好は」

クルーエルの眼鏡の奥で、二つの瞳が鋭く光った。雷真の背筋が寒くなる。この男には、ただの医師とは思えない凄みがある。

「まさかとは思うが、退院したいとか言い出すんじゃないかな？」

「意外性がなくて悪いな」

「……意味がわかって言ってるのか？」

指先で眼鏡のブリッジを持ち上げ、値踏みするような視線を向けた。

「男が減るのは大歓迎だがな。俺が退院許可を出すってことはつまり——」
「夜会への復帰を意味する、だろ」

「そうとも。おまえは再び（第百位）の身分に戻る。たった今からな」

つまり、今夜から、夜会の舞台に立たなければならぬ。

着替えも満足にできない雷真が、だ。

雷真はちらりと夜々を見やった。夜々はハラハラした様子で、しかし口を挟まず、何かに耐えるように、切なげに雷真を見つめていた。

雷真が黙っていると、クルーエルはあきれ顔で頭をかいた。

「まったく、正気じゃねえな。抜糸もまだだつてのに。今無理をすりゃ、長引くぞ。最悪、一生、元通りにならない」

「いや、もう治った。抜糸は後日、顧みにくる」

「治ったつて……。そう言えば、さっきの爆発——いや、爆発かどうかはまだわからんか。要するに、時計塔がぶつ壊れたアレだけだな」

突然、そんなことを言う。怪訝に思いながら、雷真は続きを聞いた。

「医療班のおんにゃの子が話してたんだ。アレをやらかしたのは、（暴竜）シャルロットだつてな」

「——」

「ふん。東洋人の表情は読めない……。なんて言われるが、ありや嘘だな。顔に出てるぜ。おまえは何だ？ あのだらゴン娘の彼氏なのか？」

「そうだ」

がちこんつ、と夜々の頭に見えない鉄槌が振り下ろされた。

夜々はよろりとよろけ、一瞬後、猛烈な殺氣を放ち始めた。髪が逆立ち、毛が蛇のよう
にうねる。雷真はあわてて続きを言った。

「とか言ったら、許可を出してくれるのか？ もちろん彼氏じゃないんだが当然」
長い嘆息。クルーエルは（お手上げ）のポーズをして、

「勝手にしろ。バカ野郎」

「そうする。世話になった」

雷真は即座にきびすを返し、医務室を後にした。
振り向きもせず、ずんずんと廊下を渡っていく。

「待ってください雷真！」

エントランスの手前で、夜々が雷真の左腕にしがみついていた。

「いや、落ち着けよ夜々？ 彼氏うんぬんは嘘だからな？」

「それは後で聞いて詰めます。それより、何をそんなにあせってるんですか？」

「……俺は、この感じを知ってる」

胸が熱い。息苦しい。確かに、これは焦燥だ。

絶望的な破滅の手感。もうすぐ、取り返しがつかなくなる。その確信がある。

黒煙をかきわけ、炎の中をさまよったあのとき。

妹を探し、そして失ったあのときと、まったく同じ感覚。

「どうして……そんなに必死になるんですか？ シャルロットさんは、いずれ雷真の前に立ちふさがる敵です。……強敵です。それに、雷真は硝子が好きなんでしょう？ 硝子がだめって言ったのに、どうして」

「……それは」

「目的を忘れないでください。それに……立場も」

そう、雷真は軍の走狗。学院にいるのも、公式には、あくまで諜報活動の一環だ。夜会に潜り込み、列強の最新機巧技術を探る密偵——その身分は硝子の口利きあつてのものだし、復讐だつて黙認されているにすぎない。

この上、身勝手な理由で夜々を使い、危険を冒す自由などない。

そのとき、「がうつ」と犬の吠え声がこだました。

廊下に犬がたむろっている。はっはっはっはっ、という呼吸音がうるさい。数は五頭。コリーにシェパード、グレートデンにダックスフンド、そして黒いオオカミ犬。肩や足にはおそろいの装甲。(ガラム) タイプの自動人形だ。

彼らに囲まれて、いつになくキリッとした顔のフレイが立っていた。

「(暴竜)、探すんでしょう？」

「そのつもりだが……」

「私も、手伝う」

ごく短い時間、雷真は思いを返らせた。

フレイは夜会におけるライバルだ。今夜にも激突し、どちらかが退場するかもしれない。フレイには戦わなければならぬ理由があり、それは簡単にあきらめてしまえるものではない。彼女にとって、夜会は最優先事項のはずだ。

フレイには夜会に専念して欲しい。ライバルではなく仲間として、そう思う。
だが――

雷真は夫たちに視線を走らせた。

彼らは一頭残らず禁忌人形。ただけに、探索能力はアテになる。それに、彼らは全部で十三頭もいる。雷真と夜々が二人で捜すより、はるかに効率的だろう。

雷真は義理と人情をはかりにかけ、結局は人情を優先した。

「恩に著る。手伝ってくれ」

一方のフレイは義理を通し、こくり、と力強くうなずいた。

大講堂の三階に（夜会執行部）は置かれている。

執行部の意思決定は、教授総代、学生総代、学院長の三者で行われる。大人の意向が重視されがちなので、議長は学生が務めることになっていた。

そして今、小ホールで会議が始まろうとしていた。

ホールのすみでは、教授総代が助手と談笑中。床には鮮色のじゅうたんが敷かれ、壁にはワインレッドのカーテン。ピクトリア調の大きなテーブルセットはもちろん円卓。席は四つあり、そのひとつには、既に議長役の学生が座っている。

大理石の三角柱には（議長セドリック・グランビル）の銘。

座しているのは少年だ。小柄で細い体つきは、まるで少女のよう。酸し出す雰囲気は貴族階級のそれ。優雅に足を組み、陶磁のカップで紅茶をすすっている。

そこに、古びた扉を開け、ひとりの少女が入ってきた。

あまり印象に残らない顔立ち。ただし、肩に白いハットがとまっていて、そのせいで少し目立ってしまったている。

少年がカップを置き、少女を手招きする。

「戻ったね、ラヴェンナ。君に楽しい知らせだよ。（下から二番目）のことだけどね——
どうやら、シャルロット・プリューを捜す気らしい」

声を潜め、少女にだけ聞こえる声で言う。

「泣かせる話だねえ。重傷の怪我人と、夜会でぶつかる（敵）が、彼女のために骨を折るつもりなんだ。」（暴竜）さんは、案外、人望があるんだね」

少女は肩を強張らせ、無言で少年をにらんだ。

「行つてあげなよ」

少女が目を見開く。少年の意図をはかりかねているらしい。

「わかるだろう？ 連中にウロチヨロされるのは不愉快だと言つたんだよ？」

少年はにこにここと、しかし毒を含んだ微笑を浮かべ、ささやいた。

「君だつて困るはずだよ。約束の刻限まで、もう四十時間もないんだ。君の間抜けな失敗のせいで、条件はどんどん悪くなつてゐるんだからね」

少女は唇を噛み、視線を泳がせ、ためらつた。

少年はくすつと笑つて、パチンと指を弾いた。

その瞬間、少女の体に異変が起こる。

髪が、肌が、花びらのように散り、下から鮮やかな色彩がのぞく。

髪は輝くような金髪に、肌はまぶしいほどの白に。

肩のハトもまた、銅色の仔竜へと姿を変えていく。

教授が気付き、少女に視線を向けてきた。少年もまた、驚いたふうを装つて少女を見る。こうしてはいられない。少女はあわてて窓から飛び出した。

空中で巨大化した竜にまたがり、空へと消える。

その姿は、誰がどう見ても、シャルロット・ブリューだった。

4

学院を南北に貫くメインストリート――

その中央、時計塔があつたあたりは、封鎖されて通れなかった。

時計塔は自重で崩れ落ち、まったく原形をとどめていない。ただの瓦礫の山だ。ありし日の優美な姿など、想像もできない。

仕方なく、林の中のわき道を通つて、雷真たちは北に向かった。

つつい、と夜々が追いついてきて、雷真の耳元でつぶやく。

「雷真。このまま行くと、グリフォン女子寮ですよ？」

「ああ。まずはシャルの妹に話を聞く」

夜々は露骨に眉をひそめた。明らかに嫌そうだ。

「あいつの態度、普通じゃなかったろ。シャルの事情を知つてるはずだ」

「どうしてそう思うんですか？」

「カンだよ。俺はカンがいい方だ。知つてるだろ？」

「いいえ。雷真は鈍感です」

夜々ヨヨはくさくさした調子で否定した。フレイまで、こくこくとうなずく。

知らないうちに共同戦線が張られている。いつの間にそんなに仲良くなったのか。雷真は不満だったが、仲がいいのはいいことなので、スルーした。

間もなく、林の雰囲気が変わる。荒々しい原生林から、整備の行き届いた木立ちへと。さらに行くと、白垂のグリフォン女子寮が見えてくる。

女子寮の前に到着したとき、エントランスから女性が飛び出してきた。

年齢は二十代半ば。おっとりとした顔つきの、品のいい女性だ。

寮するに寮監寮長だろう。彼女は雷真に目を留め、フレイをとがめた。

「こら。男の子なんか連れてきちゃだめよ。寮内は男子禁制です」

「う、違う……。アンリを、捜してる」

寮監が顔色を変える。緊迫した空気を漂わせつつ、

「それなんだけど。アンリちゃん、また姿が見えないのよ」

「え……」

「捜しに行くわ。また……変な気を起こしてなければいいんだけど」

それじゃあね、と言って、あわただしく駆けっていく。フレイはそれを見送り、困った顔で雷真を振り向いた。雷真はきびすを返し、

「十中八九、命に^{たま}関わる。急いで捜そう」

「待って。ライシン……ここで、待ってて」

そう言うのと、フレイは理由も告げず、ひとりで寮に入って行った。

顔を見合わせる雷真と夜々。わけがわからないが、大事な犬たちを置いて行ったところをみると、すぐに戻ってくるだろう。

焦れながら待つことしばし。貴重な数分を費やして、フレイは戻ってきた。

新たに八頭もの犬を従えている。もちろん、〈ガルド〉タイプの自動人形^{オート人形}だ。

「お待ちせ……」

「遅いぞ。そいつらを連れてきただけか？」

「ううん。これ、とってきた……」

フレイがポケットから引っ張り出したのは、白地に水色のストライプが入った、小さな布切れだった。三角形で、生地は本綿。見るからにやわらかそうだ。

それが何だかわかった途端、雷真は思わず赤面した。

「何でそんなもの持ってたんだーどこから持ってきたー」

「アンリの部屋」

「ってことは、それはあいつのパン……つか、そんなもの、どうするんだ？」

「こうする……」

フレイは大たちを集め、アンリの下着を差し出した。大たちはふんふんとおいを嗅ぎ、数秒後、一斉に「がうー」と言った。

びゅい、と口笛を吹くフレイ。その途端、ラビ以外の十二頭が散開した。主人の意図を正確に理解し、それぞれが別方向へと駆け出す。

なるほど、おいで捜すのだ。

感心して眺めていると、夜々ははつと口元を覆い、

「雷真—— そんなにパンツのにおいが嗅ぎたいなら、夜々のを——っ」

「そんなことは考えてない—— そんな変態はおまえだけだ——」

しばらくして、はるか遠くで「おおおん……」と遠吠えが聞こえた。

ラビがのっそりと立ち上がる。その背に、フレイはうんしょつと腰かけた。

「アンリ……見つけた」

「え、もう？」

うなずき、フレイはラビをスタートさせた。あわてて、雷真と夜々も続く。

遠吠えは断続的に続いている。いつしか数が増え、ハーモニーが生まれていた。

フレイは吠え声を見失うことなく、木々のあいだを縫うように進む。雷真はなまった尾を必死に動かす、フレイに追いつがった。

最悪の想像が脳裏に浮かぶ。



大たちが見つけたアンリが、既に死体になっているのではと。

野戦演習場の手前、小さな湖のあたりに差しかかる。

まだ若い樫の樹の根元に、大たちはいた。樫の樹をぐるりと取り囲んでいる。フレイに気付くと、大たちは遠吠えをやめ、しつばを振った。

樫の樹上には、仔細のような乙女の姿。

首を吊るつもりだったのか、枝にロープを引っかけている。だが、使う気力はないようだ。少女は幹にしがみつき、泣きわめいていた。

「いやー！ 犬ー！ あつち……あつち行つて……誰か助けてー！」

アンリだ。よかった。まだ生きている。

ぶるぶる震えるさまは、まさに小動物。これから自殺をしようという人間が、恥も外聞もなく助けを求めている。

ほっとしたのもつかの間、怯えたアンリは尻を浮かせ、弾みで手をすべらせた。

雷真はあわてて真下にすべり込み、際どくアンリを受け止めた。膝をクワシヨンにして勢いを殺す。ずきんと鎖骨に激痛が抜けた。

「い、いや……っ、犬っ、犬ー！」

「落ち着け。大丈夫だ。こいつらはちゃんとしつけられて——」

「ひっ!? 男ー！」

突き飛ばされ、あつけなく転がる雷真。

アンリは夫が嫌いらしいが、男はもつと嫌いらしい。

雷真は釈然としない気分で起き上がり、アンリの様子を観察した。

十三頭もの犬に囲まれ、アンリは失神寸前だ。

「おい、アンリエット・ブリュー」

名を呼ばれ、アンリはびくつ、と飛び上がった。

「シャルはどこだ。ゆうべは戻らなかったのは本当か？ さっきの時計塔倒壊と何か

関係があるのか？ おまえは何でそんなに死にたいんだ？」

アンリは帽子を引つ張り、顔を隠して黙り込んだ。

「何とか言えよ。おまえ、シャルがどこにいるのか知ってるんじゃない——」

「待つてください雷真。そんなに一度に訊いてもだめです」

珍しく、夜々が口を出してきた。夜々はわけ知り顔で胸をそらし、

「ここは夜々に任せてください。アンリエットさん、本当のことを言うてください。貴女

は狂言自殺で雷真の気をひこうとしているんですね——」

ごち、とげんこつを落とし、夜々を黙らせる。

夜々は頭をおさえてうずくまり、めそめそと泣き出したが、雷真は無視して、フレイに目配せした。自分はどうも、アンリに嫌われているようだ。雷真が強引に問い詰めるより、

女同士の方が話しやすいだろう。

という考えを、フレイは察してくれたようだ。こくりとうなずき、

「う……アンリ。狂言自殺でライシンの氣をひこうと——」

雷真は再びげんこつを落とし、フレイのボケに突っ込んだ。

頭をおさえてうずくまるフレイを無視して、アンリに向き直る。

「いやっ、男……野蠻人！」

「逃げるな。知ってるなら、シャルの居場所を救えろ」

途端にアンリは口をつぐんだ。この反応は——知っている！

「言え！ 言わねーと、この犬たちをけしかけるぞ！」

空氣を読んで、がうがうとうるさくなる（ガルム）たち。アンリは「ひーっ」と悲鳴をあげ、頭を抱えて泣き叫んだ。

「獣姦させて楽しもうなんて最悪の裏切野郎！ お母さまごめんなさい……私、ケダモノとケダモノみたいな男にめっちゃくちゃにされちゃうー」

ひょおおおつ、と凍てつく殺氣が背後から吹き込み、雷真は戦慄した。

ぜんまい仕掛けの人形のように、ざこちなく振り向く。雷真の背後に立っていたのは、悪鬼羅刹も裸足で逃げ出す、本物の修羅だった。

「雷真……そんな……そんな特殊な趣味を……っ」

「ちよ……落ち着け夜々。冷静になれ。常識的に考えろ」

「夜々にはキスもしてくれないのに……そんな女と……獣を交えて、乱交……っ」
ぶっん、と何かが切れる音がして、夜々が壊れた。

「ほかの女に盗られるくらいなら、雷真を殺して夜々も死にますー！」

「だばーつと涙をあふれさせ、重たい鉄拳を繰り出してくる。際どくかわすと、こぼしは
櫻にめり込み、へし折ってしまった。

雷真の背筋を冷たい汗が伝い落ちた。

アレ……これ、シャレになってくない？

夜々がゆらりとこちらを向く。あからさまな命の危機――思わず氣を取られた一瞬に、
アンリは脱兎のごとく逃げ出した。

「しまったー フレイ、あいつを追ってくれー」

しかし、反応がない。不思議に思っただけ振り向き――雷真はぎょっとした。

フレイはかつてないほど冷ややかな目をして、雷真をにらんでいた。

「ライシン……最低……へんたいやろう」

ぼそつとつぶやき、ラビたちを護るように背中に隠す。

彼らはフレイの大事な家族。変なことに使おうとすれば、当然怒る。雷真は頭痛をこら
え、何かもう、泣きたい気分で怒鳴った。

「あんたまで何だー 妙な誤解をするなー」

だめだ。ボケが二人もいるとツツコミが追いつかない。この場にシグムントか、せめてシャルがいてくれたらと、心の底からそう思った。

5

仰向けに倒れた夜々と、へたり込んだ雷真が、せえはあと荒い息をつく。

夜々は禁忌人形、自前で魔力を供給することができる。と言っても、そのエネルギーは無限ではない。魔力が尽きて、へばってしまったのだ。

夜々はしくしく泣いていたが、とりあえずは落ち着いたようだ。雷真は安堵して、近くの木陰、体育座りのフレイに向かって言った。

「あんたもいい加減わかったよな？ 俺は変態じゃないからな？」

「う……信じてた」

「嘘つくなー 思いつきり疑ってたろー」

「アンリ、追いかける？」

フレイは軽く頬を染めつつ、話を本題に戻した。

「居場所、わかる……。アンリには、レビーナがついてる」

「お、さすがだな。だが……とりあえず、アンリはもういい」

きょとん、として、小首を傾げるフレイ。

「あの調子じゃ、口を割りそうにない。無理やりつてのはガラじゃないしな」

「でも、ほつといたら、また自殺未遂を……」

「するかもな。だが、それは大丈夫だ」

「……………」

「だから、ひとまずシャルの方を捜す」

シャルと聞いて、夜々が飛び起きた。

「でも、シャルロフトさんの手がかりはないんですよ。いくら彼氏だからって」

「根に持つな。そのネタはもう忘れろ」

「捜すと言っても、心当たりはあるんですか？」

「心当たりはねーが、シャルは学院のどこかに潜んでいる……と思う」

「彼氏のカンですか？」

「根に持つなって。カン……とはちょっと違うが、まあ希望的観測だ」

立ち上がって土を払う雷真。フレイもうんしょと腰を上げ、

「（暴竜）のパンツ、取ってくる？」

「パンツにこだわるな」

「じゃあ、ブラ——」

「お約束だなー 下着にこだわるなど言ってるんだー」

フレイは不満そうだったが、とにかく、何かを取りに戻ろうとした。

「ああ、待て待て」

雷真は本々の梢に目をこらし、空の色を見て言った。

「そろそろ夜会の時間だろ。あんたは戻れよ」

大たちの調整や、体調管理もあるだろう。十三頭もいれば、エサやりだけでも大変だ。

便の始末など考えたくもない。

「……ライシンは？」

「俺はシャルを捜してみる。心配しなくても、日が暮れたら、そっちに行くよ」

「でも……」

「大丈夫だ。つき合わせて悪かったな」

フレイは後ろ髪を引かれる様子だったが、素直にラビに乗り、去って行った。犬たちが群れをなし、その後を追う。

「どこぞの神話にいなかったか、ああいうの。大をいっぱい引き連れてさ」

「フレイさんが女神だと言いたいんですか、雷真……」

いじけて小石を蹴る夜々。雷真は苦笑して、その頭にぼむと手を置いた。

「俺の女神はおまえだけだよ。アテにしてるぜ、勝利の女神」

「雷真……♡」

「あとは、硝子さんが別の意味で女神なわけだが」

「夜々もそっちの意味がいいです……っ」

怒る元氣も出ないらしく、夜々はうちひしがれ、さめざめと泣いた。

「さて、捜すとは言ったものの、どうやって捜すか……」

雷真はあごに手を当て、考え込んだ。

シャルが学院に潜んでいるのなら、そう簡単には見つからない場所のはず。警備や風紀委、教授陣にも見つからない場所。そんな場所があるだろうか。

（キンバリー先生なら、相談に乗ってくれねーか？）

それは有力な選択技だ。キンバリーは魔術師協会にも顔が利く……らしい。あきれ顔で嫌みを言われ、また借りをつくってしまうが、話してみる価値はある。

ほかにできることは……。

「……よし。まずはグリフォン女子寮に向かう」

「シャルロットさんのパンツを盗むんですか？」

「俺はどんな変態だ。なに、ちよっとアンリの周辺を探りたいのさ」

「え、でも今、アンリエットさんは捜さないって……いえ、わかりました。おとします

雷真。雷真が行くところ、ほかの女のベッドの中でも」

「行かないからな？　あと、それはおともじゃなくてつきまといだからな？」
ともかく、二人は並んで駆け出した。

太陽は既に傾き、林の中は少しずつ暗くなっている。

草むらや木の根に足をとられながら、それでも速度を落とさずに駆け続ける。
道のりの半分ほどを駆け抜けたとき、不意に、前方の木々がざわめいた。

何者かの気配——強い——大きい！

「夜々、止まれ！」

相棒を押しとどめ、自身にも急制動をかける。

直後、頭上で風が鳴いた。

尾で梢をなぎ払い、怪物が上から降りてくる。

どすん、と重々しく着地したのは、銅色のうろこ四枚の翼を持つ竜。

野獣とは明らかに違う、高い知性を感じさせる眼差し。威厳あふれるその姿は、怪物と
言うにはあまりに美しく、偉大だった。

竜の背には、彼女がまたがっていた。

シャルロット・ブリュ。

次期魔王の有力候補にして、雷真とランチをともにする仲の少女。

シャルはいつもの制服ではなく、黒ずくめの衣装に身を包んでいた。甲冑ほど堅牢ではないが、胸や肩など、要所を保護する防具がついている。暗殺者か、あるいは軍人に好まれそうな、戦闘的な装束だ。

夜々が普段とは違う意味で警戒し、雷真の前に出ようとする。雷真はそれを制し、自ら竜の前に歩み出た。

「よう。授業も受けずにお散歩か。夜遊び娘」

普段通りの軽い口調で呼びかける。

「訊きたいことが山ほどあるんだ。ちよいと茶につき合えよ」

「……おあいにくね。私には話すことなんて何もないわ」

シャルは冷淡に応じた。感情を失くしてしまったような——そう、まるで鉄仮面のような表情で、さらに言う。

「警告よ。アンリにはちよつかいを出さないで」

「断る」

ほんの一時、シャルの無表情が崩れ、いらだたしげな色が浮かんだ。

「だが、おまえが素直に戻ってくるなら、考えてもいいぜ？」

「……バカ。あきれたバカ。相愛わらず、文脈から判断できないのね」

ぎんつ、とシャルの瞳に殺気が宿る。

「私は関わるなど言ったのよ」

シャルの体に強い魔力が満ち、ビリビリと大気を震わせる。

肝が冷えるほどの迫力。巨竜が放つ威圧感も相まって、雷真の背中に鳥肌が立つ。

「従わなければ——貴方を殺すわ」

夜々が目を丸くし、次いで、盗み見るように雷真を見た。

雷真は肩をすくめ、やれやれといった調子で言った。

「こないだは、俺を護つてくれると言ったよな？」

「うるさいー 殺すったら殺すわー だからもう関わないでー」

無表情は完全に壊れた。シャルは顔を青け、竜の腹を蹴った。

ばさりっ、と一度大きく羽ばたいて、竜が跳躍する。

巨体に似合わない軽やかな飛翔。竜は見る間に高度を上げ、飛び去った。

あとには、猛烈な突風と、ちぎれ飛んだ青葉だけが残る。

竜が飛び立つ瞬間、シャルが光るしずくを落としたのを、雷真は見逃さなかった。

「……バカはおまえだよ、シャル」

雷真はふうとため息をつき、それから、皮肉めいた笑みを頬に刻んだ。

「目の前であんな顔されて、俺が引き下がるわけねーだろ」



Chapter 2 破滅の序曲



1

七日前の午後、シャルは乱暴な靴音を響かせて、室内をうろろしていた。

扉の前まで行って、立ち止まり、引き返してきて、再びUターン。

テーブルに蹴つまずき、テキストの山を崩してしまふ。

昼寝中のシグムントが目を覚まし、ベッドの上であくびをした。

「そんなに気になるのなら、雷真の様子を見に行け」

「なっ、こっ、ばっ——きき気にならないわよ！」

「予習が三日も滞っているぞ。手につかないのだろう？」

「だだだからって、そこに結びつけるのは強引よ。こじつけよ。あのバカの容態なんて、全然気にならないわ。あんな体力バカ、平気に決まってるじゃない。それに……どうせ、面会謝絶でしょ」

「キンバリー女史に口利きくしかきを頼めばいい。君の頼みなら、嫌とは言わない」

「とどどうして私がそこまでしなくちゃならないのよっ」

腕組みをして、ふんつとそっぽを向く。

「意地を張るな。友達が負傷していれば、気になるのは自然なことだ。頑^{かた}になればなるほど、君は本心をさらしてしまっているのだ」

「……本心？」

「奮^{ふん}真^{しん}を男として意識しているのだろうか？」

「そっ——そんなわけ、ないでしょう。おかしいこと言わないで。お昼のチキンをニシンの缶詰にするわよ。くさいやつよ——」

「そう、君はそうやって否定したがつている。それはなぜだ？」

「否定なんて——」

シャルはなおも言いかけたが、やめた。

シグムントはシャルの十倍近い時間を生きている。その上、シャルが生まれたときから一緒にいるのだ。シャルのことなど、お見通しだ。

「……だって。もし、私があいつのことを好きになったのなら」

はっとして、怒り出す。

「だから、仮定よー フィクションよー あくまで可能性の話をしてるのよー」

「わかったわかった。それで、仮に好意を持ったのなら、何だと？」

「私……すごく……軽い女みたいじゃない」

じわっと目尻めじりが湿り気を帯びる。シャルは今にも泣き出しそうな、あるいは怒ったような、ちぐはぐな顔でシグムントをにらんだ。

「ふむ。難儀なものだな、人間というのは。だが、君のそれは——」

そのとき、がたんつ、とノックもなしに扉が開いた。

がらがらと台車を押して、おっとりとした雰囲気おんきようの寮監せうかんが入ってくる。

「あら、シャルちゃん。まだ出かけてなかったの？ 今日では三限から？」

「ミス・ゼス——何ですか、その荷物。トランク？」

「喜んで。シャルちゃんにルームメイトができたわよ」

「なっ——勝手に決めないでください！ 急にルームメイトなんて！」

「口答えは許しません。当グリフォン女子寮は二人一部屋が原則です」

「でも、今まではずつとひとりだったのに！」

「それはシャルちゃんがトラブルを起こしたからでしょう？ ラヴェンナちゃんを窓から

突き落つとそうしたり、ナンシーちゃんを泣かしたり」

「う……でも——」

「まあまあ。シャルちゃんもきつと喜ぶわ。——入ってらっしゃい！」

寮監は歌うような口調で、廊下に向かって呼びかけた。

ややあつて、申し訳なきように、おずおずと姿を見せる少女がひとり。

内気そうな少女だ。亜麻色の髪を隠すように、帽子を目深にかぶっている。

その顔を見て、比喩ではなく、シャルは飛び上がった。

「アンリ―」

信じられない。寮監の前を突っ切り、少女のもとに駆け寄る。

恐る恐る、手を伸ばす。指先は確かに触れた。幻ではない。

「無事だったのね!? 元氣だった!? 今までどこにいたのよ!? お母さまは!? どうして

学院に――ルームメイトってどういうこと!?」

「落ち着け、シャル。それでは、アンリでなくても困惑する」

たしなめたのはシグムントだ。びよんと飛んで、シャルの頭にとまる。

「久しいな、アンリ。と言つても、君の感覚で、だが」

アンリはほんの少し緊張を緩め、かすかに微笑んだ。

「久しぶり、シグムント……」

「無事で何よりだ。シャルはずっと、君のことを心配していたのだ」

シャルがふいつと横を向き、シグムントが振り回される。

その拍子に涙が飛んで、きらきらと光りながら床に落ちた。

「お、お姉さま……?」

「……別に、いいでしょう。泣いたって、おかしくないでしょう」

シャルはたまらなくなつて、ぐつとアンリを抱きしめた。

少し大きくなつた。だが、この香り、抱いた感じはまさしくアンリだ。生きてた。生きてて、くれた……

されるがままだったアンリも、いつしか、シャルの背中に手を回す。

初め、遠慮がちに。やがて、しつかりと。

寮監とシグムントが、それぞれに優しい眼をして、抱き合う姉妹を見つめる。

「それで、一体どうしたのよ。学院にはどうして？」

さつとアンリの表情が暗^{くろ}った。シャルから身を離し、急によそよそしくなる。

「……役目が、あつて」

「役目？　どんな？　何のためにここにきたの？」

アンリはきつく目を閉じ、苦しそうにつぶやいた。

「お姉さまを……不幸にするために」

2

シグムントが飛び去った後、しばらく、雷真^{かみまこと}は立ち尽くしていた。

見上げる樹上には夜々がいて、ひたいに手をかざし、遠くを見つめている。

「どうだ、夜々？」

「すみません雷真。もう、どこにも見当たりません」

雷真は首をひねった。シグムントはあの団体だ。嫌でも目立つ。身を潜められるような場所は限られているはずだが……？

「よし、だったら足で探すぞ」

身軽に飛び降りてきた夜々が、何とも難しい顔をする。

「でも夜々は、学院の外には……」

「心配するな。探すのは学院の敷地内だ」

「——やつぱり、シャルロットさんは学院の中にいると？」

「遠くに逃げたなら、飛んでる姿が見えたはずだ。すぐに消えたってことは、近くに降りたってことだろう」

「でも、小紫の（八重雲）みたいに、隠形する術があるのかもしれませんが」

「もちろん、その可能性はある。だが、その場合は」

「……その場合は？」

「お手上げだ。どうしようもねえ」

学院の外となれば、範囲が広がりすぎる。だから、中である可能性に賭ける。

歩き出そうとして、ふと、雷真は鋭い視線を周囲に巡らせた。

「雷真？　どうかしましたか？」

「……今、誰かに……いや、行こう」

雷真は夜々を引き連れ、シグムントが飛び去った方角に駆け出した。

それから数時間、食事も摂らずに捜索を続けた。

目没後も、ランプのあかりを頼りに、シグムントの痕跡を探す。シグムントの巨体なら、着地の際に枝を折り、草を踏み荒らすはずなのだ。

だが、それらしき痕跡は見つからない。

夜々が夜空を見上げ、心配そうに振り返った。

「雷真……そろそろ」

とろんとした目をして、しきりにまぶたをこする。

「疲れたか？」

「いいえ。夜々は硝子しろうどが作ったからくり人形。雷真よりも丈夫です」

あわてて微笑む。しかし、どこか弱々しい。

昼間のドタバタで、かなり消耗しているようだ。

「……わかった、夜会に戻ろう。悪いが、もうひと仕事頼むぜ」

「はい。任せてください」

ほつとした様子でうなずく。やはり、疲れているのだろう。

雷真は夜空を見上げ、星で方向を確かめた。時計塔がなくなつたため、とつさに方位がわからないのは不便だ。

「こつちだな。急ごう。一時になつちまいそうだ」

「今夜は八七位が参戦する夜ですよね。フレイさん、もう倒したでしょうか？」

「行けばわかるさ」

本立ちを抜け、整備された庭園に出る。そのまま庭園を突っ切り、メインストリートを南進した。

その途中、時計塔の跡地を見た。

こんな時間だというのに、学生たちがたむろっている。瓦礫の山にロープを張り巡らし、監視しているのは風紀委の学生だ。一般の学生たちの姿もある。

学生たちは呆然とたたずんでいる。見れば、泣いている女子もいる。

まるで葬式会場。雷真のようなよそ者にはわからないが、時計塔は単なる建造物ではなく、やはり学院のシンボルだったようだ。

複雑な想いを抱え、彼らの後ろをすり抜ける。

ほどなくして、医学部と法学部のあいだ、交戦フィールドに到着した。

煌々とガス灯がたかれているが、時間が時間だけにギャラリーの姿はまばら。ストーン

ヘンジのようなフィールドの中には、誰の姿もなかった。

「フレイさん、いませんね。もう帰ったんでしょうか？」

「どうか。だが、気を抜くな。俺たちは敵同士だ」

夜々は不安そうに眉を寄せ、上目遣いで雷真を見た。

「雷真……今、フレイさんと当たるのは……」

「さすがにキツいな。昼間、誰かさんに襲われてバテバテだしな」

うつ、と言葉に詰まる夜々。責任を感じているのか、しゅんとした。

普段は十三頭の《ガルム》を連れているフレイ。戦闘においても五頭を同時に操れるという。雷真はまだ《音圧操作》の魔術回路を把握できていない。もしぶつかることになれば、やられる危険もある。

だが、いずれはやらなければならない。

ギョラリーの会話に耳を澄ましていると、おぼろげに状況がわかった。どうやら、今夜の主賓——八七位はまだ、現れていないらしい。

「一〇時五五分、《下から二番目》が舞台上に上がりました」

オペラ歌手のような声で、執行部の女子学生がコールする。

交戦フィールドの中央で、夜風に吹かれながら、敵の到着を待つ。

八七位とは誰だったか。思い出せない。

敵の能力を下調べしておくべきだった。こんなときシャルがいたなら、いつものように、相手のことを教えてくれただろう。

(マメだからな、あいつ……)

シャルは夜会参加者をリストアップし、百人ぶんの情報をストックしているのだ。ふと気付くと、夜々が底なし沼のような眠で雷真を見上げていた。

「雷真……シャルロットさんのことを考えてる……」

「何でわかるんだ」

夜々は答えず、その代わり、うつすら微笑んだ。

雷真はびくつとした。何コレ。超怖い。

びくびく——否、じりじりしながら待つこと一時間。

結局、八七位が姿を見せないまま、零時になった。

時計塔が壊れてしまったため、鐘は鳴らない。執行部の学生がハンドベルを振る、終了時刻を告げる。雷真はほっと脱力し、緊張を解いた。

ギヤラリーの学生たちが、あくび混じりに引き上げていく。執行部の片付け作業を横目で見つつ、夜々は安堵の息をついた。

「何ごともなくてよかったですね。雷真も早く寮に戻って、休んでください」

「いや。まだ戻らない」

言うなり、歩き出す。

「え、待ってください。どこへ行くんですか？」

「ちよつとな、寝る前に会いたい女がいるんだよ」

びきつ、と変な音がして、夜々の動きが止まった。

「ちよ……夜々？　そういうんじゃないかな？　今のはカッコつけて言っただけで——
待てー 落ち着けー」

急速に開く瞳孔。夜々が何かしでかす前に、雷真はダッシュで逃げ出した。

3

日付が変わった直後、グリフォン寮の一室にて。

アンリはあかりもつけず、ベッドの上で膝を抱えていた。

シャルの部屋。二人部屋にしては相当広い。ダブルサイズのベッドが二つに、四人用のテーブルセット。広々とした学習机、図書館にあるような本棚、ゆったりとしたソファが二つずつ。そのすべてが寮の備品だ。

自動人形を十三体も保管している——そんな猛者もいるというから、広さは保証つき。

アンリが幼少時を過ごした、プリュー伯爵邸の応接間なみた。

開け放たれた窓から月光が差し込み、机の上を照らし出す。浮かび上がるのは針刺し、刺しゅう用の丸棒、布切り鋏（はきりばさみ）。ああ見えてシヤルは手縫い仕事が好きなのだ。姉の意外な一面を思い出し、アンリはくすりと笑った。

そして、布切り鋏に目が留まる。

重厚な鉄の輝き。ひやりと冷たそうな、薄い刃（やてば）。

ごくろ、と唾液を飲み下し、アンリはベッドを下りた。

引き寄せられるようにそちらへ向かい、吸い寄せられるように手を伸ばす。

鉄はずつしりと重く、頼もしかった。

鋼のきらめきは美しい。呼吸は自然と荒くなる。

切断するための道具。そのただけに存在する利器。アンリはそれを首筋へと持ってい
く。布ではなく、肌を、筋を、血管を断ち切るために――

「だめよー！ アンリちゃんー！」

突然、万力（まんりき）のような力で腕をつかまれた。

いつの間に入ってきたのか、寮監（ようかん）がアンリの腕を握りしめていた。

「は、放してー！」

「いいえ、放しませんー！」

いともたやすく、鉄はもぎ取られてしまう。

アンリはその場に座り込み、はらはらと落涙した。

「死なせて……お願い……」

「死なせないわー」

アンリの懇願を拒否したのは、寮監ではなかった。

開けっ放しの窓の外から、彼女の声がしたのだ。

ここは三階の高さ。だが、彼女は確かにそこにいた。ドラゴンにまたがり、きらびやかな金髪をなびかせ、燃えるような瞳で、まっすぐアンリをにらんでいる。

シャルはシグムントの背を蹴って、身軽に窓から飛び込んできた。

「シャルちゃんー」

アンリに近寄ろうとするシャルの前に、怒った顔の寮監が立ちはだかった。

「やつと戻ってきたわね。黙っていなくなるなんて、どういうつもりなの？」

「……すみません、ミス・ゼス。どうしても、必要なことだったんです」

「話は後でじっくり聞かせてもらうわ。上にも報告させてもらいますからね」

それだけ言うと、寮監はようやく表情をゆるめ、そっと道を開けた。

シャルは肩で風を切り、ずんずんと、アンリの元へ歩み寄った。

怯えて背を向けるアンリに向かって、

「バカなことをしないでー」

いきなり怒鳴りつけ——そして、きつく抱きしめた。

「バカなこと……しないですよ……っ」

シャルの声が震える。

声ばかりではない。その肩も、腕も、不安げに震えていた。

「……私を不幸にするって、貴女、言ったわね。妹とまた会えて、お母さまが生きているとわかって——私が不幸になるわけじゃないじゃない」

姉の必死な様子を背中に感じ、アンリの表情が壊れた。

我慢できず、ぼろぼろと涙をこぼす。

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめんなさい……っ」

「貴女は何も心配しなくていいのよ。明日、すべてを終わらせる」

「ごめんなさい……」

「謝らないで。すべてが終わったら、また一緒に暮らすのよ。いいわね？」
もうこらえきれない。アンリはシャルの手をつかみ、泣きじゃくった。

そのか細い肩を、シャルはやはり、きつく抱きしめた。

その光景を、夜の闇にまぎれて、盗み見ている者がいた。

窓の外、滯空するシグムントのさらに向こう、庭園の大樹の枝に。



幹にもたれ、腕組みをして立つ人影。夜だというのに、色つきの眼鏡で目を隠している。髪は銀に近い金髪。身は引き締まり、精悍な顔つきだ。

男は異様な気配を漂わせていたが、それはひどく微弱で、かのシグムントでさえ、その存在には気付いていない。

男は室内の様子を見届けると、音もなく消えた。

跳躍したようだが、枝はびくりとも揺れない。

そうして、静けさだけが後に残る。

4

結局、雷真と夜々の鬼ごっこは、理学部の校舎に飛び込むまで続いた。

エントランスに到着するや、二人はそろってへたり込んだ。

「どうして逃げるんですか雷真……っ」

「おまえが追いかけてくるからだろー」

「雷真が逃げるからですー」

息も絶え絶えで言い合う二人。その声が途切れ、呼吸が整うと、しん、と耳に痛いほどの静けさが襲ってきた。

照明は消されている。さすがにこの時間、廊下はまったくの無人だ。

雷真は腰を上げ、曖昧な記憶を頼りに、廊下を歩き出した。

階段を上がり、最上階に向かう。教授陣が使用するフロア。あたりに漂う人の気配は、決して幽霊のものではなく、熱心な研究者のものだろう。

はんやり明るい廊下を進み、とある研究室の前に立った。

扉のプレートを確認する。そこに、「会いたい女」の名が刻まれていた。

扉を叩くと、「入れ」とくぐもった声で応答があった。

扉の向こうは、ひと言で言えば、(果)だった。

まったく片付いていない。部屋の主は淡白で、言うなれば整頓された人柄なのに、部屋の方はまったく逆だ。うずたかく積み上げられた専門書。書き散らかした書類やノート。

本棚もあるにはあるが、縦差しだけでは収まらず、隙間に横向きで押し込まれている。特に本が多く、ソファの上まで占領していた。

「こんな夜更けに何の用だね？」

くるりと椅子を回し、果——もとい、部屋の主が振り返る。

白衣を着込んだ赤毛の女性教官、キンバリーだ。

「是非、ご教授願いたいことがあってね」

「ようやく勉学の喜びに目覚めた——わけはないな。まあ、そろそろ訪ねてくる頃だとは

思つていたよ。体はもういいのか？」

「ああ。万全だ」

ふ、と見透かしたように笑う。だが、キンバリーは無茶をとがめず、

「話を聞こう。夜々、そのポットで茶を淹れる」

「あ、はい」

ポットは机の上にあつた。缶だのビンだの菓子箱だの、雑多な物をかきわけながら、書類の山を崩さぬように、そーっとポットを引っこ抜く。

「かけたまえ、〈下から二番目〉。——それで？」

「あんたは学院の教授でありながら、魔術師協会の人間でもある」

はこりつばいソファに腰を下ろし、不意打ちのように切り出す。

「俺の不法な外出をもみ消せたのも、フレイとロキの自動人形が没収されないのも、そのおかげなんだろう？」

「今さら君に隠す必要はないな。だが、世間にふれ回るようなことでもない。君が秘密を漏らすなら、これまで因つてやった数々の便宜を取り消すことになる」

「俺はあんたに借りがある。秘密は墓まで持つていく」

「おや、殊勝だな。らしくないぞ」

「らしいさ。俺はこう見えて、義理を通す男だぜ」

「その調子で試験も通ってくればありがたいんだがね」

雷真は口いっぱいにマスタードを詰め込まれたような顔をした。

「続けたまえ。質問は何だね？」

キンバリーの視線は鋭い。この女に余計な前置きはいらないだろう。雷真はこちらも負けじと淡白に、ストレートに疑問をぶつけた。

「シャルは誰に操られてる？」

「ほう。あいつが自分の意志で時計塔を破壊したとは考えないのか」

「あいつは確かに乱暴者だし、やりすぎちまうことも多い。シグムントの力に頼りきりで、寄りかかっているとところもある。だがな」

まっすぐにキンバリーを見据え、確信を持って言い放つ。

「シグムントの力人を殺しに使うような、そんな奴じゃねーんだよ」

「……だが、事実だ。シャルロットが時計塔を破壊したのはな」

「何人、死んだ？」

「おかげさまでゼロ人だ。負傷者は出たがね」

「ほら見ろ、あいつが人を殺すもんか。……で、誰を狙った？」

「おや、珍しく訝えているじゃないか。まだ調査中だが、おそらく」
わずかに顔を寄せ、声を殺してささやく。

「学院長エドワード・ラザフォード」

雷真は目を丸くした。お茶を持ってきた夜々も、意外そうに息をのんだ。

「……シャルの奴、学院長に恨みでもあるのか？」

「ないな。君の言う通り、シャルロットは利用されているのだろう」

「誰に？」

「誰だと思う？」

質問で返される。キンバリーは試するような視線を向けていた。

雷真は学院の内情に通じていない。だが、キンバリーは答えられない質問をするタイプではない。つまり、雷真は答えを知っている……？

雷真は考え込んだ。学院長を亡き者にして、誰に旨みがある？

雷真の知っている範囲で、学院長が恨みを買っているとすれば――

「フェリクス……そうだ、キングスフォート家……」

キンバリーはにやりとして、満足そうにうなずいた。

「有力な説だ」

「バカな――荒唐無稽だ――」

「それでもないさ。たとえば――昼間の式典にはキングスフォートの密使が紛れ込んでいて、学院長と秘密の会談を持っていた」

キンバリーが断言するからには、裏は取つてあるのだろう。

「密使……ってのは何だ」

「言葉通り、密かな通信使節だよ。近頃、水面下でやりとりがあるのさ。どうも、学院長と英國政府のあいだに何かあるようだね」

「……どのみちおかしいぜ。狙うなら、何で俺を狙ってこない」

名家キングスフォートに赤っ恥をかかせたのは雷真だ。学院長ではなく雷真を殺すよう命じたとすれば、シャルと雷真、二人同時に復讐ができる。

「これは単純な復讐ではないということだよ」

紅茶のカップをもてあそびつつ、キンバリーは論すように言った。

「いいか、（下から二番目）。大人という生き物は、君のように一時の感情だけで動いたりはない。必ず最初に（あるもの）を考慮する」

「……あるもの？」

「損得だ」

卑俗にすぎる、だが絶対の原理。

「君をプチ殺せば、それはすつきりするだろう。だが、何の利益も得られない。キングスフォートにとって、一番の得は何だと思う？」

「……復讐、か？」

「そうだ。墮ちた名誉を取り戻し、ウォルター卿が政界に復帰する。そのためにはまず、失脚の原因を『なかったこと』にしなくてはならない」

なるほど。その視点を入れて、これまでのことを振り返ってみれば……。

「フェリクスが『魔術喰い』だと喧伝したのは、学院長だった」

「そうだ。私の機巧鑑定をもとにしたとはいえ、フェリクスの悪事を暴き、公表したのは学院長。私の鑑定さえ、『学院長の意向を受けて』のものだと言える」

「学院長を懐柔——できない場合は排除して、陰謀説でも流すってか？　バカげてるぜ。学院長を暗殺したら、罪を認めるようなもんだ」

「ポイントは『黒』を『グレー』にすることさ。多少荒っぽい手段を使ってもな。むしろ荒っぽい手段の方が、臆病な連中には抑えとなる」

雷真は奥歯を噛んだ。気に入らない話だが、この世は『正義』が支配するのではない。支配する者が『正義』なのだ。

「キングスフォートは慈善家としても名の知れた、好感度の高い一族だ。一方、プリューは数年前の不祥事以来、嫌われ者の家柄——」

「嫌われ者？」

「何だ、知らんのか。王太子ご遊覧のおり、プリュー伯爵秘蔵の大型自動人形が暴走してな。エドマンド殿下をあわや噛み殺すところだったのさ」

「――」

「ブリーユーはすっかり王室の敵だ。世論は好きな方をひいきする。少しくらい整合性が取れなくても、勝手に補完してくれる」

「その上、暗殺の実行犯がシヤルとなりや……」

「善悪の道転だな。醜聞を書き立てた連中は『デタラメを書いた悪徳ライター』になり、政敵どもは『メディアに踊らされた馬鹿者』になる。目障りな連中をのきなみ黙らせて、元の地位に返り咲けるといふわけだ」

雷真は爪が食い込むほど強く、こぶしを握った。

己の無力を痛感する。硝子がどうして雷真の行動を許さなかったのか、今になってよく

わかる。雷真はちっぽけな（個人）。あまりに弱い存在だ。

夜々が心配そうに雷真を見たが、雷真の目には入らない。

そんな雷真を冷ややかに見下ろし、キンバリーは冷淡に言った。

「（下から二番目）。この件からは手を引け」

「な――!?」

「熱くなるな。悪い癖だぞ。いずれ命取りになる癖だ」

「今さら引けるかー キングスフォートが出張ってくるなら、なおのこと――」

「私はバカが嫌いだ。わからんのか。証拠がないと言ってるんだ」

雷真は頭から冷水を浴びせられたような気がした。

「そうだ。証拠がない。キングスフォートの関与を示すものも。シャルが操られているという証拠も。何ひとつ、ない。」

「私が言ったことは、すべて私の（空想）にすぎん。君が感情に任せて事件を起こせば、ブリーユー姉妹がますます不利な立場になる。この理屈がわかるだろうな？」

「……………」

「頭を冷やせ。そして大人しくしている。子どもの出る幕ではない」

「……………だったら、証拠があればいいんだろう？」

視線がぶつかる。

雷真のまつすぐな視線を、キンバリーは見定めるように受け止め、そして。

「そうだ。証拠があれば、問題ない」

たきつけるように言って、笑ったのだ。

5

理学部の校舎を出ると、ようやく、雷真と夜々は帰路についた。

時刻は午前一時。この時期、夜風はまだまだ厳しい。湿り気を帯びた冷気に、思わず首

をすくめてしまう。

夜々は平気らしい。妙に機嫌よく、浮かれた調子で数歩先を歩いている。

「寮に戻るのも、ずいぶん久しぶりですね？」

「そうだな」

「何だか、懐かしい感じがしますね？」

「そうだな」

「寮は、バブリックススペースじゃありませんね？」

「そうだが、妙な真似したら叩き出すからな？」

「……ちっ」

「今舌打ちしたよな？ 明らかに舌打ちしたよな？」

「最近、寒くて……ひとりだとすごく冷えるんです」

「嘘つくなー 平気で全裸になるくせにー」

樹のトンネルを抜け、トータス寮に戻る。

勤勉な寮監も眠っている時刻だ。もちろん入口は施錠されている……が、雷真の手には合鍵がある。(手袋持ち)の特権だ。

鍵を開け、閉め、自室へと向かう。

不思議と落ち着く自分の城。痛み止めをのみ、制服を脱ぎ、歯を磨く。痛み止めはすぐ

に効き、どんより重たい眠気が襲ってきた。

睡魔の誘惑に耐えながら、椅子にもたれ、じっと考え込む。

先ほどキンバリーに教えてもらったことが、頭に引つかかっている。

「まだ起きてるんですか、雷真。早く休んでください」

「ああ。おまえが俺のベッドから出て行ったらな」

夜々はしおしお雷真のベッドを下り、自分の寢床へ戻って行った。

入れ替わりでベッドに潜る。夜々があたためていたぶん、シーツがぬくい。心地よさに

ため息をついてしまいがちながら、雷真はようやく目を閉じた。

意識が遠のくのを感じつつ、そっと向こうのベッドにつぶやく。

「……夜々、昼間の質問だけだな。どうして俺がシャルのために必死になるのか——硝子

さんに釘を刺されたのに、何でしつこく動くのか」

息をのむ気配が伝わってくる。夜々は緊張しているようだ。

息を詰めて雷真の言葉を待つ。そんな夜々に、雷真は投げやりに告げた。

「俺にもわかんねえ」

「……え？」

「俺はシャルに惚れてるわけじゃない。シグムントは間違はなく強敵だし、消えてくれた方が有利かもしれない。だが、連中が困ってるなら、助けてやりたい」

「雷真……」

「シャルじゃなくて、フレイでも。もちろん、おまえでも。ロキ——は向こうが嫌がるだろうが、まあ、あいつでも。俺はやっぱ動く。それに……」

アンリのことが気にかかる。

一方的な親近感。優れた兄弟を持つ者同士の、屈折したシンパシー。アンリには自分と似通うものを感じる。それは勝手な誤解かもしれないが……。

「明日、もう一度アンリに当たってみよう」

「アンリエットさんですか？ シャルロットさんじゃなくて？」

「シャルが言ってたろ。アンリに関わるな、ってさ。俺は天邪鬼なんだ」

「わかりました。夜々は雷真の言う通りにします」

夜々は素直に了解した。

夜の闇がそうさせるのか、雷真はふっと優しい気持ちになった。

「おまえにはいつも面倒をかけて、悪いな」

「そんな……。夜々は雷真のそばにいられるだけで、幸せなんです」

「いつか、ちゃんと埋め合わせるからよ」

「雷真……それって」

夜々は「きゅんっ♡」と音がするほど胸を鳴らして、

「夫婦の契りを結ばうって意味……？」

「何でだー」

「だってー 夜々の言うことを何でも聞いてくれるって意味ですよねっ？」

「そこまでは言っていないー 埋め合わせると言っただけだー」

「じゃあ夜々をお嫁さんにしてくださいー」

「じゃあって何だー 一ミリも譲歩してねーだろー」

あちらのベッドで、がばつと毛布がはねのけられる。

闇の中、獐狂な獣の気配が間合いを詰めてくる。

雷真は毛布をがっちりつかみ、飢えた獣の襲撃に備えた。

そうして今夜も、疲労の限界に挑戦するような、眠れぬ夜が更けていく。

そして、翌朝。

トータス寮の一階、大広間の食堂に、寄宿生たちが集まっていた。

朝食だ。聖職者がやってきて、お祈りの言葉を述べる。

お祈りの言葉も適当に、雷真は黒パンにバターを塗った。

ふわあ、と大あくびをかましてしまう。

明らかに寝不足。眼はどんよりと濁り、目の下にくまができている。

となりの夜々も眠そうだ。半分眠ったような顔で、ちまちまと卵の殻をむいている。

二人の様子を不審に思ったらしく、美形の寮監が近付いてきた。

「ライシン、おまえな……」

と何かを言いかけ、やめる。寮監はかぶりを振って、

「いや、よそう。俺にも経験がある。おまえくらいの年頃は、毎晩のように発散しないと、かえって学業に差し支えるんだよな」

「優しい目で見えるなー あんたが考えるようなことは何もしてないー」

「すみません、寮監さん。雷真ったら、ゆうべも激しくて……♡」

「意図的に誤解を招くなー 激しかったのは俺の抵抗だー」

周囲の寄宿生たちから失笑が漏れる。雷真は頭痛を覚えつつ、黒パンにかじりついた。新鮮なミルクで胃袋に押し込み、厚切りのベーコンを噛みしめる。塩を振ったゆで卵を口に放り込んだところで、

「おい、聞いたかよ。時計塔をぶっ壊したのは、(暴走)なんだぜ」

不意にそんな声が聞こえてきて、雷真は聴覚に全神経を集中させた。

「今度ばかりは、笑って済ませられる話じゃないよな」

「学院の権威に石を投げたんだぜ？ 極刑もんだろ」

「学院長が許しても、俺たちが許さねえよ」

彼らの声音に冗談の気配はなかった。害やかな敵意。劍呑な気配が漂ってくる。

「結局、〈暴竜〉は悪党だったってことだろ」

「じゃあ、何だよ。フェリクスの事件は……」

食堂のざわめきに、微妙な空気が混じり始める。

「あのフェリクスが人殺しをやるなんて、ちよつと信じられないぜ」

「ここだけの話……俺もうさんくさいと思つてたんだ。学院は政府の調査団を拒んだつて言うじゃないか。つてことは、全部、学院長の……」

「〈暴竜〉が悪党なら、〈下から二番目〉にもおうぜ。こんな時期にやつてきて、まんまと夜会に潜り込んだんだ。上手くいきすぎ——」

がたん、と大きく椅子が鳴り、誰かが立ち上がった。

しん、と静まり返る食堂。全員の視線が、無作法な者に集中した。

雷真だった。

夜々が心配そうに見上げてくる。

シャルのことを話していた連中も、おし黙つて雷真をにらんだ。

高まる緊張——だが、雷真は何食わぬ顔でトレイを持ち上げ、流し台に置き、軽くすすいで、立ち去った。夜々があわててついてくる。

雷真が食堂を出ると、中で笑い声があがった。

夜々は悔しそうに食堂をにらむ。

「失礼です……」

「気にするな。笑いたい奴には笑わせとけ」

笑われるのは慣れっこだし、それどころではない。

あのふんでは、シャルは学院全体の敵になってしまった。

さっさと問題を解決しなければ、本当にもう、どうしようもなくなる。学籍が剥奪されなかったとしても、復学できない。

「今日は自主休講だ。アンリに当たって、それからシャルを——」

「……雷真？ どうしたんですか？」

「アンリだ」

「えっ？」

雷真の視線は窓の外に釘付けになっていた。

噂をすれば何とやら。林の中の裏道を、小走りに急ぐ少女の姿がある。

亜麻色の髪と野暮ったい帽子が特徴的。間違いない。

「あいつ、また何かやらかすつもりか？」

見たところ、首吊り用のロープなどは持っていない。だが、ナイフを帯びている可能性はある。雷真は窓枠に取りつき、アンリの進行方向を見やった。

そのとき、夜々がすつとんきような声を出した。

「雷真——シャルロットさんです——」

夜々が示すのは樹のトンネル。うつそうとした梢の中、さらびやかな金髪が隠しきれていない。

では、近くにシグムントも——いた！

シャルの直下。茂みにその巨体を潜めている。

シャルが見つめる先は、時計塔の跡地。アンリが向かっている方向だ。

（何か、あるのか……？）

雷真は窓枠に飛び乗って、身を乗り出した。

樹のトンネルが邪魔をして視界は悪い。だが、時計塔の跡地に、いくつもの人影を確認できた。そろいの制服を着て、あたりに目を先らせている集団。ギリリと日光を照り返したのは銃身だ。警備が配置されている。

そして、武装した男たちの向こうに、ひときわ体格のいい偉丈夫を見つめる。

学院長だ。どうして、こんな時間に、こんなところに……？

「——時計塔の検分か——」

崩壊原因の調査や、被害状況の確認だ。

利那、雷真はシャルの目論見を直感した。

俺は何てバカなんだ。昨晚、キンバリー先生に聞いたじゃないか！

茂みの中で、シグムントが身じろぎする。飛び立とうとしているのだとわかった瞬間、雷真は窓枠を蹴っていた。

「雷真!?」

夜々が仰天する。雷真は足を止めないまま、肩越しに振り向いて叫ぶ。

「おまえはくるな！硝子さんに連絡を入れろ！」

「えっ——嫌ですー 夜々もー」

「いいから急げ！頼んだぞー」

視線を正面に戻し、雷真は走った。前方の茂みからシグムントが飛び出す。シャルは軽やかに枝を蹴り、シグムントの背に飛び乗った。

そのまま高度を上げ、樹のトンネルの上に出る。真下の雷真には気付いていないようだ。走りながら振り仰ぐと、シグムントのあごが開かれるところだった。

（やっぱり、撃つ気かし）

射線上には時計塔の残骸があり、学院長がいる。

そして、そちらに向かう、アンの後ろ姿も。

「お姉さまー やめてー！ お姉さまー」

アンリが叫ぶ。だが、それは風と葉擦れでかき消されてしまう。

シヤルはアンリには気付いていないのか。シグムントの発射態勢を止めようともしない。雷真は戦慄した。あのままでは、アンリも死ぬ！

雷真は肩の痛みにも構わず、飛ぶように駆けた。

（間に合え！）

樹のトンネルを一旦に抜け、メインストリートに飛び出す。

アンリはもう、目の前だ。彼女の叫びに反応したのは、皮肉にも警備の方だった。シグムントの姿をとらえたか、ようやく警備たちが騒ぎ出す。

だが、ひとたび発射されてしまえば、ラスターカノンは防ぎようがない。そして、閃光がほとばしった。

暴力的な光の奔流。あたりを満ちし、雷真の視界を真っ白に染める。

雷真は渾身の力を込めて地を蹴り、アンリの背中に手を伸ばした。

指先がアンリの肩に触れた瞬間、閃光は時計塔の残骸を消し飛ばし、舐め尽くすように融解させた。雪崩のような音が轟き、不意に、地面がなくなる。

足場が崩れ、ぼっかりと生まれる空洞。

何が起こったのか理解できないまま、雷真は奈落の底へと落ちて行った。



Chapter 3

奈落の底にて

1

不意の閃光に驚き、夜々は窓を振り返った。

窓の外は、光と影、白黒二階調の色彩に埋め尽くされていた。

ラスターカノン。以前見たときとは出力が段違いだ。

その光は、時計塔の跡地へと降りそそいでいた。

「――雷真!?」

いても立つてもいられない。夜々は窓から飛び降り、駆け出した。

閃光が消えるとはほぼ同時に、時計塔の跡地に到着する。

警備の男たちが口々に怒鳴り声をあげ、指示を飛ばし合う。夜々が彼らの前に飛び出したとき、不意に地面が崩れた。轟音を響かせて沈下する地盤。ラスターカノンは瓦礫を消し飛ばしただけでなく、大地を貫いたようだ。

落下していく岩、砂、レンガに金属――そして雷真!



焦燥で身もだえする。そんな夜々に、キンバリーは珍しく優しく、

「大人しく私の言う通りにしろ。悪いようにはしない」

「……でも」

「おまえが下手に動けば、〈下から二番目〉までにらまれるぞ」

殺し文句というやつだ。それを言われてしまうと、夜々は動けない。

「どのみち、あの深さだ。落ちた奴はおそらく即死……今さらおまえが下りたところで、助かるものもあるまい」

「――」

「だが、もしも生きているなら、おまえが下りるまでもなく、あいつは助かる」

信頼に満ちた言葉。ひよっとしたら夜々よりも、キンバリーの方が、雷真を信じているのかもしれない。

それは、すごく、悔しい。

「先生の……言う通りにします」

「いい子だ。では、ついてこい」

「どこへ……？」

「私の一存では決めかねるのでね。仲間たちと相談するのさ」

キンバリーは大穴の喧騒に背を向け、本立ちの方へと歩き出した。

2

夜空に太陽が浮かんでいる。

ほんやりした頭で思ったのは、そんなことだった。

見えているのは暗幕を張ったような世界。その中心に、大きな太陽が見えている。

雷真は何度かまばたきをして、曖昧な記憶をたぐった。

確か、落ちたのだ。地盤ごと。シグムントの破壊に巻き込まれて。

とすると、上のあれは太陽などではなく、地上に通じる穴か。

かなりの高さを落下したようだ。生きているのが不思議なほどだ。

そつと指先を動かしてみる。

失われていたらと思うと肝が冷えるが——ある。動く。痛みもない。

雷真は慎重に具合を確かめながら、むっくりと身を起こした。

あたりは暗い。穴から差し込む光は、不思議と届かないようだ。

幸い、いつもの道具は持ち歩いていた。ハーネスからランプを引き抜き、マツチで点灯。

照らして見ると、あたり一面、砂だった。

かなり急な傾斜。あたかも砂丘のようになっていいる。

「夜々ーっ！」

叫んでみると、かなり遅れて、かすかなこだまが返ってきた。

相当に広い。学院の地下には、こんな大空洞が広がっていたのか。

何度か呼んでみたが、結局、夜々からの返事はなかった。

「仕方ないな。自力で脱出——」

そのとき、しびれるほどの戦慄が全身を貫いた。

反射的にランプを消し、地面に身を投げ出して、気配のする方を見上げる。

天に無数の星がまたたいていた。

いや、それは星ではなく——瞳だ！

見られている。おびただしい数の瞳に——

服をはぎ取られ、皮をはがされ、全身をバラバラにされて、細胞のひとつひとつを透視

されているような、圧倒的な視線。

数十万とも、数百万ともつかない何か。

次の瞬間、それは一斉にまばたきをして——

数十秒も経つてから、ようやく我に返る。瞳はもう消えていた。

バクバクと暴れる心臓。冷や汗で通り雨に遭ったように濡れている。

一体、今のは何だったのか。

何かが、いるのか？ 誰かの魔術か？ それとも、怯えが見せた幻覚か？

正体はつかめなかった。予想もできなかった。だが、わけのわからないものを怖れて、いつまでも立ち止まっているほど、雷真は臆病ではない。

雷真は再びランプに火をともし、あたりを照らした。

砂の斜面が広がっている。化け物の痕跡など、どこにもない。

ひとまず、今の体験は頭から追いついて、脱出のことを考える。

斜面はさらに下へと続いている。本能的に上に向かいたくなるが、穴までは届かないだろうし、砂地を上げるのは体力を使う。

下手に動かず、救助がくるのを待つべきか。だが、あたりをよく観察すると、岩や瓦礫がごろごろ転がっている。先ほど、一緒に落ちてきたのだろう。上の地盤はもろくなっているはずだ。再び崩落が起きれば、おし潰される危険がある。

化け物のことは抜きにしても、移動した方がよさそうだ。

斜面を少しくだったところで、ランプが妙な物体を照らし出した。

「——おい！ しっかりしろ！」

すべり込むように駆け寄り、やわらかそうなその物体に呼びかける。

雷真は耳を近づけ、頬で息を探った。呼吸……している！

「起きろ、アンリー アンリエット！」

耳元で怒鳴ると、ぱちつとアンリのまぶたが開いた。

「大丈夫か？ 痛むところはないか？」

「いやーっー 男ーっー」

ざくざくと砂を握り、めちやくちやに投げつけてくる。

これだけ元気があれば、大丈夫だろう。

「おい、やめろって……こら、アンリ！」

「ごめんなさいっごめんなさいごめんなさいごめんなさい！」

「静まれ。そして立て。出口を探すぞ」

「え……出口？」

「頭でも打ったのか？ おまえは俺と一緒に落ちたんだ」

天を指差し、頭上の「太陽」を示す。

「上は崩れかけだろ。何か降ってきたら、せんべいみたいにされちまう。いつまでもここに
いるわけにはいかない」

「でも……出口なんて」

「きつと、ある。なければ、終わりだ。だったら、ある方に賭けろ」

アンリはまじまじと雷真を見つめた。どことなく感心したような視線だった。

だが、決して素直になったわけではなかった。

「……私のことは放つておいてください。行くなら、どうぞご勝手に」

雷真は苦笑した。夜々もたいがい面倒だが、こいつも別の意味で面倒だ。

「わがままなお嬢ちゃんだな。だが、嫌でも連れて行くぜ。俺たちは——」

さりとて真顔で宣告する。

「下手をすりゃ、消される」

3

トータス寮の手前、樹のトンネルの直上。

シグムントの背中にまたがつて、シャルは浅い呼吸を繰り返していた。

時計塔の跡地が瀑布のような音を立てて沈み込んでいく。

瓦礫も、岩盤も、そして、学院長も。

ついに——人を、殺してしまった！

手足が冷たい。力が入らない。まるで他人のもののような手で、シャルは自分自身の肩を抱きしめ、ふるふると震えた。

「大丈夫か、シャル」

シグムントの声で我に返る。

「……平気よ。急いで隠れましょう」

「そのことだが。今さら穩便に済ますのは——無理だな」

利郎、シャルの頬を弾丸がかすめた。

木々の中に狙撃手がいる！

ライフル銃程度ならシグムントは持ちこたえる。だが、警備の装備には大砲もあるのだ。重火器を引っ張り出される前に何とかしなければ。

シグムントを回頭させる。と同時に、魔力の発動を感知した。

枝葉を突き抜けて飛び出す影が複数。

ブリキのおもちやに兜をかぶせたような外見。子どもくらいの大きさの、無機質な機械人形。警備に支給される量産型自動人形（ヘイムガーダー）だ。

小狼のように俊敏な動きで襲いかかってくる。

シグムントは翼で蹴散らし、爪でなぎ払い、しつばの一撃をお見舞いする。だが、相手は数が多い。一瞬の隙を突いて、シャルの背中に影がかかった。

「しまっ——」

ヘイムガーダーが指を突き出す。その先端に青白い火花が散っていた。高電圧の光。あれをもらったら、シャルの意識は一瞬で刈り取られる！

次の瞬間、ヘイムガーダーははるか彼方に吹っ飛んでいった。

入れ替わりでそこに現れたのは、ひとりの男。銀に近い金髪が目をひく。仕立てのいい紳士服を着ているが、上着はなく、カッチリとしたベスト姿。色つき眼鏡をかけていて、表情は読めない。

男は唐突に出現し、びたりと空中に静止した。シャルを無視して、

「退きますよ、シグムント」

「——心得た」

シグムントの体が発光し、巨体が瞬時に小さくなる。

シャルがバランスを失い、落下するのを、男が腕をつかんで引き上げる。

「いたっ——もうちょつと優しく——」

文句はそこまで。ぐつと猛烈な加重が男にかかり、風景が一変した。

振り落とされないう、必死で男の手をつかむ。男はただちに加速して、いともたやすく、銃弾の雨を振り切った。

シャルとシグムントを抱えたまま、林の中をすいすいと飛ぶ。

あたかも一陣の風。音もなく、重さも感じさせない。

男は野戦演習場の手前まで行き、慎重にルートを選んでUターンした。

風景は流れ、あつと言う間に学院の中央部に近づく。大講堂が見える位置までくると、少しずつ、シャルの姿が変貌した。

さらびやかな髪がくすんだ茶色に変わり、服が女子用の制服になる。

何者かの魔術が発動しているのだ。そうして、目立たない女子学生——名はラヴェンナという——への変身を終える頃、男は大講堂の裏手に着地した。

シャルをそつと下ろしてくれる。思っていたよりは紳士だ。ハトになったシグムントがシャルの肩にとまり、ポッポッと鳴いた。

二人はそのまま大講堂の中に入り、三階、執行部のスペースへと向かった。三階の外れ、古めかしい議長室の中で、このあいだの少年が待っていた。

「やあ、お疲れさま。ラヴェンナ」

シャルは答えず、青ざめた顔で、必死に吐き気をこらえている。

「おや、どうしたんだい？ 死んだ子になりすますのは気持ちが悪いかい？」
からかうような口調。いや、なぶるような、と言うべきか。

「君のルームメイトだったんだろう？ 氣立てのいいラヴェンナは」
そうだ。ラヴェンナは氣立てがよかった。シャルにも親しく接してくれた。

シャルがあんなことをしなければ、友達になれたかもしれない。

シャルが黙っていると、少年は退屈そうに肩をすくめ、

「本題に入ろう。時計塔の跡地は崩落、学院長は生死不明だったさ」

ひやりと冷たく声の調子が変わる。

「学院の地下には大空洞が広がっている——僕がそう教えてあげた途端、これだよ。君はまだ覚悟が決まっていなかったんだね？」

「決まってるわー 私はちゃんと、学院長を殺したじゃない！」

「地盤の崩落に巻き込む……なんて回りくどいやり方をしなくても、君のシグメントなら護衛ごと消滅させることができたと思うけど？」

「……下策よ。昨日の今日で、学院長には対抗魔術が用意されていたわ」

「そう、昨日の今日だ。君の〈魔剣〉を無効化できるような、立派な対抗魔術が用意できたとは思えないけどね」

シャルは黙り込んだ。少年の理屈の方が、悔しいが、筋が通っている。

「まあ、いいさ。制限までに約束を果たしてくれれば、僕には不満がない。あと……二十時間もないかな？」

「……何を言っているの。私はちゃんと果たしたはずよ」

「いいや、まだだね。でも、おかげで彼女も死なずにすんだよ」

少年はふところから水晶玉を取り出し、掲げて見せた。

透明な水晶の奥に、何やら情景が浮かび上がっている。

魔具だ。魔術回路が搭載された、魔術のための道具。

魔具には自動人形のような知性がないので、魔術師が自ら魔力を制御しなければならな

い。楽器にたとえるなら、自動人形とは奏者つきの楽器で、通常の魔具はただの楽器——術者本人に演奏技術がいる。

水晶玉に映されたものを見て、シャルは思わず立ち上がった。
横たわるアンリの姿——

「どこ!? それは、どこなの!?」

「落ち着きなよ。アンリは生きてる。いや、殺されずに済んだと言うべき?」
含みのある言葉。その含んだ意味を、ずいぶん時間をかけて、理解する。

「そう、君が殺しちゃうところだったんだよ——この子も射線上にいたってわけさ。学院長を直に狙わなくて、本当によかったねえ」

シャルは動転しそうになる気を鎮め、震える唇でつぶやいた。

「……それで、そこは、どこなの?」

「地下の大空洞さ。君が地盤の背骨を折っちゃったんで、みんな下に落ちたんだ。学院長も、その護衛も、そして、君の可愛い妹さんもね」

少年は水晶玉に視線をやり、おやつという声を出した。

「これは面白い。どうやら、（下から二番目）もいるようだね」

シャルは齒噛みした。雷真はアンリの側にいたのだ。関わるなど言ったのに。本当に、頭にくる。この私の警告を無視するなんて。

だが——心のどこかで、彼があきらめないことは、わかっていた気がする。

「シン。ここに入れるかな？」

従者に呼びかける。色つき眼鏡めがねの男が、執事然とした所作しよさで一礼した。

「難しゅうございますね。警備の目もございますし。ですが、坊ちやまの御せとあらば、たやすいことです」

「じゃあ、やつてもらおう。十人ほど連れて行くんだ。実態が知りたい」

シャルは少年に詰め寄り、だんつとテーブルに両手を突いた。

「私も行くわー アンリが——」

「だめだよ」

「行かせてー アンリに何かあつたら——」

「僕がだめだと言ったんだよ？」

シャルは少年をにらみつけ、殺気を叩きつけた。

シャルの魔力に反応し、ハトのシグムントが翼を広げる。

だが、何もできない。

「君は地下じゃなくて校舎に行くんだ。授業が始まるよ、ラヴェンナさん」

シャルは奈落なうろの底に突き落とされたような気分で、しかしどうすることもできず、のそのそと部屋を出て行った。

シャルが出て行くと、少年はくすくすと笑って従者を見上げた。

「何か言いたそうだね、シン？」

「……アンリエットを向かわせたのはあなたです。もしラスターカノンが直撃していれば、私たちは人質を失うところでした。なぜ、あのようなことを？」

「楽しそうだったから」

シンがおし黙る。少年は紅茶を飲み、すねたような苦笑を向けた。

「そんな顔するなよ。シャルロットがああいうやり方しかできないことはわかっていた。アンリエットが死ぬ心配はなかったさ」

「下で何が起こるか、わかりません。最悪、墜落死ということも」

「そのときはアンリエットを造つてあげればいいだろう？」

「……どこまでも外道ですね。腐りきっていらつしやいますね」

「誉め言葉と受け取っておくよ。後でとつちめるけどね」

「……一体、何をお考えなのですか？」

「わからないのかい、シン。《愚者の聖堂》^{（愚者の聖堂）}が実在するんなら、学院はかなりのところまで研究を進めていることになる。暴くべき価値があるんだよ。こっちの計画を多少危険にさらしてもね。そして、それは実在した」

屈託のない笑み。くすくすと天使のような笑い声。

シンは畏怖をにじませ、かつ、陶醉したように主の笑顔を眺めた。

「見届けてあげようじゃないか。学院が（神の似姿）にどこまで迫っているのか。思わぬ獲物もかかったようだし、行つて遊んであげなよ」

「御意に」

シンは一礼し、ただちに議長室を後にした。

4

「え、消されるって……」

アンリは佐えの走った目で雷真を見た。

「ひょっとしたら、だけどな。こんなでかい空洞が地下にあるなんぞ、聞いたことがない。思うに、これは秘密なんだろう。当然、知ってる者は限られる」

「……それなら、それで、いいです。消されるなら、手回が省けます」

「何をダダこねてんだよ。頑固なところはあいつにそっくりだな」

びく、とアンリの肩が跳ねる。アンリはますます意固地になって、背を向けた。膝を抱えて、小さくなる。てこでも動かないアピールか。

「どうせ、助けがきますから。私は絶対、死にません」

「死にたいと言つてた奴が、ずいぶん強氣だな。こなかったら、どうする？」

「ちようどいいです。助けがこないなら、ここで死んでやります」

そのとき、タイミングよく巨大な質量が降つてきた。ずどんっ、と地響きを立てて大岩がめり込み、砂の斜面をすべり落ちて行く。

それはアンリの五メートルほど向こうを通過し、闇の中へ消えて行つた。

直撃していたら死んでいた。轢かれただけでも、きつと。

見ると、アンリは顔面蒼白になり、かすかに震えていた。

雷真はアンリの様子を観察し、少しのあいだ思索して、やがて口を開いた。

「思い出したぜ。その昔、この洞窟には数千人が生き埋めにされたんだとよ」

「え……？」

「ここは巨大な魔術施設。これ自体が巨大な魔具なんだ。その秘密を守るために、工事に参加した人足たちを埋めちまつたんだと。ところが……」

「……………」

「取り残された人足たちは、生きるためにお互いを食い合つた。肉をむしり、はらわたを引き裂いて、血をすすり、骨をしゃぶつた」

きゅ、と膝をつかむアンリの指に、不自然な力がこもる。

「人外の行いは、やがて連中をこの世ならざるもの——化け物に変える。そうして、長い

年月の末、ただひとり残った化け物は……」

「……ど、どうしたんですか？」

「今もこの迷宮をさまよい続けているんだそうだ。食物を求めて……な」

ふわっと、ランプの炎が頼りなく揺れた。先ほどの体験のせいかな、言っている雷真自身、肌があわ立ち、うなじがびりびりした。

「そ……そんなの、ベッタベタの怪談です。作り話です」

「そうか？ だったら耳を澄ましてみろよ。そいつの這いずる音が聞こえてくるかもしれないぜ。ほら、地の底から——」

いきなり言葉を切り、雷真は弾かれたように背後を振り返った。

「……ど、どうしたんですか？」

「おい……何か、聞こえねーか？」

ぎくつとアンリは身をすくめ、ふとももをすり合わせた。

「ほら……かすかに……」

「え……ちょ……やだ……やめてください……」

「助けてくれえええええええーっ！」

「いやあああああーっ」

アンリは悲鳴をあげ、頭を抱え込んだ。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいーっ」
 半狂乱で泣き叫ぶ。予想以上の効果に、むしろ雷真の方がびっくりする。

「……いや、その、悪かった。冗談だ。そんなに怖がるな」

「じょ……冗談……？」

「故郷の怪談をアレンジしただけだよ。俺は不勉強な留学生だぜ。おまけに、こんな場所があるなんて知らなかった。いわくなんぞ、知ってるわけねーだろ」

「ひ、ひどいですー けしからんですー おしっこ出ちゃうかと思いましたー」

「元貴族のご令嬢が、おしっこなんて言うな」

やはり、アンリも死を怖れている。痛みを、恐怖を、遠ざけようとしている。

なら、自殺を思いとどまるよう、説得できるかもしれない。

この世には、生きたいと思つても、生きられない奴がいるんだぞ——

などと、説教じみたことを言うつもりはない。

雷真自身、家族を失った直後は、自分も後を追いたいと思つた。生きることがつらくて、投げ出したくて、すべてを終わりにしたいあの気持ちには、そんなお決まりの説教で覆せるものではない。雷真を立ち直らせたのは——生きようと思わせてくれたのは、皮肉なこと

に、死にたいと思わせた者と同じ、兄だった。
 復讐が雷真に生きる理由を与えてくれた。

だから、説教の代わりに、雷真は優しくささやいた。

「あの世がどうなってるかなんて知らねーし、あの世があるのかどうかも知らねーけどよ。ひよっとすると、そこはここみたいに暗くて、じめじめしてて、死んだ連中がさまよっているような、そんな場所かもしれないぜ？」

「う……」

「そんなところに自分から行こうとするな。オバケが怖いような奴がさ」

「わ……私だって……死ぬのは……怖い……です」

やはり、アンリは「死にたい」のではない。

自殺未遂を繰り返すのは、つまり、死ななければならぬから……？

「まあ、そう心配するな。今は俺が一緒だ。少なくとも、ひとりじゃない。出口も一緒に探してやれるし、そう簡単にはおまえを死なせない」

アンリは不安げに顔を上げた。

一瞬、その顔が記憶の中の妹に重なって見えた。

「俺の相棒はそりゃあ嫉妬深くてね。俺が女と二人きりだなんて知ったら、地の果てまでも追ってくる。だから、大丈夫だ。いざとなれば助けはくる」

アンリはうつむき、ややあつて、こっくりとうなずいた。

それは今まで見せたことがない、素直な仕草だった。

「よし。じゃあ、行くぞ」

ほらよ、と手を差し伸べる。

アンリはためらった。だが、男に対する恐れより、状況に対する勝つたの方だ。猛犬に手を伸ばすように、こわごわ、手を重ねた。

5

時計塔の跡地は、すっきりしていた。

うずたかく積み上げられていた瓦礫は、きれいさっぱりなくなっている。

代わりに、すり鉢状のくぼみができている。まるで月のクレーターだ。

大穴が開いたと聞いていたが、角度的によく見えない。フレイは一生懸命背伸びをして、バランスを崩し、すっ転んで、わたわたした。

周囲はロープが張り巡らされ、立ち入り禁止になっている。

居並ぶ警備は銃器で武装し、自動人形まで引っ張り出している。頭数が足りないのか、風紀委も駆り出されている。いやにものものしく、そしてあわただしかった。

「おい、被害の確認は取れたのか？ 何人巻き込まれた？」

「わからん。学院長の安否はまだわからないのか？」

「学生が巻き込まれたっていうのは本当か？」

「それは俺が見た。東洋人の学生と、女の子が落ちて行つたよ」

——東洋人？

フレイは青ざめ、あわててロープに駆け寄つた。

だが、もちろん、そんなことは許されない。女子学生がフレイの前に立ちはだかる。腕に輝くのは（Crest）の腕章。風紀委のメンバーだ。

「この先は立ち入り禁止です。二次災害の危険もあるんですよ」

「あの……ちよつとだけ……」

「ダメったらダメです」

「……………」めぞ。

「泣いてもダメです。これは理事会の決定なんです。絶対に覆りません」

フレイはあつさり追い返され、すごすごと退散した。

その目の前に、サンダルばきの足が立ちふさがる。

顔を上げると、フレイと同じ真珠色の髪、紅い瞳が目に入った。

「きな臭いな」

第ロキが松葉杖をついて立っていた。入院患者の外出は認められていないし、彼は臆を痛めているので、移動するのにもひと苦労のはずだ。

ロキは不機嫌そうに顔を歪め、擲棄するように言った。

「退院したと思ったら、早くもトラプルか。つくづく、あのバカは呪われている。あんたも関わるな。とばっちりを食うぞ」

冷淡に告げ、時計塔の跡地に背を向ける。ひょこひょこと去って行く背中を眺めながら、彼はどうしてここにきたのだろうか、フレイは不思議に思った。

フレイはもう一度振り返り、警備と風紀、二重の守りを見やった。

「ライシン……」

もちろん、つぶやきに答える者はいない。

同刻、その場所を木々の合間からのぞき見る者たちがいた。

林に身を潜め、時計塔の跡地をうかがっている。

いずれもそろいの黒マント。フードと裾に金の縫い取りがされたゴージャスな装束だ。

見えているだけで影は四つ。その全員が気配をまったく感じさせない。近くに自動人形の姿はないが、全員が凄腕の魔術師に違いない。

夜々は彼らを見上げて、畏縮した。自動人形に本能などというものがあるのなら、これは「本能的な恐怖」ということになるだろう。

夜々のとなりでは、キンバリーが大樹にもたれて立っている。普段通りの白衣姿だが、

彼女もまた、黒マントの一味に違いなかった。

「あのじゃじゃ馬め、愉快なことをしてくれたものだ。百年の歴史を刻む文化財、時計塔を跡形もなく消してしまふとはな」

皮肉めかして笑う。その頭上、枝の上に立つ男が静かに口を開いた。

「さて、どうする。鴛の同盟——いやさ、キンバリー教授」

「それを今考えているところですよ、山鳩の同盟」

その二人の背後、三つの影がそれぞれに言った。

「（敵）の狙いは明白です。我々が学院長保護に動きましょう」

「鴛の意見に賛同する。今、学院長を死なせるわけにはいかぬ。そして、（愚者の聖堂）とやらを見極める好機でもある」

「……私も異存ない」

「お待ちを。下手に動いて（聖堂）ごと消されては困ります」

行動に傾きかける一同を、キンバリーは鋭くさえぎった。

「我らの目的は監視と観察——あれの流出を阻止することであつて、開発を阻止することではありません。我らが動けば、運命改変のおそれもあるかと」

三人が沈黙する。キンバリーの懸念はもつともだと言うように。

山鳩と呼ばれた男が、彼らを代表するかのように、再び口を開く。

「鴫の。(下から二番目) も行方不明と言ったな？」

「ええ、星の下というやつでしようか。あれは無学な教え子ですが、目端が利き、不思議と聡い。いつも必ず、騒ぎの渦中にいます」

「アカバネの生き残りか。ひょっとしたら、彼がファザーのおっしやる……」

「その可能性はありますね。いささか、役者が資相ですが」

「わかった。手ぬるい感是否めんが、ファザーの指示を仰ごう。十中八九、静観せよとお達しがくるだろうがね」

一同を見回す。ほかのメンバーもうなずいて賛意を示した。

「鴫の。君はどうする？」

「見張り役が必要でしょう？ 学内に動きがあり次第、報告を入れます」

それで方針は決まったようだ。ひとり、またひとりと、影が木立ちに消えていく。音もなく、あたかも亡霊のように。

夜々は結局、ひと言も発することができず、彼らが解散するのを見守った。

キンバリーだけになると、気がゆるみ、ほっとため息が出た。

「あいつのことが心配だろうが、今はここを離れるぞ。いいな、夜々」

「は……はい。あの、雷真をどうするんですか？」

「今は放っておく。だが、薄情だとは思ってくれるなよ。あいつが下から戻ってきたとき、

簡単には死なないようにしてやろう」

歩き出そうとして、キンバリーは一度だけ振り返った。

「万一、あいつがファザーに（予見）された男なら、よもやこんなところにくたばるはずもないが……さて？」

にやりと笑うキンバリー。夜々^{ヨヨ}は意味がわからず、小首を傾げた。

6

ランプのあかりを頼りに、雷真^{かみまこと}とアンリは斜面を降りた。

光が届く範囲は狭い。下は砂地で歩きにくい。それでも、二人は三十分ほどかけて、どうにか斜面をくだりきり、平坦^{へいたん}な場所に出た。

足場が固い。岩場だ。

「ここからは平地か？　だが、先が見えない——」

数歩行ったところで、突然、となりのアンリが沈んだ。落ちる！

雷真の反応は速い。左腕一本でアンリの手首をつかみ、根性と気迫と瞬発力で引っ張り上げた。その勢いのまま、二人で砂地に倒れ込む。

ランプでよくよく照らして見ると、そこは切り立った崖^{がけ}になっていた。

底は見えない。相当に深い。先ほど斜面を滑落した大岩も、おそらくここに落ちたのだらう。のみ込まれていたら、一巻の終わりだった。

ほんの一瞬、崖の下に白い——半球のようなものが見えた気がした。

城……聖堂？

いや、とても光の届かない距離だ。見間違いかもしれない。

先ほどの《瞳の群れ》を思い出し、雷真はぞくりと震えた。

かぶりを振って立ち上がり、へたり込んだままのアンリに手を伸ばす。

「大丈夫か？ ほら、手を貸してやる——」

「いやーっ！ 触らないでーっ！」

いきなりパンチがくる。雷真はばしんとさばき、

「助けてやったのに、ずいぶんだな。どうしてそんなに男が嫌いなん……あ、ひょっとしてアレか？ 昔、男にボロくずのように捨てられて……」

「ち、違いますっ！ ブリュエー家の名譽に誓ってそんなことはありません——っていうか、

その想像は失礼です！ 妄想の中で私をめちゃくちゃにするなんて！」

「してねえー！ 俺を変態扱いするな！」

アンリは帽子を引っ張り下ろし、いつものように顔を隠した。

「男の子は、嫌い……っ。怖いし、乱暴だし、バカだし、汚いし、それに……」

雷真の聴覚でも、その先は聞き取れなかった。

だが、会話が成立しているだけでも大変な進歩だ。

雷真は苦笑して、もう一度、今度はゆっくり手を差し伸べた。

「行くぞ。今度は足もとに気をつけろよ」

「は、はい——いたっ」

立ち上がりとして、立てない。落下しそうになったとき、ぐきりとやつたに違いない。雷真はアンのすねに手を伸ばし、指先でそっと押してみた。

「きゃんっ——痛いですっ」

「悪い。だが、折れてはいない」

「わかるんですか？」

「俺には柔術やわじゆの覚えがある。柔術やわじゆつてのは、打ち身や骨折と背中合わせなんだ」

「ヤワラ？」

「日本の組み打ち術だよ。それはともかく、こんなところが折れたら、おまえ泣き叫んでるぜ。折れたらめっちゃくちゃ痛いんだ」

アンリはそれほど重くない。背負って行ってもいいのだが——

アンリは男嫌いだ。雷真に背負われるなんて、かなりの苦痛だろう。それに、雷真の体も本調子ではない。背負ったまま、長距離を移動するのは困難だ。

「仕方ないな。ここいらで助けを待つか」

嫌がるアンリに無理やり肩を貸し、崖伝いに少し移動。崩落現場からなるべく離れて、二人は岩場に腰を下ろした。

「俺は朝飯を食ってきたが——おまえはどうだ？」

「……そんなの、言っても仕方ないです」

「ほら」

すつと、紙袋を差し出す。パラフィン紙でガッチリ包装された包み。アンリが受け取り、包みを解いてみると、中には棒状の堅パンが入っていた。

砂糖をまぶしてある。パンというよりドーナツに近い。

「つぶれちゃってるけどな。まあ、食えるだろ」

「……いつも、こんなの持ち歩いてるんですか？」

「そんなのが命を救うこともある。水もあるぞ」

アンリは堅パンを眺め、やがて、はむつと食いついた。

粗末な携帯食だ。元貴族の口には合わないだろうと思ったが、

「おいしい、です……」

意外にもそうつぶやいて、うつむき、表情を隠した。

シヤルがそっぽを向くのと同じ理屈だ。感情を見せるのが恥ずかしいのだろう。

水と堅パンの食事を終えると、アンリは膝を抱え、ぼつりとつぶやいた。

「……すみません。私のせいで」

「どうした？ 悪いもんでも食ったのか？」

「食べたのは貴方がくれたものです！」

怒るときだけ勢いを取り戻し、また失くし、しょんぼりとする。

「おまえって、やつぱりシャルの妹だな。怒ったときの顔がそっくりだ」

「……どうせ貴方も、お姉さまの方が綺麗だって言いたいんでしょ？」

ふっと投げやりな冷笑を浮かべ、顔を背ける。

「男の子なんて……みんな、お姉さまの方が……」

そのささやきを耳にした途端、雷真の胸に言いようなない感情が広がった。

これまで「何となく」感じていたものが、確信に変わる。

おかしさが込み上げる。腹がくすぐったくて、雷真は笑い出した。

「なっ、さすがにそれは失礼です！ 笑うなんて……笑うなんて……わーんっ！」

「砂をかけるな！ 別に、おまえを笑ったわけじゃない！」

アンリは涙ぐんだ目を向け、半信半疑っぱく雷真を見た。

「俺にもひとり、とびきり優秀な兄貴がいてね」

「――」

「一族の開祖を越えるときと言われた男さ。神さまってのがいるんなら、そいつに愛された男だよ。凡才の俺とは比べるべくもなくてね。親父おやじがよく言ってたぜ。もし俺が長男で、兄貴が次男だったら、ややこしいことになってただらうってな」

アンリは不思議なものを見るように、じっと雷真を見つめた。

「大人おとなたちによく比べられたよ。実際、俺と兄貴には雷泥の差があった。あいにく、俺は泥の方だったけどな」

雷真の間わず語りをどう受け止めたものか。

しばらくして、アンリもまた、自分からぼつぼつと語り出した。

「子どもの頃……お姉さま、人気者だった」

「人気……って、今のあいつを見ると、全然、想像がつかないんだが」

「みんなが、お姉さまのまわりに集まってきた」

「みんなに遠巻きにされてるぞ」

「お姉さま、みんなに優しくして」

「みんなにツンケンしてるぞ」

せつかくの語りにいちいち突っ込んでしまう。何と言うか、すごいギャップだ。ひよつとすると、シャルの人格は、最近になって形成されたのかもしれない。

そのとき、かすかに布がこすれるような音がした。

ほんの数メートル。至近距離に、誰かがいる――

「簡潔に答えてください」

今やはつきりと殺気をたたえ、それは機械的にたずねた。――耳元で。

一瞬遅れて、着地の音。それでようやく、自分が跳び越えられたのだとわかる。

背後を取られ、密着される。雷真が何かするより、相手の方が速いだろう。

何の反応もできなかった。この俺が――

「おまえは、マスターの（敵）ですか？」

質問には答えず、雷真はゆっくりと振り返った。

相手はその行動をとがめない。おかげで、相手の顔を見ることができた。

少女だ。フリルがたつぶりのヘッドドレスを着けている。細いリボンが巻きつく髪は、

暗がりでも鮮やかなうす桃色。細い眉に小さな鼻。その顔立ちに楚々としてつつましく、

しかしふんわり華やかで、愛らしく整っている。

それは、決して見忘れるはずもない――

「撫子……」

死んだ妹の顔だった。



Chapter 4 秘すべきことが明かされる

1

紅蓮の炎が燃え盛り、黒煙が大蛇のごとくとぐろを巻く。

親族の死体と人形の残骸が散らばる中。

「天兄が……やったのか」

雷真はか細く震える声で、兄の背中に問いかけた。

「天兄が……親父を、殺したのか……？」

兄は振り向きもせず、妹の亡骸を見下ろして、簡潔に答えた。

「そうだ」

「おふくろは……？」

「俺がやった」

「なぜだー」

「俺の邪魔をしたからだ」



「な……撫子は……っ」

「俺が解体した」

「なぜ……なん、だ……っ!?」

「そうする必要があつたからだ」

頭が灼熱する。

怒りなのか、嘆きなのか。感情が荒れ狂い、雷真を翻弄する。

一方で、これは悪い夢だと。現実じゃないと、叫んでいる自分がある。

わけがわからないまま、雷真は質問の続きを叫んでいた。

「何の……必要だよ!? 何のために、撫子を……っ!?」

息を吸い、吐き。そして、兄は無感動に告げる。

「神を造るためだ」

その答えはあまりにも空虚に、空々しく、雷真の心に響き渡った。

カミヲツクルタメ——

それは、何だ?

何なんだ……!?

これは、誰だ。俺が知っている兄貴じゃない。

わからない。何も。わからない。わからない、わからない!

世界がひび割れ、視界がゆがむ。心が音を立てて壊れかけた、その刹那。

「雷……真……」

炎が逆巻く激しい騒音の中、小さなうめき声が聞こえた。

雷真は我に返り、振り向いた。

「親父！」

頭を割られた父が、今まさに息を吹き返し、雷真を呼んでいる。

思わず駆け寄ろうとする雷真の前で、父は印を結んだ。

兄の足もと、残骸だと思っていた自動人形が跳ね起き、刀を振る。

兄がかわしたその隙に、人形は刀を捨て、雷真に迫った。

母に似た女性型の人形。それは雷真を抱き上げ、宙を飛んだ。

「おまえは……生きよ！」

と父が言ったのは、現実なのか、それとも幻聴だったのか。

生身の雷真では抗しきれない力で、人形は雷真を屋敷の外へ運び出す。

雷真を庭に放り出した途端、糸が切れたように倒れ、バラバラに砕けた。

ばう、と猛火が噴き上がり、屋敷を完全に包み込む。

炎上し、崩れ落ちる我が家を前に、雷真は絶叫した。

雷真は生まれて初めて兄を呪い――

己の無力を、ただ、ただ、呪った。

2

「撫子……」

雷真は驚愕して、背後の乙女に見入った。

ありし日のまま。雷真の記憶にある、その面影のまま。

だが、違う。撫子は死んだ。焼け跡で灰をかき集めたのは雷真だ。そしてその遺灰は、今やあいつの手にある。

だから、撫子の顔を持つこの乙女は、撫子ではない。

全身の血が沸騰する。と同時に、心が凍てつくように冷える。

「……こんなところで出くわすとはな」

みなぎる怒気を封じ込め、闇の向こうに呼びかける。

「一体、何の因縁だろうな。マグナスさんよ」

すうっと音もなく、闇の向こうから現れる者。

銀の仮面で素顔を隠し、いつものように礼服をまとう、その姿。

自信にあふれた——いや、違う。

地上で最強の生物は、自信などなくても、誰かを怖れたりしない。自信などという概念を超えたところで、ただ事実として己の最強を受け入れている。

超然、という言葉が相応しい。この男には。

雷真は感覚を研ぎ澄まし、自動人形の気配を探った。

……ない。油断はできないが、とりあえず、人形は背後の一体だけだ。

マグナスは何も言わない。こちらの出方を見ている……のか？

(……やるか？)

雷真の下肢に力がこもる。距離はほんの数メートル。敵が並みの人形使いなら、魔力を練る前に蹴りが届く。

びりびりと高まる緊張。空気が張り詰め、張り裂ける寸前、

「おや、誰かいたのかね？」

と、とほけた声が割り込んだ。

声の主は壮年の男だった。立派な体躯。軍人だと言われても信じてしまう。

目焼けた顔。口ひげをたくわえ、目尻にシワを刻んでいる。好々爺、というにはまだ若く、生気にあふれているが、確かに好々爺を思わせる笑顔だった。

男はマグナスの背後から現れ、雷真に笑いかけた。

「君はライシン・アカバネくんだな」

「……光栄だな。学院長さまが、俺みたいな劣等生を覚えていてくれたとは」

「もちろん覚えているとも。君は特に将来有望な人形使いだ」
にこやかに笑う。一見無防備なその笑みに、雷真は怯んだ。

（こいつも化け物だ……！）

ガントレットを支給されたとき、間近で対面している。だが、あのときはまるで違ふ。ひと気の少ない場所では、彼の迫力をさえぎるものがない。

ダイレクトに伝わってくる凄み。巨大な魔力。その上、肉体的にも充実している。真正面から取っ組み合いを演じてても、やられるかもしれない。

それほどの存在感と力感を漂わせながら、学院長はあくまでにこやかに、
「どうした、幽霊にでも出くわしたような顔をしているぞ」

ずっと目を細め、刃物のように鋭い一瞥をくれる。

「何か、おかしいものでも見たのかね？」

「……いや、何も」

「それはよかった。マグナスくんは私の護衛なのだ。驚かせてすまなかったな」

「護衛……」

「君も先の崩落に巻き込まれたようだな。ふむ、そちらのお嬢さんは——」

アンリを認め、ふむ、と手を打つ。

「うむ。プリュー家のお嬢さんだ」

「あ……アンリエットです、学院長」

アンリはびくびくと、しかし作法にのっとって礼をした。

「シャルロットくんの妹さんだな。プリュー伯爵は素晴らしい人形使いだった」

「え……父と、面識があるんですか？」

「もちろんだとも。だが、その話はまた今度だ」

学院長は話をまとめ、ほがらかに言った。

「巻き込まれた者同士、我々は一致団結して救助を待とう。なあに、心配はいらんよ。私の優秀な秘書官が、すぐに救助を寄越してくれるからな」

そして再び、その双眸が鷹のように鋭くなった。

「勝手な行動は慎むことだ。いいな、ライシンくん？」

争いは許さん、と言っている。有無を言わせぬ迫力だ。

話がまとまると、一同は車座クルマザになつて腰をおろした。

学院長のとなりにはマグナス、そして彼の自動人形オートマーション。

たき火を挟んで反対側、少し離れて、雷真とアンリが座る。

学院長はマグナスを相手に高度な魔術談義を始めた。放つて置かれるのはありがたい。

雷真は隙をうかがう暗殺者のようにマグナスを観察した。

ふと、自動人形が頭上を見上げてつぶやいた。

「お話し中すみません、マスター。私が救助を呼んでみましょうか？」

「……だめだ。学院長のお側を離れるな」

「では、天井をぶち抜きましょうか？」

雷真はぎよつとした。何て物騒なことを言うやつだ。

学院長があわてて横から口を出す。

「待ちたまえ。それはいかん。それはいかんよ、マグナスくん。衝撃を与えるのは危険だ。

どこが崩れ、何が降ってくるかわからん」

「ご心配には及びません。大岩から小石まで、私が残らず粉砕し——」

マグナスが手で制止し、自動人形を黙らせる。

「余計な真似をするな。学院長を護れ」

「イエス、マスター。御心のままに」

しゅんとしてうつむく。その横顔があまりにも似すぎていたので、雷真の脳裏に軽やか

なあの声が甦った。

兄さま。兄さま。お兄さま——

（くそつたれ……俺は何をやってるんだ！）

シャルの身を案じたときはまた別の焦燥に胸を焼かれた。

すぐ目の前にあいつがいるというのに、手も足も出せない！

夜会が始まって二週間。今夜は八六位が参戦してくる。昨日現れなかった八七位を含め、マグナスとやるには、まだ八六人も倒さなければならない。

フレイも、ロキも、シャルもだ。

遠い——だが、近すぎる。あるいは、近いが、遠すぎる。

たった八十やそこらの実戦で、俺は本当に、あいつに届くのか？

硝子のもとでそれなりに修業を積んだつもりだったが、実際のところ、雷真の力はマグナスの足もとにも及ばない。今の、この状況と同じだ。すぐ目の前、手が届くところにいるが、どうあがいても倒せない！

「……ライシンさん？」

というアンリのつぶやきで我に返る。無意識に魔力をまき散らしていたようだ。

「悪い。ちよつと、気が立ってな」

「……どうかしたんですか。さつきから、変です」

雷真はたき火が爆ぜる音にまぎらせ、アンリにだけ聞こえるように言った。

「あいつは、一門の……妹の仇だ」

アンリは驚いたようだ。目をまん丸にして、雷真とマグナスを交互に見る。

いきなりそんなことを言われて、事情がのみこめるわけがない。雷真自身、自分の言葉

に驚いていた。他人に言うつもりなどなかったのに……。

だが、言葉は次の言葉を連れてくる。

「俺はあいつを殺すために、この学院にやってきた。あいつは（戦隊）を率いる（元帥）」

——だが、どういうわけか、今は一体しか連れていない」

ごくり、とアンリが喉を鳴らす。

「……やるんですか？」

「いや。皮肉なもんだ。千載一遇のチャンスだつてのに、俺のとなりには相棒がいない。

それとも、この身ひとつでやってみようか？」

「どうして……そうしないんですか？」

「あ？」

「その気があつたら……もう、やってるはずです」

こんな小娘に見透かされている。雷真は自嘲して、足を投げ出した。

「勝てない戦いはしない。負けて死んだら、妹に合わせる顔がない。それに、今はおまえがいるだろ。おまえを地上に送り届けるまでは、バカな真似はしないさ」

「私なんか……そんな値打ち、ないです。護ってもらふ価値なんか……。私なんかにかまわず、したいようにしてください」

「値打ち？」

「私なんか……どうでもいいんです。ゴミみたいな女の子なんです。魔力はないし、おたくのまじ魔病だし……よ、弱いし」

「シャルと比べて、そう思うのか」

国星だ。アンリは口をつぐみ、胸を押さえてうなずいた。

思わず微笑ほほえみんでしまいがちながら、雷真は釘くぎを刺すように言った。

「仇かたきがどうのつて話、人には言うなよ。シャルだつて知らないんだからな」

「え……お姉さまも？ どうして、そんな大事なこと……私なんか」

「おまえは他人つて気がしねえ」

その言葉は、不思議と、アンリの心に響いたようだ。

アンリは急に顔を引きしめ、雷真の方に向き直った。

「……あの。私、本当は、この学院の学生じゃないんです」

「は？ 学生じゃないつて、どういう意味だよ？」

「ここは、私なんかの頭で入れる学校じゃないし……。私はただ、メッセンジャーとして

派遣された——」

不意に、雷真の首筋くびすじに強烈な殺気が当てられた。

背後の闇くろが揺らめく。突風が背後から吹き込み、雷真は全身起毛立った。

次の瞬間、重い衝撃が雷真の首にぶち当たった。

3

白すぎる壁が味気ない、入院患者用の病室。

ロキはベッドの上に座り、難しい顔で生物学の研究書をにらんでいた。かたわらの壁際には大剣——自動人形ケルビムが立てかけられていた。ケルビムは光点のような眼で、主の動態さに見入っている。

ふと、コツコツと廊下に足音が響き、誰かの気配が近付いてきた。

ひょっこりと、キンバリーが顔を出す。

「（下から）二番目」がいなくなつて、さみしそうだな？」

「誰がー」

と叫んでから、ムキになるのは損だと思い直し、声の調子を落とす。

「うるさいのがいなくなつて清々しているところですよ、キンバリー先生」

「そういうことにしておこう」

「何の御用ですか？ オレをからかいにきた……つてわけでもないんでしょう？」

「それも楽しげだがね。君にひとつ、相談があつてな」

「……相談が聞いてあきれる。体のいいごまかしだ」

「その通り。相談という名目で、君に貸しを返してもらおうという魂胆だよ」

「オレに何をしろと？」

「なに、簡単なことだ。ある男を護衛してもらいたい」

「護衛？　だが、オレは学院の学生……」

「もちろん、知っている」

謎かけのような言葉。ロキは肩をすくめ、投げやりに言った。

「ふん……どのみち、オレに断る権利はない」

「そう腐るな。私は優しい先生だよ。上手くいったら、君に報酬をやろう」

「金には困っていない」

「金じゃない。君が喉から手が出るほど欲しがっている物さ。君たちが、ね」

キンバリーは一冊の本を取り出し、見せびらかすように表紙を見せた。

魔術の奥義書だろうか。そのタイトルを見て、ロキは目をむいた。

「デ・オルガナム——」

書名（魔器について）。れっきとした禁書だ――

興奮のあまり、動悸がする。ロキは深呼吸して気を鎮めた。

「タチの悪い冗談だ。あれは、魔術師協会が厳重に管理して……」

言葉の途中で気付く。

そう、決して「失われた」禁書ではない。

保管されているものなら、手に入れることも可能じゃないか？

「早とちりするな。何も、くれてやろうってわけじゃない」

キンバリーはにやりと、人を食ったような笑みを浮かべた。

「禁書の複製は手書きの写本が原則だ。近々、こいつの写しを作ろうという話があつてね。信頼できるバイトを探しているというわけさ」

「……食えない女だ」

「優しい先生と言いたまえ。おっと、言っておくが、変な気を起こすなよ。門前の小僧がどんな秘密を知ったところで、実践できるのは魔王だけだ」

普段ほとんど笑わない口キが、思わず苦笑を浮かべてしまう。

本当に——食えない女だ。

4

馬に蹴られたような衝撃が、雷真の首筋に叩き込まれた。

人間の頸椎をへし折るには十分すぎる威力。雷真は砲弾のように吹っ飛んで、砂の斜面に突っ込んだ。

そのまま斜面を転がり、反転して起き上がる。蹴飛ばされたのではなく、自ら跳んだのだ。それでも減殺しきれずに、激しい痛みが脳天に抜けた。

一拍遅れてアンリが悲鳴をあげ、その場にしゃがみ込んだ。

かまっている余裕はない。雷真は目をこらし、襲撃者を見極めようとした。

突然、襲撃者の姿が消える。

ぞくり、と悪寒。反射的に身を投げ出し、前転してかわす。立っていたところに蹴りが叩き込まれ、砂が噴水のように飛び散った。

速い。いつの間に背後に回りこんだのか。転がりながら気配を探り、ようやくとらえた相手の姿は、意外にも人間のかたちをしていた。

たき火の炎を照り返す銀髪——いや、金髪か？

仕立てのいいスーツ。年の頃は二十代。色の濃い眼鏡で顔を隠している。

男は宙に浮いていた。光沢のある靴が、砂にぎりぎり触れていない。

男はそのまま宙をすべり、音もなく突進してきた。

やはり、速い。軌道はケルビムに似ていたが、決定的に違う点があった。こちらはいきなり最高速になる。当然、雷真の反応は遅れた。

かわせない——殺される！

ぶしゅつ、と謎の破裂音を響かせて、目の前にうす桃色の影が割り込んだ。

(撫子?)

わかつてゐる。それは撫子ではない。

乙女型自動人形が雷真をかばい、男の蹴りを受け止めたのだ。

ずんつ、と重い蹴り。だが、乙女は折れず、片手で耐えた。

「捕獲しろ、火垂」

「イエス、マスター。御心のままに」

マグナスの命を受け、乙女の体から魔力の波動が噴き上がった。

陽炎が立ち、空気がゆがむ。熱い。空気が光っている！

太陽が出現したような錯覚。乙女は大気を灼熱させ、砂をまき上げて、爆発的な速度で

突進した。

いつの間に抜いたのか、男に向かってナイフを繰り出す。

文字通り、空気が裂ける。だが、男は見切っている。乙女の速度にも怯まず、襲ってくる

ナイフをかわす。

蹴り。受ける。ナイフ。かわし、叩き落す。そのたびに衝撃波が生まれ、爆風が吹き荒

れた。アンリは頭を抱えたまま、立ち上がることもできない。学院長は——わからない。

顔を見ている余裕がない。

雷真はまばたきもできず、戦いを見守った。

男の動きには慣性による惰性がない。そして、まるで重力を感じさせない。あたかも、海中を自在に泳ぐ人喰い鯨のようなのだ。

一方、「火垂」——撫子もどきの方も謎だ。どういう加減なのか、恐ろしいほどの瞬発力に加え、凄まじい耐久性を発揮している。

（あの野郎、どんな魔術回路を積みやがったんだ……!?）

夜々に似ている。陽炎が立つということは、熱に関する魔術……？

こちらにも、ケルビムを思い起こさせる。だが（熱風操作）とは明らかに違う。乙女は熱の噴射で飛ぶのではなく、あくまで脚力で跳躍している。

ふと、雷真の脳裏に、当然の疑問が浮かび上がった。

襲撃者の男は何者なのか。

襲撃の理由も不明だが、それよりもまず——人間なのか？

男はマグナスの自動人形と互角の戦いを繰り広げている。人間の動きではない。だが、どこを探っても、人形使いの気配がない。

ついに男の蹴りが乙女のナイフをへし折った。

男のかかとが乙女の頭を狙う。直撃すれば首が飛ぶような一撃だが、乙女は両腕を交差して、男の蹴りを受け止めた。

爆風が生じる。風が熱い。突風に吹き飛ばされ、アンリがこちらに転がってきた。その

肩を抱きとめ、雷真は爆風の発生源をにらんだ。

両者ともに健在だ。彼らが再び攻撃態勢に移ったとき、突然、光が飛んできた。強くはないが、確かな光。暗がりを照らす、投光器か何か。

男は即座に反応した。するりと宙に浮かび上がり、例によって一瞬で加速、圓の中へと飛び去っていく。

——逃げた、ようだ。

互角の戦いだったのに、なぜ逃げた？

何者だ？ どういうことだ？ あいつは最初に俺を殺そうとしたぞ？

わけがわからず、呆然と見送る雷真の背後で、ばんばんと拍手の音がした。

「見事だ、マグナスくん」

学院長だ。偉丈夫がにっこりと相好を崩し、マグナスを称える。

「かなりの手練だったな。だが、本来ならば君の敵ではないようだ。君ほどの人形使いが我が学院に在籍していることを誇りに思うよ」

マグナスは小さく一礼した。撫子もときもまた、無言で腰を折った。

「ふむ、私を狙う賊だな」

念押しのような言葉。

そう理解しろ、と言われたような気がする。

「まんまと逃げられてしまったが、まあよかろう。無事かね、ライシンくん？」

「……ああ、平気だ」

「それはよかった。そら、救助がきたようだよ」

投光器のあかりと、複数の足音が近付いてくる。

やがて、そろそろと人形使いを引き連れて、金髪の美女がやってきた。丸太のような腕の自動人形が二体に、ヘイムガーダーが三体いる。

美女の表情は硬い。どことなくキンバリーに雰囲気似ている。こちらはスカートではなくパンツスタイル。腰には無造作にサーベルを帯びている。

そのサーベルから、血のにおいが漂ってきた……ような気がした。

「ご無事ですか、学院長」

「うむ、見ての通りだよ。アヴリルくん」

「それは残念です」

美女はにこりともせず言い捨て、鋭い指示を部下たちに飛ばした。

「全員、回れ右。ガキどもを地上にお連れしろ。あと、ついでにジジイ」

「アヴリルくん……」

学院長が情けない声を出したが、美女は無視して、先頭を歩き始めた。

歩けないアンリは救助の自動人形に運ばれることになった。

力自慢の巨人タイプ。巨大な腕は安定感があり、案外快適そうだ。

長い長い遠回りによって少しずつ高度を稼ぎ、迷宮のような地下世界から抜け出せたのは、午後三時を過ぎてからだだった。

外の光に目を焼かれ、ひたいに手をかざす雷真。

西の空はうつすら黄ばみ、夕暮れが近いことを物語っている。

既に連絡がいつていたのか、警備や風紀委が出迎えてくれる。そこは野戦演習場の近くで、いくつもの鉄格子で守られた、監獄のような建物だった。

「その昔、天然の洞窟を利用して、魔術の実験場を作ろうという計画があったのだ。広大すぎて危険なので、今は封鎖しているがね」

学院長はそんなふうの説明した。嘘くさいと思ったが、納得したふりをする。

医療班のメデイカルチェックを受け、ひとまずは解散の運びとなる。

「雷真――」

演習場の方から聞き慣れた声がした。

びよんと警備の男たちを飛び越えて、夜々がこちらに駆けてくる。

夜々は雷真の腰にしがみつки、いきなり泣き崩れた。

「心配しました……夜々は、心配して……」

雷真はその髪を撫でてやりながら、

「悪かった。そんなに泣くな。俺はそう簡単にはくたばらねーよ」

「雷真が……あの女狐とデキちゃうんじゃないかって……っ」

「うん。少しは命の心配をしろ」

「しましたー 命の危険があるときにこそ、男女の愛は盛り上がるんですー」

「小説の読みすぎだ。別に何もなかった……ぞ？」

「そらしたー 目をそらしました、雷真ー」

「いや、本当に何もなかった……ぞ？」

つり橋効果かどうかは知らないが、アンリとの距離が縮まったのは事実だ。

すがりつく夜々をひっpegし、雷真はアンリの姿を探す。

警備や風紀委でこった返す中、見覚えのある女を発見する。

おっとりとした横顔。グリフォン女子寮の寮監だ。彼女に肩を抱かれ、遠さがる後ろ姿こそ——アンリだ。たずねたいことがあったし、ねぎらってやりたいと思う。話せない

のは心残りだが、寮監が一緒なら、心配はないだろう。

「……つと、夜々？ おい、何だってんだ」

夜々がぐいぐい手を引いて、雷真をどこかへ連れて行こうとした。

何だかわからないままに、演習場の外れ、広葉樹の木立ちへと誘導される。

茂みに雷真を引つ張り込むと、夜々は訴えるように言った。

「パンツを脱いでくださいー」

「お断りだー いきなり何だー」

「じゃあ中身を出すだけでいいですー」

「同じだ阿呆ー」

「もうっー」

夜々は目に一杯涙を溜めて、雷真をにらんだ。

「どうしていつもいつも、夜々を抱いてくれないんですか!?」

「だっ……もつとオブラートに包んだ言い方をしろー」

「まぐわー」

「悪化するな——つて待て待て待てー こんなところで何脱いでんだー」

夜々は衣装のひもをほどき、べろんつと上半身をはだけた。

きめの細かい白い肌。ぞつとするほど美しい。肩から胸までを惜しげもなくさらしてい

るが、帯はそのままなので、背徳的にエロティックだ。

わずか数十メートルの距離に大勢の人間がいるというのに。時と場所を完全に無視して



いる。あわてる雷真に夜々はじりじりと迫り――

いきなり、ひくつとしゃくり上げた。

「やっぱり……夜々のことが嫌い……なんですね……っ」

「服を着ろ。嫌いじゃないと言っただろ」

「だって……びくりとも反応しない……」

「おまえ今どこ見た？　うら若い娘さんがどこに注目した？」

「雷真が不能じゃないことは、とうに確認済みですし……」

「いつ確認した？　いいから服を着ろ――」

着物のえりを引つ張り、無理やり着せる。胸が隠れて、まずはひと安心。ほっと息をついたとき、突然、ぱりんつとガラスが割れるような音がした。

夜々の瞳から急速に生気が抜け、文字通り人形のようになる。

夜々は泣くのをやめ、ふわりと力なく微笑んだ。

「うふふ……雷真ったら……ふふ……そんなことないです」

独り言？

違う。楽しげに談笑を始めたのだ。目の前の櫻の木と――

櫻の木が何かに――理想の雷真に――見えているらしい。

夜々はびとつと木にもたれ、幸せそうに微笑んだ。

「はい、雷真。夜々はずっとここにいます。永遠に——♡」

雷真は戦慄した。

まずい。夜々の値段は軍艦一隻に相当する。もしも壊してしまったら、一生かかっても弁償できない。そもそも、夜々がいなければ夜会に参加できない！

雷真は必死になって、夜々の肩をつかみ、揺さぶった。

「おい、正気に戻れ！ 戻ってくれ頼む！」

「ふふふ……雷真……雷真……雷真……雷真……雷真……♡」

夜々はこちらに見向きもしない。あれほど雷真になついていたのに！

溜めに溜めた不満と鬱憤が、雷真が生死不明になったこと、生きて戻ってきたことで、

暴走してしまったようだ。

まして、雷真は夜々を拒み続けている。夜々が体全体で伝えてくる愛情を、冷たく無下

にしていたのは雷真の方だ。

もう、このままに捨て置くことはできない。

ここはきっちり説明しなければ、夜々も納得できないだろう。

「……おまえにだけは言いたくなかったが」

そう前置きして、雷真はついに、二年間守り通した〈秘密〉を口にした。

「俺にはな、許婚がいるんだよ」

「え——？」

効果あり。夜々は即座に我に返り、食いついてきた。

「嘘ですー だって雷真……二年も一緒にいて、そんなこと一度も……」

「言う機会がなかったんだ。それに、まあ、その……怖くて」

「夜々との関係を壊したくなくて……？」

「いや、肉体を破壊されそうで」

「そんな……雷真……ずっと、夜々をだまして……っ」

「ちょ——待てよ？ 何もだましてないからな？ 俺は何もしてないだろ？ とにかく

話は最後まで聞——落ち着けえええ——」

首を絞められ、吊り上げられる。みしみしと軋む血管。意識が急速に遠のく。喉をつぶされる前に、雷真はあわてて叫んだ。

「けっ、結婚はしない——」

「……え？」

「だから、俺には結婚の意志がないって言ったんだ——」

きょとん、とした顔。指から力が抜け、雷真を取り落とす。

げほげほと咳き込みながら、雷真は酸素を求め、空気を吸い込んだ。

「結婚しないって、どうしてですか？」

「お……親同士が勝手に決めたことだし、そもそも赤羽一門はつぶれちまったんだ。縁組みは無茶つてもんだぜ。だが、まだ正式に破談になったわけじゃない。破談にする前に、ほかの女という仲にはなれねーだろ。仁義にもとる」

「……カタブツですね、雷真」

「今おまえ舌打ちしたな？」

雷真は喉をさすりつつ、自嘲気味に笑った。

「どのみち、俺にとっては高嶺の花だ。釣り合いが取れない」

「それは……本当はその女を愛してゐるって意味……!?」

「違う！ 拡大解釈するな！」

「だって、未練がないなら、どうして破談にしないんですかっ？」

「いや、それはその……向こうが、納得しなくて……」

言いかけて、はっとする。こんな爆弾発言、自殺行為だ！

幸い、夜々には聞こえなかったらしい。今泣いたカラスがもう笑って、夜々は嬉しそうに微笑んでいた。

「結婚の意志がないなら、私たちの愛には何の障害もないってことですね？」

にこにこ。にこにこ。夜々はほがらかに笑っている。雷真は安堵した。笑顔に病んだ影がない。フレイと知り合う前の夜々だ。

「ああ、そうだ。障害はない」

「じゃあ、早速パンツを脱いでくださいー」

「おまえ、俺の話聞いてたか？」

そのやりとりを、近くの茂みで盗み聞いている者がいた。

黒い毛並みのオオカミ犬と並んで、体育座りをしている少女。

フレイだ。先ほど出迎えの一团の中にいたものの、警備に阻まれて身動きが取れず、声をかけるタイミングを逃したのだ。

許婚という言葉を聞いて、フレイはびくつとした。

首のマフラーを両手で握り、無意識にもみくちやにする。

許婚。許婚。フレイは音に敏感だ。その単語を口にしたとき、雷真の声に不思議なぬくもりが宿つたのを、しっかり感じ取っていた。

強力なライバル出現の予感に、下唇をかむ。

「……ひよっとして」

誰かの姿が脳裏に浮かび、はっとする。それはただの直感に過ぎなかったが、いかにもあり得そうな空想だった。

たわわな胸一杯に不安が広がり、ふるつと震える。

相棒のラビがビスビスと鼻を鳴らし、なぐさめるように鼻先を押しつけてきた。

フレイはふさふさの胸毛を撫で、ラビの首に顔を埋めた。

ひなたのにおい。土と草のにおい。

ラビのにおいで気持ちを落ち着け、気配を殺して立ち上がる。

ラビの背中に腰を乗せ、スタート。本立ちを一息に駆け抜け、メインストリートに戻るうとする。だが、ラビは間もなく足を止め、ピンと耳を立てた。

首を高く上げ、あたりを見回す。明らかに警戒している。

ややあつて、ばさりと翼をはためかせ、大きな影が下りてきた。

威厳に満ちた雄々しい姿。ラビも大型の犬だが、相手はそれに数倍する。

四枚の翼を持つシルエット。その背にまたがり、こちらを見つめているのは、

「(暴竜)——」

フレイは目をまん丸にして、同じ寮の後輩——今は「おたずねもの」になってしまった、彼女の通称を口にした。



Chapter 5 敗北を禁ず

1

午後八時、雷真は夜会の交戦フィールドに入った。

萌子に内緒の電話を入れたり、遅れたレポートをまとめたりしているうちに、すっかり遅くなってしまった。フィールドにフレイの姿はない。執行部の審判に訊いてみたところ、フレイはまだ現れていないそうだ。

戦いが始まらないので、ギャラリーの学生たちも退屈そうにしている。

それから一時間経っても、誰も現れなかった。

「対戦相手、きませんでしたね」

となりの夜々がほっと胸をなで下ろす。

「戻りましょう雷真。まだ本調子じゃないんですから」

舞台が上がってから一時間。規定に従えば、雷真は義務を果たしたことになる。執行部の審判もそれを認めた。もう、寮に戻って休んでいい。



しかし、雷真は動かず、石柱のひとつをにらんでいた。

「雷真……？」

「フレイは別にして——昨日今日と、八七位は俺たちをさけた」

「きつと、雷真に怖れをなしたんです」

夜々は嬉しそうに言う。だが、雷真は難しい顔で考え込んだ。

「まずいな。ちょっと、面倒なことになりそうだ」

「どういう意味ですか？」

「昨夜だけなら、八七位の独断だと思える。だが、今夜もこのまま、終了時刻まで八六位が現れないだとすれば」

「すれば？」

「今夜の支配権は結局のところ八六位にある。八七位が安心してサボタージュを決め込むには、『八六位も現れない』とわかってなくちゃならない。『フィールドに留まる義務』が免除されるのは、自分より上位の奴が交戦を放棄したときだけだ」

「じゃあ、二人はグル……？」

「そうなるな。しかも、八六位がサボるってことは」

夜々はわかったようだ。両手で口を覆い、驚きをあらわにする。

「明日、三人で——」

「あるいは、もっと先があるのかもしれない」

察するに、仲間を増やして夜会を切り抜けようとしている。

九七位から上はフレイがひとりで倒してしまった。ロキはそのフレイよりもさらに強い。そしてダークホースの雷真。このクラスの参加者にとっては、いずれも強敵だ。

にわかに共闘を始めたのか、それとも前々から予定していたのか。

「この先が恐ろしいぜ。だが、好都合でもある」

「え、好都合？」

「賽に戻る。行くぞ、夜々」

「はい。でも、明日の夜会はどうするんですか？ 何か対策が？」

「そっちはなるようになる。明日の心配をする前に、まずは今夜の心配だ」

ぎくつと夜々が立ちすくむ。嫌な予感がするのだろう。夜々は視線を泳がせ、それからおそるおそる、雷真を見た。

雷真は不敵に笑い、うなずいた。

「今夜、人喰い鮫を釣り上げる」

夜会の交戦フィールドを離れ、寮に戻った雷真は、自室の前で足を止めた。

「雷真、あかりが……」

夜々が警戒してつぶやく。雷真はかまわず扉を開けた。

クチナシの香りとともに、濃密な煙が雷真を迎える。部屋中に渦を巻く紫煙。あまりの煙草臭さに、思わずせき込んでしまった。

その原因を作った女が、窓枠のところに腰かけていた。

大きく胸のあいた着物をまとう妖艶な美女。〈花柳斎〉硝子。

彼女の足もとには、大量の吸い殻が捨てられていた。

硝子がかつんと灰を落とし、吐き捨てるように言った。

「煙草が不味いなんて、何年ぶりかしらね」

「……すまない。その、俺のわがままで」

「軍のお歴々でもできないことよ。この花柳斎をあごで使うなんて」

硝子は袖に手を差し入れ、中から紙の束を引き抜いた。

ばさりとテーブルに投げ出す。紙には、書面のように美しい文字と、人体の模式図と、

無数の数字が書き込まれている。

「見ての通り、すべて正常値。あの子の体には何の問題もないわ。健康優良児と言ってもいいでしょう。これで満足かしら、雷真さま？」

「よしてくれ。じゃあ、アンリ本人は安心なんだな？」

「二度も言わせないで」

「わかった。ありがとう。手間を取らせて悪かった」

硝子は刺すような視線を向け、確かめるように言った。

「約束よ、坊や。これが最後のわがまま。これからは軍の言うことを聞き分ける」

「ああ」

「おいたはこれつきりにして頂戴。さもないと、もう可愛がつてあげないわよ」

うふん、と胸を見せつけるように持ち上げ、挑発する。

雷真は鼻血を噴きそうになって、あわてて顔を背けた。

「か、からかわないでくれ」

「雷真……いつの間に……そんなこと……」ううう。

「何もない！ 硝子さんの悪ふざけだー」

「悪ふざけ!? 悪ふざけで何をしたんですか!?」

怒り出す夜々。その後ろをすり抜けて、硝子は無言で出て行った。

いつも通りにふるまっているが、やはり硝子は機嫌が悪い。

それでも、雷真のために骨を折ってくれた。

雷真は心の中で頭を下げ、硝子の背中を見送った。

少しは落ち着いたのか、夜々が心配そうに寄ってくる。

「雷真……硝子と何か取り引きしたんですか？」

「ああ」

「この書類、アンリエットさんの生体情報ですよ。硝子がアンリエットさんを調べる代わりに、事件から手を引くってことですか？」

「ああ」

「それじゃあ、もう無茶はしないんですね？」

「いや。硝子さんには悪いが、おかげで上手くやれそうだ」

「え……硝子を騙したんですか？」

「硝子さんは騙されるような人じゃない」

わかってて、黙認してくれたのだ。だから不機嫌だった。

「でも、裏切りを許すような女でもありません。もし、本当に裏切ったら……」

これは硝子が与えた最後のチャンス、という考え方もできる。

雷真が本当に硝子の信頼を裏切れば、どうなるかわからない。

だが、雷真は決意を秘めた目で、何でもないことのように言った。

「俺はどうしようもないバカ野郎だ。よく知ってるだろ？」

「でも、雷真には目的があります。はるばる英吉利までやってきたのは、目的を果たす

ためです。撫子なごさんが大事だから、だから雷真らいしんは……」

「撫子なごを護まもれなかったこと、俺おれは今も後悔こうかいしてる」

雷真は本心を偽らず、さらけ出すように言った。

「俺は弱い人間だから。その後悔を憎しみにすり替えているだけかもしれない。あいつを殺したところで撫子が生き返るわけじゃない。復讐ふしゅうなんだ、ただの自己満足だ。でも……俺が撫子のためにしてやれることは、それだけなんだ」

「じゃあ、どうして……」

「あのときと同じ後悔をしたくない。結局、自分のためさ。俺は弱い人間だから——後悔するのはもうごめんだ」

そつと夜々よやの肩に手をかけ、漆黒しつこくの瞳をまっすぐにのぞき込む。

「これは軍の命令じゃないし、むしろ違反行為だ。硝子しょうこさんに背くことにもなる。それでも俺に力を貸してくれるか、夜々」

「……よく知ってるでしょう、雷真」

雷真の手に、そつと自分の手を重ね、微笑ほほえみむ。

「夜々は雷真のお人形。雷真は夜々が護ります。どんなときでも」

「……ありがとよ。だが、俺もおまえをみすみす傷つけさせやしない」

「雷真……♡」

「これ以上、硝子さんに叱られたくないからな」

びきつ。

「硝子、硝子、硝子……また硝子！」

「……アレ、夜々？　ちょ……おまえ！　俺を譲るって言ったばかりだろ！」

「雷真は馬鹿ですーっ！」

まったくわけがわからない。雷真はあわてて部屋を飛び出した。

3

間もなく日付が変わろうという時刻。冷たい夜風をかきわけ、十三頭もの犬を引き連れた乙女が、深夜の木立ちを歩いていった。

フレイだ。夜会の帰り道、《ガラム》たちを散歩させている。

「ねえ、ラビ。昼間の《暴竜》の言葉……どういう意味、だったのかな？」

ラビはぼすぼすと足音を立てながら、主の顔色をうかがった。あいにく、犬なみの知識しか持たない彼には、聞いかけの意味は理解できなかった。

「《暴竜》……つらそうだった……」

秘密をうち明ける声は張り詰め、いっそ悲痛なほどだった。フレイにはわかる。シャル

は無理をしている。言葉とは裏腹に、きつと彼、彼を持っている……。

ふと、犬たちが一斉に立ち止まった。

びっくりして前を見ると、前方にはグリフォン女子寮。その優美なシルエットを壊す、虫のような物体が、寮の外壁にへばりついている。

いや、虫よりもはるかに大きい。人間……変質者？

窓枠を足がかりにして、張りついているのは男子学生だ。

(あれは……ライシン？)

彼がのぞいているのは三階の外れ。シャルとアンリの部屋だ。

フレイは動転した。ライシンが、アンリに夜這いをかけようとしてる！

フレイがあうあうとあわてているうちに、雷真は窓を蹴破って侵入した。

人を呼ぶべきか、駆けつけて聞いたただすか、見て見ぬふりをするか。

一生懸命考えているうちに、雷真はもう飛び出してきた。

どこからか夜々が現れて、雷真に手を貸し、窓から飛び降りる。

雷真の肩にはネグリジェ姿の少女——察するにアンリが担がれていた。

「ライシンが……アンリと駆け落ち……!?」

天然丸出しの思考回路で、フレイはそうつぶやいた。

「ライシン・アカバネが一族のおちこぼれ？」

育ちのよさそうな顔に、驚きの色が浮かぶ。

執行部の議長室。部屋の主の少年が、優雅にカップを傾けている。

室内にはほかに二人の人間がいた。シンがテーブルの前に立ち、ラヴェンナー——の姿をしたシャルが、ハトを抱いて、部屋のすみに座っている。

シンは主の言葉に首を上下させ、

「はい。アカバネは筋では知られた血族集団ですが、（下から二番目）は一族になじめず、

魔術の訓練を受けなかったそうです」

「彼の成績は言葉の壁が原因かと思っていたけど、本当にバカなんだ」

「そのようで。魔術師としては素人同然だと」

「フェリクスもバカだね。そんな奴に計画を邪魔されるなんて」

紅茶に口をつけ——何かに気付いたように、カップを皿に置く。

「どうかなさいましたか？」

「ひよっとしたら、魔術師協会の番犬どもは、ライシン・アカバネではなく——人形の方をマークしてるんじゃないかと思ってるね」

「コンゴリキの人形……ですか」

「資料の通りなら、何て言うかつまらない……単純な魔術だね」

少年は思慮深そうな目をして、壁をにらんだ。

「自己領域内の単子モノイドを超硬度物質化する。それを応用して、筋力を約千倍にまで高める。

発想が単純なぶんだけ堅牢けんろうだけど、弱点だらけじゃないか」

「おっしゃる通りです。どちらにしろ、過大評価では？」

「かもしれない。でも、もしそれが過大評価でないとしたら」

「ちらり、と意味ありげな視線を従者に送る。

「あの人形はおまえと同じかもしれないよ、シン」

「びたり、とシャルの手が止まる。

「嘘か真か、カリユーサイって人形師は『人間を作った』らしいんだ」

「——さすがにそれは、ヨタ話のたぐいでは？」

「僕はそうは思わないね」

「なぜです？」

「それじゃ、面白くないだろう？」

無邪気な笑顔。それから急に真顔になって、ふところから水晶玉を取り出した。まるで、ここにはいない誰かから連絡が入ったような動きだった。

少年は水晶玉をのぞき込み——そして、はははと笑い出した。

「面白いことになったよ。(下から二番目)がアシリエットを誘拐した」
利那、くすつと小さな笑い声が割り込んだ。

シャルだ。シャルが口を押さえ、笑いを噛み殺している。

「おや、ラヴェンナ。何がおかしいんだい？」

「あいつをバカ扱いしてるからそうなるのよ。バカにしていた相手に、まんまと出し抜かれた気分はどう？」

「ずいぶん変わり身が早いね、尻軽。フェリクスに可愛がつてもらった尻を、今度は東洋の猿に差し出すのかい？」

「—」

「どうしたんだい、真っ赤になっちゃって。今さら恥ずかしがることもないじゃないか。フェリクスの前じゃ、雌猫みたいに鳴いて悦んだんだろう？」

「ふ——ざけないでっ—」

シャルの紅潮した顔は、羞恥のためではない。

怒りだ。誇りを傷つけられて、激怒している。あまりと言えばあまりの屈辱。プリュー伯爵家の令嬢が、面と向かって、そんな言葉を投げつけられるとは！

少年はおやつという顔をした。

「これは驚いたね、まさか手つかず……。だったら、ごろつきの溜まり場に君を裸で放り込んであげようか？ きつと楽しいことになると思うよ？」

紳郎、シャルの瞳から怒りが消えた。

「……好きにきなさいよ」

冷やかに言い捨て、見るのも汚らわしいとばかり、目を背ける。

怒りをぶつける価値すらないと、そう切つて捨てたも同然の態度。

だが、少年は機嫌を損ねた様子もなく、にこにここと、

「同情するよ、シャルロットさん。勇名を馳せたブリュー伯爵家も今じゃ落ちぶれて見る影もない。元伯爵は妻子を捨てて大陸で行方知れず。伯爵夫人は困窮し、実の娘を売り飛ばそうとする始末。教えてあげたっけ？ アンリエットはねえ、あわや娼館に売り飛ばされるところを、僕が保護してあげたんだよ」

「——嘘よ！ お母さまは、たとえ自分が飢え死にしたって、アンリを売り飛ばすようなことはしないわー」

「事實は残酷だね。どだい、君だって母上を責められた義理かい？ 妹想いの優しい姉を演じながら、心の中では優越感に浸っていたんだろう？」

「……優越、感？」

「神さまは粋なはからいをしたもんだね。姉には美貌と教養、そして十分な魔力を与えて

おきながら、妹には一段劣るものしか与えなかった。おかげで姉はいつでもいい気分さ。

妹を側そばに置いておくだけで、自分は優れていると実感できる。デキの悪い妹でも——いや、デキが悪いからこそ、いなくなられちゃ困るよねえ？」

「違うわー 私、そんなこと——」

「人間嫌いの《暴竜》さんが自分の身を犠牲にしてまで、グズな妹を可愛がる理由がそれだよ。いやはや、美しい姉妹愛もあったもんだね」

シャルは小刻みに肩を震わせた。悔しさで涙すらにじんでいる。

少年はますます調子に乗って、さらに言葉でシャルをなぶった。

「さっきの、ごろつきどもの慰みものにするって話だけどさ。代わりに妹を放り込んでもいいんだ——と言ったら、《暴竜》さんはどんな顔をするのかな？」

刹那、ごうつ、と魔力の炎が噴き上がった。

シャルの体から青白い炎が噴き出し、ハトのシグムントが闇色の妖気まじきをまとう。たとえば魔術師でなくても、肉眼で確認できただろう。

「もし、アンリに何かしたら……貴方あなたの血筋を根絶やしにしてやるわ……—」

ぱしつ、と鋭い音が鳴り、シャルの頬が激しく打たれた。

顔を殴られ、倒れ込むシャル。

少年がゆっくり横を向くと、シンがこうべを垂れていた。

「出すぎた真似をしました。ですが、坊ちゃまに無礼を働く者を、捨ておくこともできません。それがたとえ、坊ちゃまの腐りきった性根、曲がりきった根性がもたらした結果だとしても、です」

「OK、シン。おまえのお仕置きは後回しだ。それはそれとして、アンリエットの方だけど、放っておくわけにもいかないな」

「私が参りましょうか？」

「……招待を断るのは無粋か。そうだね、おまえに任せることにするよ」

「では、ただちに奪還いたします。（下から二番目）はいかがいましたでしょうか？」

「殺してしまつていいよ。生首をちぎつて持つてくるんだ。せつかくだから、その尻軽にプレゼントしよう。できるかい？」

「極めて悪趣味ですが、坊ちゃまの御せとあらば、たやすいことです」

シンはそつとこうべを垂れ、窓から飛び出して行つた。

シャルは打たれた頬をさすりながら、血がにじむほどに唇を噛んだ。

「おや？ 何か言いたそうだね、シャルロット」

「……何を、企んでいるの？ どうして、私たちを」

「どうして君たち姉妹をいじめるかつて？ 簡単なことだよ。楽しいからさ」

「——」

「それに、君をいじめることでフェリクスの溜飲も下がるだろ？　僕らは——セドリツクとフェリクスは従兄弟同士で、おまけに親友なんだよ」

「嘘よー　貴方はセドリツクじゃないわー」

「おや、面白いことを言うね。本人を目の前にして」

「わかりきってることじゃないー　変身の魔術が使えるのに——」

恐怖が込み上げ、言葉が震える。

得体の知れない敵を相手に、シャルの心は砕けそうになっている。

シャルはじわつと涙をにじませ、震えながら問いかけた。

「何……なの？　貴方は一体……何なの？」

少年はふつと微笑み、

「僕は影」

楽しげに、歌うように、あるいは踊るように告げる。

「実体のない、影なんだよ」

5

「いやっ……私、野蠻な男に連れ去られて……めっちゃくちゃにされちゃうーっ」

「人聞きの悪いことを言うな！ おまえを助けてやろうってんだよ！」

大声で否定したのは雷真だ。ネグリジェ姿のアンリを担いで、深夜の森を疾走中。はたから見れば、人さらいにしか見えない。

そのすぐ後ろを、背後を気にしつつ、夜々がついてくる。

アンリはわけがわからない様子だったが、無敵な抵抗はやめた。

荷物が大人しくなつたので、そこからはスピードが出る。メインストリートを駆け抜け、ゲートとグリフォン女子寮のちょうど中間地点で足を止める。

「ここらでいいだろう。これ以上（ゲート）に寄ったら、警備に気付かれる」

アンリを下ろす。具合の悪い右肩は、感覚がなくなっていた。

「あの……説明してください」

アンリがおずおずと言う。夜々を見ると、こちらにも聞きたそうにしている。そう言えば、詳しい説明をしていなかった。

雷真はうなずき、半ば問い詰めるようにアンリに言った。

「シャルが無茶苦茶やつてるのは、おまえが人質だからだろ？」

「……はい」

隠しきれないと思つたのか、案外、素直にうなずく。

夜々が不思議そうに首をひねった。

「どういう意味ですか、雷真」

「アンリは死ぬのが怖いと言った。つまり、そいつは『死にたい』んじゃないかって、『死ななければならぬ』んだ」

「え……どうしてですか？」

「俺もそれ考えた。そして、ひとつの仮説を立てた。死ななければ、誰かの——シャルの（弱み）になっちまうんじゃないかってな。そう考えると、恐竜娘が無茶苦茶やってる理由も見えてくる。大方シャルは、『アンリの命が惜しければ学院長を暗殺しろ』とでも言われてるんだろう」

単純な理屈だ。夜々の頭の中でもつながったようだ。

「あ、それで硝子に……アンリさんの体に何か仕掛けられているかもって」

「そうだ。魔術的な爆弾とか、毒とかな」

だから、わざわざ硝子を呼び出して、アンリを視てもらったのだ。

「でも、そんなものはなかったから……」

「始終、アンリを見張ってる奴がいる」

「え……いつも、ですか？」

「アンリは七度も自殺未遂をした。それだけやって、そいつがいまだに生きてる理由だよ。妨害してる奴がいるんだ。人質に死なれちゃ困るからな」

アンリはこぶしを握り、地面をにらんでいる。今にも泣き出しそうなその表情が、雷真の推測が正しいことを物語っていた。

「その通りですけど……無理なんです。逃げ切れるわけが、ないんです。私を、監視の目が届かないところへ連れて行くなんて……不可能です」

「そのつもりはねーよ。逃げるのもここまでだ」

「え……？」

夜々とアンリの声が重なる。

「連中はやり手の悪党だぜ？ 俺が人質を奪い去ろうとすれば、当然——」

びくり、と雷真の耳が動く。雷真はにやりと笑って、

「——食いついてくるのさ」

ぶおんっ、何かが雷真のすぐ目の前まで飛んできて、静止した。

本人はびたりと止まるが、彼が押しのけた空気はそういうわけにはいかない。砂ぼこりが舞い上がり、夜々の髪が乱れる。

アンリが絶望のため息をつく横で、雷真は暗々として言った。

「さすがに対応が速いな。猟犬が優秀だと、こつちも待たされずに済むぜ」

「坊ちゃん（ぼやうちゃん）の執事は優秀でなければ務まりませんのでね」

執事。その服装を見て、なるほどと思う。スーツの仕立ては上等だが、抑制の効いた、



地味な雰囲気は従者好みだ。ただし――

「執事が色つき眼鏡めがねかよ。不良執事め」

「バトラーは私服が許されておりますゆえ」

雷真らいまことは油断なく相手を観察した。

半日前、地下で雷真を襲った男だ。体格は細身。自動人形オートマトンは連れていない……が、秘め

た魔力を感じる。やはり魔術師だ。

「キングスフォートの手の者……じゃねえよな？」

「さて、どうでしょうか」

「執事さんなら、少々痛い目を見せたところで口を割りそうもない……か」

「だとしたら、どうします？」

「無理やり調べるさ。そして、頭の腐ったご主人さまを引っ張り出す」

「――腐くった？」

「そうだろ？ アンリを人質に取って、シャルに人殺しをさせようなんぞ、まともな人間の考えることじゃない」

「……確かに、坊ちゃんぼやの脳みそは沸いています。三度のお食事より謀略が好き、という
金きんみきった方です。早晚、グランビル家もおしまいです」

「ほう、優秀な執事さんだな。ボスの名前を教えてくれるのか」

「坊っちゃまの執事は優秀でなければ務まりませんよ。しかし、完全無欠というわけにはま
いりません。ただひとつ難をあげるとすれば」

男はうつすら微笑み、底冷えのする声で言った。

「ほんの少し——キレやすいのでございます」

真横に飛び、街路樹に蹴りをぶちかます。

大木がたやすくへし折れる。色つき眼鏡の向こうには、それでも収まらない憤怒の色。
主を悪く言われて、腹を立てているようだ。

主の名前を教えたのは、いわば死刑宣告。

人形ともども生かしては嫌さな、ということか。

「行くぞ、夜々。こいつをぶっ倒して、シャルを救う！」

「はい！」

そして、絶対に負けられない戦いが始まった。

6

証拠があれば、問題ない——そうキンバリーは言った。

そして今、雷真の目の前に、動かぬ証拠が転がり込んできた。

いや、まだ証拠にはならない。こいつを上手く拘束するか、あるいは上手く誘導して、黒幕の正体に迫らなければ。

逃がしてもいいが、最悪でも勝たなければならぬ。アンリの安全さえ確保されれば、アンリの口から、事件のあらましを公にすることができる。

「離れるなよ、アンリ」

雷真は背中にアンリを隠し、相手と対峙した。

先に動いたのは、向こうだった。

ふっと消える。夜々が敵を見失い、動揺する。雷真も度肝を抜かれたが、昼間の戦いは無駄ではない。即座に相手の居場所を探し出し、とらえている。

「上だー」

夜々はとつさに頭をかばう。そこに男が出現し、足を振り下ろした。

雷真が魔力を送り込む。夜々の剛性は瞬時に増し、男の蹴りを弾き返した。

直後、男は再び姿を消した。

——いや、消えたのではない。消えたように錯覚しただけだ。

男の動きは速い。その上、通常あるべき慣性の影響がない。いきなり最高速に到達するし、進行方向をあり得ない角度に変えることができる。

ゆえに、消えたように錯覚する。死角は雷真の認識にある。

格闘戦においては、相手の攻撃を見てから動いたのでは遅い。それゆえ、見る前に（先読み）し、予測を事実のように扱う癖がついている。

その癖が、皮肉にも今、雷真に錯覚を起こさせているのだ。

とっと冷や汗が噴き出る。自分が浮き足立つのを感じる。背後のアンリが気になって、集中が乱れる。だが、相手は待つてくれない。右手に現れ、こちらに迫ってきたかと思うと、突然消えて、左手から攻撃がきた。

男の脚が弧を描き、斜め上から、ハンマーのごとく夜々を襲う。

夜々は受け止めたが、衝撃で足もとが沈んだ。

重い――石畳が砕けた！

またも、男の姿が消える。遅れて認識したもの、それは網膜に残る残像。男はすべるように動き、再び消え、今度は夜々の背後に回った。

夜々の背中に蹴りを見舞う。夜々の体は衝撃に耐える……が、これでは身動きが取れない。攻撃できなければ、勝てるわけがない――

（感じろ……相手の動きを、直感で見極めるんだ……）

神経を研ぎ澄まし、相手の動きに慣れようとする。

だが、それはいささか、悠長に過ぎたようだ。

真下からの蹴りを喰らって、夜々の体が浮いた。

浮き上がった夜々の体を、男は一回転のひねりを加え、蹴り飛ばす。夜々は斜め上に飛び、大木に叩きつけられた。

「夜々ー」

思わず叫んでしまつて、後悔した。

夜々の心配をしている場合ではなかった。これは実戦。相手にとって勝利とは、夜々を叩きのめすことではなく――雷真を殺すこと。

気付いたときにはもう、間合いに侵入されている。

男の蹴りが迫る。アンリを押しつけつつ、本能だけでかわす。吹き抜けた蹴りが戻ってくる。これは運だけでかわした。しかし――

直後、腹に凄まじい「重さ」がかかった。

とつさに体を浮かせ、衝撃を逃がしていたのは、ほとんど奇跡と言つていい。

吹っ飛ばされる。風景が前方に流れ、背中に強い風を感じる。

べきばきばきんつ、と盛大な音を立てて、あばらが砕けた。

痛覚神経が一斉に興奮し、脳髄を焼き尽くすような激痛が走る。

飛びかける意識。視界が暗闇にのまれかけた、そのとき。

夢か現か、彼女の姿を見た。

うす桃色の髪の乙女。

街路樹の枝に立ち、凍てつくような眼で雷真を見下ろしている。

撫子にうりふたつの、あの乙女——

刹那、怒りが雷真の意識を現実に取り戻した。

まだ、死ねない。

赤羽天全を殺すまで……死は許されない！

反転して足から着地。目の前の敵と向かい合う。

だが、肉体が限界を越えた。刃物が内臓をえぐったような痛みが走り、ごぶっと大量の血が口からあふれた。立っていられず、その場に倒れ伏す。

「雷真!?」

夜々が動転する。その隙を見逃してくれるほど、相手は甘くない。

男は夜々の真上に出現し、くるりと一回転。落雷のような蹴りを落とした。

普段なら夜々が好んで使うような蹴り方だ。敵のかかどが夜々の脳天に決まり、夜々はその美しい顔で、石畳を叩き割ることになった。

「——おっと、いけない。坊ちゃまの命令を忘れるところでした」

男がすんと着地して、ゆっくりこちらに歩いてくる。

「グランビル家の執事は優秀ですが、完全無欠ではありません。ただひとつ難をあげるとすれば、少しばかりうっかりさんでしてね——ミスター・アカバネ、貴方の生首を取って

こいという命令なのですよ」

コツコツという靴音がすぐ耳元で止まった。

「やめ……やめてください……っ」

アンリが震え声で、しかし果敢にも制止しようとする。

だが、男が聞き入れるはずもない。男は足を振り上げ、雷真の上に持ってきた。

雷真の首を踏みつぶし、胴体から切り離すつもりなのだろう。

膝蓋とした頭で雷真は死を悟った。アンリの悲鳴が響き――

ざんっ、と石畳を貫いて、何かが大地に突き立った。

あやうく足を切断されそうになり、男が飛び退く。

雷真のすぐ眼前、大地に突き立ったのは大剣だった。

鋼鉄の鈍いきらめき。柄の部分には無機質な人形の顔。その磨き上げられた刀身、持ち手の刺々しい形状には見覚えがある。

かつり、かつり、と松葉杖が石畳を打ち、近付いてくる者がいる。

誰かが雷真の前に立ち、そして言った。

「オレは謙虚で寛大だ。……が、どうにも許せないものが三つある。オレに命令する奴。」

オレに備向かう奴。そして」

不遜な口調で言い捨てる。

「他人の獲物に手をかける、お行儀の悪いクソ野郎だ」

雷真は血を吐きながら、彼の名前をつぶやいた。

「ロキ……」

間違いない。フレイの弟ロキ。〈自ら廻る焔の剣〉だー

夜々がアンリを抱え、ロキの背後、雷真のもとに逃げてくる。

夜々に抱き起こされながら、雷真はロキの戦いを見守った。

大剣ケルビムのパーツがゆるみ、人間に近いフォルムに変形する。と同時に、その背中、翼のようなパーツから、八本の棘が射出された。

棘は短剣。それぞれが意志を持つかのごとく、標的に殺到する。

だが、男は空中をすべり、やすやすとかわした。予備動作も慣性もない異様な動きで、ロキに向かって突っ込んでくる。

叩きつけるような蹴り。ケルビムがロキをかばい、ブレードでさばく。がきんっと金属音が響き、ブレードがたわむ。恐ろしく重い！

そして始まる蹴りとブレードの応酬。さらに、八本の短剣が宙を舞う。

雷真は舌を巻いた。やはりロキはレベルが違う。ケルビムで格闘戦をやりながら、八本



もの短剣を自在に操るとは――

しかし、それでも、男は倒せない。

風車のように回転して、短剣をひとつ残らず蹴り飛ばす。驚くべき速度。そして精度。瞠目する雷真の前で、男は不意に身を沈め、足もとの石畳を蹴り上げた。

石の塊が飛んでくる。ロキの視界がふさがれ、ケルビムの動きが止まる――
（やられる――）

だが、ロキはあわてず、石をブレードで真っ二つにした。そして、

「ケルビム、廻れ！」

ケルビムを變形させる。

（このタイミングで變形……!?）

大剣は大きく弧を描き、ロキの背後へと飛んだ。

岩すら切断しそうな鋭さで、何かを斬る。

（――当てやがった！）

男のスーツが裂ける。だが、その下の胸板は無事だ。出血もしていない。

一方、ケルビムの刃は先端がつぶれ、たいらになっていた。

さすがのロキも目をむく。そう言えば以前、ロキは豪語していた。ケルビムに斬れないものなど存在しないと。その言葉に例外ができてしまったようだ。

男はかすかに笑っていた。その肩がゆっくり上下する。息があがっているように見えたのは錯覚か？

……だめだ、目がかすむ。確認できない。

夜々の背中もふらつき、ロキのこめかみにも冷や汗が光っている。

状況はよくない。このままでは……。

雷真の胸中に雷気が芽生えかけた、そのとき。

「がうつー」「がうがうつー」「がうんっー」

いくつもの吠え声があたりに響き渡った。

暗闇の中から、四つ足の獣たちが飛び出してくる。

ひととき大きな獣の背中にはフレイが乗っている。〈ガルム〉だ！

大嫌いのアンリが頭を抱えてしゃがみ込む。一方、男は瞬時に判断をくだした。ロキに

背を向け、林へと飛ぶ。

そして、そのまま、見えなくなった。

「……逃したか」

ロキが悔しげにつぶやく。脅威が去り、夜々はその場にへたり込んだ。近寄ってくる犬

たちの気配に、雷真の緊張も急速にゆるむ。

あつと思つたときにはもう、雷真の視界は真っ暗になっていた。



Chapter 6 心から望むこと

1

フレイが連れてきたのは〈ガルス〉だけではなかった。警備がぞろぞろと集まってきて、雷真をタンカに乗せ、医学部へと運んで行く。夜々とアンリもそれについて行き、その場にはロキとケルビムが残される。

そのロキの側^{そば}に、姉がとことろ寄^よってきた。

じつと見上げてくる。ロキは居心地が悪くなり、ぶっきらぼうに言った。

「何だ。あの死に損ないを放^{はな}っておいていいのか？」

「う……」こめんなさい。私が、もう少し早く……ついていれば」
しよぼん、とうつぶく。

「私はロキのお姉ちゃんなのに……役に、立たない……」

「でしゃばるな。あんたがいても、足手まといになるだけだ」
しよぼん。



「つまり、その……渡りながらというのは、オレの性に合わない」

フレイが顔を上げる。

あまりに不審用すぎるロキの言葉。その冷たい言葉の奥に隠されたもの。以前は気付かなかったロキの本心が、今のフレイにはわかったようだ。

ロキは、フレイを危険な目に運わせたくないのだ。

フレイは軽く背伸びをして、ちゅ、とロキの頬にキスをした。

「なっ、な、なん——何の真似だ——」

ロキは狼狽した。彼らしくもなく、動揺をあらわにする。

頬にキスするくらい、姉弟なら当たり前のスキンシップだ。だが、そんなことをされるのは、ずいぶん久しぶりだった。

「ありがとう、ロキ。ライシンを護ってくれて」

「キンバリーに強制されたことだ。礼など不要だ——」

乱暴に言い捨て、怒ったような足取りで姉の前から去る。

その後ろを、がしやんがしやんと騒がしく、人間型のケルビムがついてくる。

「……何か文句があるのか、ケルビム」

「No... No... I'm ready」

平板な返答。だが、笑っているように見えたのは気のせいかな？

ロキは松葉杖を乱暴に振り回し、憤然として石畳を蹴った。

2

議長室の窓辺から、少年は深夜の学院を見下ろしていた。

「冷えるね。こう夜更かしが続いたんじゃ、お肌が荒れちゃうよ」

独り言のような台詞。それは、背後に控えた従者に向けられていた。

「申し訳ありません。アンリエットを奪還できず……」

「仕方ないさ。(自ら廻る雫の剣)が出てきたんじゃあ」

「しかし、私は(下から二番目)の首も取れず……」

ぶっと、少年は噴き出した。驚くシンの目の前で、腹を抱えて笑う。

「おまえはまだ僕が理解できていないんだね。あんなのはお芝居、ちよつとシャルロットをからかっただけだよ」

「……そのお言葉の真偽はさておき、アカバネの首は」

「もちろん、手に入るなら、それに越したことはなかったさ。素晴らしい魔術マテリアルだろうからね。でも、それは欲張りというものだ」

少年はいつものように、にこにこと機嫌よく笑う。

「グランビルの目的はキングスフォートを援護すること。だけど、僕らの目的はおまえの存在を学院上層部に知らしめることさ。計画通り、舞台は整いつつある」

「耳目を集めつつ、退路を確保でき、かつ強力な相手がいる……」

「そういう舞台がね。その上、《愚者の聖堂》の存在まで暴いたんだから、御の字だよ。」

——《聖堂》と言えば、マグナスはどうだった？」

「正直に申しまして、あれが大体もいるのでは、私ひとりの手には負えません」

「そうこなくっちゃ！」

少年は嬉しそうに手を叩いた。

「レポートをまとめておくんだ。《戦隊》と一対一でやれる機会なんてそうそうないからね。おまえの貴重な体験を、きちんとババに伝えておこう。それから《聖堂》のことも。」

これまた、おまえの体験は本当に貴重なんだ」

「それはどのような意味でしょうか。聖堂は調査隊が——」

「彼らは全滅したよ」

「……全滅？」

「定時連絡が途絶えたんだ。生還したのはおまえだけ、ということになるね」

暗然とするシン。少年はふっと妖しく笑って、

「さすがに手強いねえ。ヴァルブルギスの学び舎にラザフォードあり——十九世紀最強の

魔術師と謳うたわれるだけのことはある」

「もう刻限が迫っています。(暴竜)は学院長を暗殺できるでしょうか?」

「そうなれば面白いけどね。それは無理だよ」

「——何ですって?」

「学院長にはマグナスがついている。今の学院長を暗殺なんて、できっこないよ。たとえば一個師団を投入したってね」

「それでは、シャルロットをけしかけたのは……?」

「もちろん、キングスフォートの意向だよ。上手くコトが運ばばよし、しくじった場合はグランビルに罪をかぶせる腹なんだろう。現に、キングスフォートは水面下で学院と協定を結ぼうとしている」

「それは……どのような協定でしょうか?」

「決まってる。(神の似姿)の共同研究さ」

「なる……ほど……」そこに、「グランビルの執事」が現れれば……」

「疑心、暗鬼を生ず——協定はおじやんだ。そして、そういった大人たちの思惑とは無関係に、これは僕個人の意志でもある。何と言っても、僕の一番の楽しみはね」
にこっと可愛らしく、天使のように微笑む。

「他人の不幸を見ることだよ」

「本当に……魂まで腐りきっていらつしやいますね」

「ありがとう、シン。楽しいお仕置きの前に、紅茶を淹れてくれないか。眠気が吹っ飛ぶようなのをね」

「御意に」

シンはうやうやしくこうべを垂れ、ティーポットを手に取った。

3

夜明け前の医務室は、冷たい静寂に満たされていた。

手術を終えた雷真は、病室に移されることなく、医務室に寝かされていた。

ほとんど寝息も立てず、死んだように眠っている。

アンリは沈鬱な表情をして、ひとり、雷真の前に座っていた。

雷真の怪我はひどかった。あばらが砕け、傷ついている臓器もあった。

それでもクルーエル医師は動じず、淡々と処置を行った。開腹し、あばらの位置を直し、固定して、縫い合わせた。一部でヤブ医者という声もあるが、案外、腕は確かなのかもしれない。少なくとも、度胸だけは揃わっている。

遠くに犬の遠吠えが聞こえ、アンリはびくつと腰を浮かせた。

「……おまえ、本当に犬が嫌いなんだな」

驚いて振り向くと、雷真は重たげにまぶたを上げ、天井をにらんでいた。

「ライシンさん——起きてたんですか？」

「……意外だぜ。シャルは犬が好きなんだろ？」

「私だって、嫌いじゃ……ない。犬は好きです」

「……じゃあ、何がそんなに怖いんだ」

アンリはうつむき、弱々しくつぶやいた。

「アルフレッド……お姉さまの、一番のお気に入りで……。寄宿学校にいるあいだ、私に任せるって……預けてくれて」

きゅっと、膝の上でこぶしを握る。

「私の、せいなんです。私がちゃんと、コントロールできていれば……王子さまだって、あんなことには……っ」

雷真はやりきれない様子でため息をついた。

彼も理解したようだ。アンリは犬が嫌いなのではなく、犬という記号によって、思い出してしまうのだ。忌まわしき記憶を。責任を。後悔を。

「……ごめんなさい。ライシンさん」

「何で謝る？」

「その怪我、私のせいなんですよね？ 私を助けようとして……」

「俺は何もできなかった。ロキの野郎がおまえを救い出してくれた。だが、それで終わりじゃない。敵は何度だって襲ってくる。シャルが本当に自由になれるとすりや、それは敵を皆殺しにしたときだ。少なくとも、手を引かせるとこまで行かないとな。おまえを監視役から引き離すだけじゃ、シャルは止まらない」

自分でもわかるくらい、アンリは情けない顔になった。

「……それはもう、いいんです。もうすぐ……夜が明けちゃうから」

「何……どういう意味だ？」

「約束の期限なんです。期限までに達成できなければ、私たちを始末するって……だから、お姉さまは今頃、学院長のところに……」

タイムリミットは夜明け。

それまでに——シャルが動く！

「何でそれを早く言わない！」

雷真は無理やり体を引き起こし、ベッドを下りた。

顔が苦痛にゆがむ。彼のあばらは特別な器具でつなぎ合わせたばかりだ。

「ちよっ……何してるんですか！ 無茶しないでください！」

「夜々、どこだ！」

「待ってー」

アンリは夢中で雷真の腕をつかんだ。

うるさそうに振り向く雷真に、ぶつかるとような勢いで言う。

「私を殺してくださいー」

「……何だって？」

「お姉さまはすごい人形使いだから……お姉さまだけなら、逃げられると思うんです。私さえないければ――」

「ふざけるなー シャルがあんな真似まねをしてるのは誰のためだ。おまえに生きて欲ほしいからだろうが。おまえだって、死ぬのは怖いと――」

「でも今、そうされたいんですー」

雷真が口をつぐむ。彼を黙らせるほどに、アンリの言葉には力があつた。

「私……ずっと……お姉さまに……嫉妬しよとしてた」

アンリは雷真の腕をつかんだまま、切々と、思いの丈さかを告白した。

「お姉さまは、綺麗きれいで、頭もよくて、みんなに好かれて……でも私はいつも、お姉さまの陰で、暗くて、じんめりして……だって私は綺麗じゃないし、頭もよくないし、友達も……少なかつた……からっ」

涙が勝手にあふれ、後から後から、こぼれ落ちる。

「ほ、本当は……お姉さまなんか、嫌いなんです……。プリーエー家がお取り潰しになったのも、アルフレッドの……お姉さまのせいだって、責任転嫁して……。つ。私は、そんな、汚い子なんです……。だから……私なんか、死んじやえばいい！」

「違う！」

腹の底から響くような怒声。一喝され、アンリは立ちすくんだ。

「誰だって嫉妬うらやまくらいするんだよ。だが、それがおまえのすべてなのか？」

「――」

「おまえは本当に、シャルを憎んでるのか？」

「だって……私は、悪い子……。つ」

「悪ぶって逃げるな――自分の気持ちと向き合え！」

自分はどうしようもない悪だと、消えて当然の存在だと、そう思い込んでしまえば楽になれる。だが、雷真かみまことはそれを許さない。

「目をそらすな――ちゃんと見据えろ！ 本当の気持ちを――」

「私は――」

「言ってみろ――シャルをどうして欲しいんだ――」

「お姉さ……お姉ちゃんを……」

アンリは震えた。震えながら、おののきながら、無責任だと知りながら。

とどめておくことができず、本当の気持ちを書いてしまう。

「お姉ちゃんを……助けて……!」

情けなくて、みつともなくて、アンリは泣いた。

何て卑怯者ひきつこくものなんだろう。自分では何もできないのに。

何の代償も支払わず、傷だらけのこの人に、こんなことを望んでしまうなんて。

だが、雷真は優しく目を細め――

うなずいたのだ。任せろと言うように。

医務室を飛び出していく背中を、アンリは泣きながら見送った。

4

廊下。医務室から少し離れた長椅子長い椅子で、夜々ややはしよげていた。

となりではフレイがラビを枕まくらにして、可愛く寝息を立てている。手術が終わるのを待っていたのだが、連日の夜会で疲れが出ているらしい。

そこへ、雷真が医務室から飛び出してきた。アンリと交わされた会話は、夜々にも漏れ聞こえていた。やはり、雷真は行くつもりなのだ。

うつむいたままの夜々を見て、雷真は心配そうに顔を近づけた。

「どうしたんだ。どこか痛めたのか？」

とんちんかんなことを言う。夜々はますますしよげ返り、

「……すみません」

「おまえまで何だよ。理由もなく謝るのが流行ってるのか？」

「理由はあります！ 夜々は、護れなくて……。雷真に、大怪我させて……」

心配で心配で仕方がなかったのに、医務室には入れなかった。雷真の顔にいる権利が、資格が、自分にはないのではと思ったからだ。

涙ぐむ夜々の頭に、ぼん、とてのひらが乗せられた。

「バカだな。それは俺の台詞だろ。この綺麗な顔が傷つけられるのを、俺は見ていることしかできなかった」

「雷真……」

「許してくれ、夜々。おまえにはいつも、痛い想いばかりさせる」

夜々の胸を熱い感情が満たす。

この人のためなら何だってできる。きっと、不可能を可能にすることさえ。

「だが、こんな愚痴の垂れ合いは、あの悪魔娘を連れ戻してからだ」

「でも……アンリさんは？」

ここを離れているあいだに、敵はアンリを奪回しようとするかもしれない。

「う……それは任せて」

横からそう言われ、夜々はどきりとした。

いつの間に目覚めたのか、フレイが身を起こし、ぽよんと胸を叩いた。

「フレイ……いいのか？」

「うん。私たちがアンの側にいる」

「……わかった。あんたたちに任せる」

二人は「たち」を強調した。(ガルム)のことだろうか？ それとも……？

雷真は何やら考え込み、ふと、こんなことを言い出した。

「なあ。あんたの犬つてき、こういうこと、できるか？」

身振りを交えながら、(ガルム)の運用法についてたずねる。

雷真の思いつきを聞いて、フレイはすんなりうなずいた。

「うん……できる」

「俺の言うことでも、聞いてくれるかな？」

「リビエラなら。賢いし、人見知りしない……」

「じゃあ、連れて行っていいか？」

「う……獣姦しない？」

「しねーよー あんたの中の俺はどこまでも変態だなー」

フレイが名を呼ぶと、病室からコリーが現れ、小走りに駆けてきた。

コリーの首を撫でながら、フレイが言い聞かせる。犬なみの知能しか持たないはずの彼らだが、彼女の言うことは理解できると、やがてコリーは雷真を見上げ、軽くしつぽを振った。どうやら、手伝ってくれるようだ。

「よろしく頼むぜ、リビエラ。――よし、行くぞ、夜々」

「はい」

コリーと夜々を連れ、エントランスから外へと飛び出す。

淡い闇。気の早いスズメが鳴いている。もう夜明けが近い。

朝霧の中に、ふと誰かの影が立った。

星のごとくきらめく女。艶やかな着物姿。レンズを仕込んだ眼帯が特徴的だ。

それが雷真の敵であれば、神仏すら怖れない夜々だが、この女だけは別だ。

「硝子さん……」

雷真の声も強張っている。夜々は足を止め、びくびくと下を向いた。

硝子はひとりだった。こんな時間に、こんな場所を、護衛も連れずに歩いてくる。白い手にはとっくりを提げ、顔はほんのり色づいている。

硝子とはとっくりの酒をぐびりとあおり、手首で唇をぬぐった。荒くれ者のような仕草だが、硝子がやると、ぞっとするほど色気がある。

だが、見とれている間もない。硝子はとっくりを石畳に叩きつけ、割った。
がしゃんつ、という鋭い音に、夜々とリビエラはそろって硬直した。

「無学だとは思っていたけれど、愚か者とは思っていなかったわよ、坊や」

ぞつとするほど静かな声音。寒いくらいに空気が冷える。リビエラがしつばを後ろ足に挟み、情けなく「くーん」と鳴いた。

「私の機嫌を直す方法、知りたい？」

「……ああ」

「一度しか言わないわよ。坊やの前にはふたつの道がある。今すぐベッドに戻って、大人しく眠るか。今ここで、私の手で眠るかよ」

「……悪いが、どっちもごめんだ」

「この花柳齋に逆らうの？」

ざらりと、硝子の眼が光る。それだけで、夜々は無条件にひれ伏したくなる。

だが、雷真はいささかも怯まず、まっすぐ硝子をにらみ返した。

「飼主を忘れた犬ほどくだらないものも、この世にないわね」

「……すまない」

「夜々ー」

名を呼ばれ、夜々はすくみ上がった。

硝子は穏やかな、しかし絶対に異論を認めない声で、

「こっちにいらっしやい」

「で……でも……」

「いらっしやい」

心臓が早鐘を打つ。血の気が引き、足が萎える。

倒れ込みそうになりながら、それでも。

「す……みませ……ん……硝子……」

夜々は全身全霊の気力をふりしほり、かたかた震えながら言った。

「夜々は……雷真の……力に……なりたい……です……」

硝子の瞳が怒気をはらみ、からん、と下駄が鳴った。

からん、からん。硝子は二人の方に近付いてきて――

ばあんつ、と雷真の頬を張った。

「……もう、坊やの顔は見たくないわ」

硝子がどんな顔でそれを言ったのか、夜々にはわからなかった。

髪をなびかせ、去っていく硝子。その姿が霧にまぎれて消えるまで、雷真は指一本動か

さず、かかしのように立ち尽くしていた。

「雷真……。硝子は……ちよっと、冷めたところがあつて」

腫れ物に触れるように、夜々は想い人を慰める。

「どうでもいい相手に、今みたいなことはしません……」

「……ああ、わかってる」

雷真は張られた頬をこしこしとこすり、霧を見つめたまま言った。

「俺だって硝子さんに心配かけたくねーさ。だが、あの不器用すぎる姉妹を、どうしても見捨てられない」

「雷真……」

「さて、少しは気が楽になったな」

にっと白い歯を見せ、雷真は笑った。

夜々の緊張をはぐそうとしてくれている。だから、夜々もいつもの調子で応える。

「叱られたのに、どうして気楽になるんですか？」

「後から叱られるより、だいぶん楽だ。さあ、暗れて硝子さんのお叱りも受けたことだし、心置きなく暴れるぞ！」

「——はい！」

夜々は心の底から望み、願う。

この人の力になる。

盾になり、剣になる。

固い決意を胸に刻み、夜々はリビエラとともに、雷真の背中を追った。

5

闇夜にまぎれ、少女が息を殺している。

耳を澄まし、気配を探る。何人もの男たちがあたりの闇にうごめいている。

警戒は厳しい。探知能力に長けた連中が、こちらを探しているのだろう。

少女がいるのは、意外にも屋外灯のすぐ下、舗装された道路のわきだ。

大岩の陰なので、光は届かない。だが、あかりのすぐ近くということで、案外、警備の目が届かない。なかなかの隠れ場所だった。

夜露に濡れた髪をうつつとうしそうに払う。そこへ、ほとんど風切り音も立てず、飛んでくる鳥——否、ドラゴンがいた。

自動人形シグムント。目立たない仔竜の姿で偵察していたのだ。

シャルは声を潜めて、「どう？」と聞いかけた。

「うむ。ここから学院長の公邸まで、警備がびっしりだ」

「……これ以上の接近は無理かしら？」

「無理だな。それに、この先には光もない」

「わざと警備に見えられて、投光器を使わせるって手もあるけど……確実性が低いわね。ここでフォームチェンジして、突入しましょう」

立ち上がり、行動開始。シグムントに右腕を伸ばす。

しかし、シグムントは動かず、地面に座ったままだった。

「ぐずぐずしないで。どうしたの？」

「今からでも遅くはない。考え直せ、シャル」

シャルはぼかんとして、それから、細い眉を吊り上げた。

「ここまできて、今さら何を言い出すのよ」

「君が学院長の暗殺に成功しても、連中が約束を守る保証はない」

「でも！ 逆らえばアンリは確実にやられるわー」

「アンリの身柄は雷真が——学院が押さえた。ひとまずは安心だ」

「いつときの安全が何だっていうのよー 相手は情報部の息がかかった連中……あいつにはどうしようもないわー」

にらみ合う。

増が明かかないと思ったのか、シグムントは声の調子を変え、

「覚えているか。君が私に言ったことだ。君が雷真に恋をしたとすれば——」

「してないわよっ」

「だから、仮定の話だ。フィクションだ。君の言葉を借りるなら、だが」
ばさばさと飛んで、シャルの頭にとまり、耳元で続きを言う。

「君は、自分が『軽い女』ではないかと危惧していた」

「……それが何？」

「確かに、君は雷真と出逢ったばかりだ。ついこのあいだまで、フェリクスに恋心を抱いていた。だが、フェリクスへのそれは幻想——憧れにすぎまい。君はフェリクスの内面を知ろうとしなかったし、事実、何も知らなかった」

シャルは唇を噛み、恥じ入るように顔を背けた。

「一方で、君は雷真の魂に触れ、安らいだ。君の心が折れ、踏みにじられ、孤独の恐怖を知ったとき、君をすくい上げてくれたのは雷真だ。君が雷真に恋をするのは、ごく自然なことではないか？」

「……ごまかしよ、そんなの。私に都合のいい、言い訳だわ」

「君に都合がいい、ということはつまり、己の気持ち（きもち）を認める——」

「言い間違いよ——言葉のあやよ——揚げ足取らないで——」

自然と声が高くなる。シャルはあわてて口をおさえ、顔を赤くして怒った。

「もうっ、こんなときに何よ——それがどうしたって言うの!?」

「彼のところに戻れなくなるぞ」

「――」

シグムントの言葉は、あたかも鉄の杭^{くい}となって、シャルの胸を貫いた。

「君の日常は決して明るいものではなかった。君は学院の鼻つまみ者で、君を理解しようとする者はほとんどいなかった。そんな君に、ようやく理解者ができたのだ。ようやく、君は当たり前の人間になった。彼を捨てるのは人間としての君を――つかみかけた幸福を自ら捨てることと同じだ」

諭^{さと}すような口調。噎^おんで含めるように、シグムントは語る。

「君は恨みもない者を殺そうとしている。通り魔と同じことだ。この殺人が果たされたとき、雷真は君をどう思う？」

雷真はシャルを信じてくれた。シャルが殺しを働くような人間ではないと。だが今、シャルがしようとしていることは……。

「そんなこと……言われたって……もう……手遅れなのよ！」

不意に声が上がったかと思うと、突然、シャルはぼろぼろと泣き出した。

「私は時計塔を破壊したわ！　今の私は学院長の命を狙^{めが}う暗殺者……学院の敵なの。もう、帰る場所なんてないっ！」

うずくまり、声を殺して泣く。殺しきれない嗚咽^{おとげ}が漏れ、涙が草を濡らせた。

「……すまない。許してくれ、シャル」

シグムントはしょんぼりとして、首を下げた。

「君がこんなことをしなければならぬのは、私の無力が原因なのに、君を責めるようなことを言ってしまった。私にもっと強大な——一国の軍隊にも対抗しうる力があれば、君たち姉妹を救えたのだが」

「……違うわ。貴方^{あなた}はいつだって、私の力になってくれた」

シャルはあふれる涙を両手でぬぐいながら、しばらく出すように言った。

「今だって、そう。私が傷ついたときも、落ち込んでいるときも、帰る家を失くしたときも、貴方だけは、ずっと側にいてくれた……護^{まも}って、くれた」

そつとシグムントに手を伸ばし、抱きしめる。

「ずつと、いてくれて、ありがと」

シグムントを抱いたまま、しばし、シャルは泣いていた。

やがて落ち着いたのか、涙をぬぐって、立ち上がる。

「いつまでもぐずぐずしてはいられないわ。夜が明けちゃうもの」

「うむ。学院長に恨みはないが……やむを得まい」

「恨みがないなら殺すなよ」

シグムントがシャルの腕に飛び上がり、臨戦態勢を取る。

いつの間にか、こんな距離まで接近されていた。



少し、声が高かったか。こちらの居場所を察知していた？いや、彼はなかなか知恵が回る。推理したのかもしれない。

目的地が学院長公邸だとわかっていれば、接近のルートはしほり込める。その上、同じように潜伏して行動すれば、同じような地点にたどりつく。

シャルとシグムントが同時に大岩を振り向く。

タイミングをはかったかのように、二つの影が岩の上に着地した。

着物の少女を引き連れた、包帯まみれの重傷者。

「よう、恐竜娘。デートの誘いにきてやったぜ」

もちろん、雷真だった。

6

激痛に苛まれながら、その苦しみはおくびにも出さず、強がつて笑う。

じつとりと粘る脂汗が、全身をぐちょぐちょに湿らせている。

正直、気持ちが悪い。夜風がこたえる。手足の感覚もない。脳天まで抜ける肋骨の痛みが、かろうじて、雷真の意識を現実世界につなぎとめている。

シャルとシグムントが殺気混じりの魔力をぶつけてくる。

それをどうにか受け流しつつ、雷真はシャルに言った。

「バカな真似はやめて、寮に戻れ。ぐっすり眠って、寝坊して、学院理事会に詫び入れて、めちやくちや説教されて、最後は街でバーツとやるぞ」

「いいえ。街ではなく、学院の敷地内でやりましょう」

夜々も口を出す。そうだ。シグムントと夜々も一緒に、みんなで騒ごう。

その幸せな空想は、シャルの心を揺さぶったようだ。

一瞬、美しい顔がくしゃくしゃに歪み、泣き崩れそうになる。

だが、シャルは冷徹な無表情の仮面をかぶりなおし、

「お断りよ。そこをどきなさい。私は学院長を殺すわ」

雷真は盛大なため息をつき、そして怒鳴った。

「おまえは本当にバカだなー 賞金首になりたいのかー」

「なっ——バカですって？ バカですって？ 人の気も知らないでー バカって言う方が

バカなのよっこの変態！」

「うるせえ黙れー おまえには大事な夢があるんだろうー」

シャルは口を「ハ」の形にした。両者の視線がぶつかり、火花が散る。

「ここは魔術の最高学府——学院長を殺したら、おまえは魔術世界の敵になる。プリュー伯爵家の再興なんだ、永遠に不可能だぞー」

「わかつてるわよ！ でも仕方がないじゃない！」

じんわり目尻に涙がにじむ。だが、シャルが感情を爆発させる前に、シグムントが翼を広げ、雷真の前に飛び上がった。

屋外灯の光を浴び、銅色のうろこがキラキラと輝く。

その赤い眼に見つめられた瞬間、雷真の背中に震えがきた。この小さな仔竜が、どんな猛獣よりも恐ろしいと思う。

「退いてくれ、雷真。君たちを死なせたくない」

「言ってくれるね。俺だってそうむざむざと——」

シグムントの体から濃密な闇が噴き出した。それはたちまちあたりを覆う。その闇の中から、たくましい脚が飛び出し、大地をつかんだ。

闇の中から現れたのは、全長八メートルにも及ぶ竜。

間近で見れば、それはもう本当に怪物だ。象やキリンが可愛く見える。

「君は才を秘めている。だが、フェリクスを退けたことで、〈十三人〉と互角だと思ってるのなら、それは自惚れというものだぞ」

短剣のような牙がびっしりと並ぶ、たくましい大あご。雷真をひとのみにできそうな口から、重々しい声が響いてくる。

「（魔術喰い）を倒したのは実力ではない。君は相手の慢心につけ込み、虚を突いただけ



だ。(劍帝) ロキに手ひどくやられたことを忘れたのか？」

巨大な顔を近づけてくる。そのまま噛みつかれたら、雷真の体は簡単に引きちぎられてしまふだろう。

「シャルがなぜ、あんな連中の言いなりにならないかなければならないか、君はわかっていないのだ。いかに優秀な人形使いであれ、ひとりの人間にできることは——」

「わかつてねえのはおまえさ、シグムント」

竜のあざとにその身をさらしながら、雷真は平然と言つてのけた。

「おまえとシャルがどれだけ強かろうが、俺がどれだけ弱かろうが。敵がどれだけ強大だろうが、俺たちが退く理由にはならない」

左手をとなりの夜々に向け、丹田で魔力を練り上げる。

「そして、もうひとつ——俺の相棒は、世界最高の自動人形だ」

魔力の伝導。夜々の五体に力がみなぎり、《金剛力》が起動した。

ぐわっと大あごを開き、シグムントが雷真に噛みついてくる。

夜々は素早くあごに飛び込み、その牙を両手で支えた。夜々の強度は鋼鉄に勝る。鋭利な牙が食い込みもしない。

雷真は岩から飛び降りつつ、

「下がれ、夜々——」

「ラスト・カノン」

シャルの命令を受け、シグムントの喉から光が漏れた。

そして、放出。光の濁流が大気を貫く。それは夜々をかすめ、向かいの梢を消滅させた。あのままじっとしていたら、夜々も消えていただろう。

「光焰三六衝」

「はい」

着地と同時に飛び込む夜々。雷真は魔力の糸に意志を乗せ、夜々の手足を誘導するよう
に、戦術バターンの指示を送る。決して支配するのではない。だが、夜々は雷真の意図を
敏感に悟り、的確に攻撃した。

シグムントの牙をかわして、側面に回り、腹を蹴り上げる。

爪の一撃をくぐり抜け、飛び越えざまに背中を蹴る。

だが、次がかわせない。長大な尾が空中の夜々をとらえ、浮かせた。

「ラスト・フレアー」

シャルはシグムントの背に飛び乗り、容赦なく追撃を命じた。

飛び散る光芒。その一本一本が必殺の針だ。夜々は宙返りしてかわそうとしたが、兩粒
をかわせないのと同じ理屈で、さけられなかった。

夜々が悲鳴をあげる。光の針に貫かれ、体の一部が欠け落ちた。

夜々のボディをも食い破る力。物質を消滅させる究極の魔術回路。これが〈魔剣〉。やはり、シグムントは強敵だ。

遠距離戦は絶対的に不利。何とか接近しなければ……。

「吹鳴すいめい三六——いや、四八しやうはち衝！」

指示を受け、夜々は駆けた。途中からさらに加速し、シグムントに迫る。光線が迎え撃つ。夜々は素早くかわしたが、そこに前足が待っていた。

踏みつぶされる――

「天敵！」

魔力の質を変更。夜々は両足を踏ん張り、シグムントの爪を受け止めた。

「押し上げろ夜々！」

「こらえなさいシグムント！」

シグムントが魔力を帯び、さらに巨大化する。

質量が見る間に増え、夜々の足もとがずぶりと沈んだ。

だが、夜々は耐える。力比べなら負けてはいない――

戦況は膠着した。体勢はシグムントに有利だが、自分の前足が邪魔でラスターカノンが撃てない。うかつに引けば、そのまま押し返され、夜々の攻撃が決まる。〈魔術喰い〉を破壊した技は、シグムントであつても無事では済まない。

そのとき、周囲の茂みをガサガサと揺らし、何かが飛び出してきた。

甲冑をまとった狼のような姿。警備のヘイムガーダーだ――

見えただけでも三体。これだけ派手にやり合っていれば、当然、気付かれる。

「援護するー」「我らに任せよー」「賊め、投降しろー」

「邪魔よー」

シャルが叫び、ラスターカノンを放つ。

それは大木を、草むらを、そしてヘイムガーダーをのみ込んだ。

怯えた警備がシャルを狙って発砲する。雷真の肝が冷える――が、それはシグムントの翼に阻まれ、跳弾の火花を散らしただけだった。

シグムントの首が警備の方を向き、喉の奥に光がのぞく。

「やめろシャルー」

雷真はあわてて体を入れ、警備をかばった。

「あんたたちも下がってくれー 俺が何とかするー」

既に人形を破壊されている。警備は素直に従い、後退した。

雷真はほっとしつつ、シグムントの背中、シャルに向かって怒鳴った。

「おい恐竜娘ー もういい加減にしろー 相手を間違えるなー それだけの力があって、なぜ本当の敵と戦わないー」

「ばかなの？ 相手がもつと強いからよ！」

「だったら、頼れよ！ 俺を！」

「——」

「俺を頼れ！ 学院を！ 協会を！ ほかの誰かを！」

「か——勝手なことを言わないで！」

敵はあまりにも強大だ。キングスフォートに味方する者、それは一国の戦力に匹敵するかもしれない。おまけに学院の内部にまで食い込んでいる。

雷真ライマひとりの力で対抗できるわけがない。学院が力を貸してくれるわけがない。協会が、シャルの言うことを信じてくれるわけがない。

世界を、相手にできるわけがない。

しかし——ぐらりとシグムントの体が浮き上がる。

夜々ヨヨが雷真の意志にこたえ、力を増しているのだ！

「もう私にかまわないで！」

シャルは動揺し、悲痛な叫びをあげた。

「それが私の望みよ——もう後戻りできないの——私は時計塔を壊したし、学院長を攻撃したわ——私は学院の敵なの——誰も私たちを護まもることなんて——」

「戻ってこい、シャル——」

雷真の視線がシャルを射抜く。

その強さを受け止めきれず、シャルは怯んだ。

「でも……っ！ 私は……足を引く張る……っ」

「俺の足なんざ——」

雷真の体の奥の奥、魂の根源から、途方もない魔力があふれ出す。

「好きなだけ引く張れ！」

ごっ、と夜々の力が膨れ上がった。

戦艦のようなシグムントの胴体が浮き上がり、そのまま放り投げられる。

シグムントは宙を飛び、数十メートルも後ろに落下した。

凄まじい地響きを立てつつ、どうにか脚から着地する。

幸い、シャルは無事のようにだ。シグムントの翼にしがみついている。

首をもたげるシグムント。だが、既に雷真は動いていた。

「吹鳴四八結——」

夜々の背に飛び乗り、シグムントに突っ込む。

シャルは泣き叫びながら、ラスターカノンを乱射した。

魔力を溜めない、不十分な状態での連射。それはシグムントに負担を強いる行為のよう

だ。明らかに威力が落ち、光は細く、弱くなっていく。

その間隙を縫って、夜々は突き進む。あと五メートル。もう目の前だ！

シグムントの爪が横から迫る。夜々は受け止め、耐える。両者が止まった一瞬に、雷真は夜々の肩を蹴り、シャルに向かつて跳躍した。

シグムントの大あごに、真正面から己をさらす。

シャルは魔力を練り――躊躇した。

その躊躇が消える前に、雷真の手が届いた。

シャルもろともシグムントの背中から転がり落ち、真下の草むらに落下する。

「ぐうっ！」

うめく雷真。シャルと地面に挟まれ、肋骨が悲鳴をあげる。

「え、ちよつと……大丈夫っ？」

シャルがあわてて雷真の上から下り、そつと雷真の腹に触れた。

「何これ、すごい熱……腫れてる……！」

腹はぶよぶよとして、皮下に水のようなものが溜まっていた。

内出血か。炎症か。いずれにせよ、普通の状態ではない。

先ほどまでの勇ましさはどこへやら、シャルは大いにうろたえた。

「とととにかく手当てをっ。手当てをしなきゃ……！」

「いえ、その必要はありませんよ」

不意に影がかかり、同時に敵意が向けられる。

シグムントと夜々が飛んできて、それぞれの主を護ろうとする。

少し離れた樹上、柵の上に誰かがいる。

今になって異変に気付く。いつの間にか、あたりに警備の気配がない。

誰かが沈黙させた？

目の前の——こいつが？

樹上にいたのは、グランビル家の執事を名乗る男、シンだった。

「手当てというのはおかしい話ですね。そんな男は放っておいて、貴女は今すぐ、学院長のもとへ向かうべきではありませんか？」

「……悪いけど、そんな気は失せましたわ」

「それは残念。まだ意識がありますが、ミスター・アカバネ？」

返事の代わりに、重真は立ち上がった。

「グランビル家の執事は争いごとを好みません。殴り合いで解決しようというのは原始時代の発想です。そこで、ものは相談なのですが」

シンは極めて事務的な口調で提案した。

「ひとつ、無抵抗で殺されてくれませんか？」



Chapter 7 踊り、微笑み、欺く妖精



1

「坊やの前にはふたつの道がある。今ここで凍え死ぬか、それとも——」

二年前のあの日、血まみれの雷真（らいまこと）に硝子（しょう子）はそう問いかけた。

「赤羽天全（あかばねてんけん）と戦い、敗れて死ぬかよ」

雷真は仰向けに倒れたまま、しばし、硝子を見つめていた。

口の周りを血で汚し、やつれ果てていながら、眼だけが輝きを失わない。

「……あいつと、やらせてくれるのか？」

「坊やが望むならね」

雷真は硝子のとなりにたたずむ少女——夜々（やや）を見上げた。

「……なる」

最初はかすかに、次にははっきりと口にする。

「あんたのものに、なる」

「お利口ね。それじゃあ、賭けをしましょう」

「賭け……？」

「私は天下の花柳斎——神も仏も敬わない。けれど、悪魔ではないのよ。坊やに可能性をあげるわ。天寿をまっとうするもしないも、坊やしだい……」

「どういう……ことだ？」

「赤羽天全を倒せればよし。倒せなければ、坊やの体をもらうわ」

雷真の顔色が変わる。

彼の脳裏をよぎったのは、おそらく、中身を抜き取られたという妹の骸。あれと同じことを、硝子は雷真にしようというのだ。

「なぜ、俺たちなんだ……！」

「生きた《紅翼の血》が欲しい。私の望みを叶えるためにね」

憤りが瞳にたぎる。雷真は硝子をにらみ、吐き捨てるように言った。

「ああ、わかった……。こんな体でよければ、くれてやる！」

そうして、雪が舞い散る中、二人は契約を結んだのだ。

「主……」

硝子はぼんやりと顔を上げた。喘息にのせた財がしびれている。

酔いが回ったか。いつの間にか、心を遠くにやっていた。

軍が押さえた邸宅の庭。日本から持ち込んだ桜は、見頃を過ぎて散り際で、花もまばらだ。そのわびしい枝の下、硝子は庭に布を敷き、夜桜見物としやれ込んでいた。かたわらにはいろり、そして小紫の姿もある。

硝子の手にある杯はカラだ。硝子はいろりに杯を差し出した。

「少し、過ぎます。控えてください」

いろりが反抗するとは珍しい。見れば、小紫も心配そうに硝子を見ている。

硝子は自嘲した。らしくない。この子たちに心配をかけてしまうなんて。

「主。何をお考えだったのですか？」

「……坊やのことを考えていたわ。あのきかん坊。私のものになると言ったくせに、好き放題ばかりする」

いろりと小紫が顔を見合わせ、二人そろって、くすりと笑った。

「何がおかしいの」

「すみません……。主でも、そのような愚痴を言われるのですね。雷真殿の心腹は、主が一番ご存知でしょうに」

「ふん……おまえは平然としているわね。いつも、夜々、夜々とうるさいくせに」

「そ、そのようなことはありません」

白い肌が朱色に染まる。いろりは咳払いをして、それから小紫を見やり、
 「雷真殿とともにあれば、夜々はきつと大丈夫だと。小紫がそのように言い——私もそう
 思いました」

学院の方を見る。舞の向こうに広がる空は、いつしか青みを増している。

「……そうね。夜々は大丈夫。坊やを食べて、ますます近付いていくでしょう」

小紫が小首を傾げ、疑問符を浮かべる。その横で、いろりは肩を強張らせた。

「あの人の夢も、きつと叶うわ」

硝子は天を見上げ、はるか彼方に視線を投げた。

間もなく、夜が明ける。

2

「断る」

と雷真が言った瞬間、シンの姿が樹上から消えた。

シャルにはとらえきれない。まごつくシャルを雷真が突き飛ばし、自らも真横に跳んで、
 蹴りをかわした。

シグムントが爪で切り裂こうとするが、シンはするりとくぐり抜け、シグムントを無視

して、再び雷真に迫った。

真上に浮き上がり、そこから急降下しつつの蹴り。それはあまりに理不尽な軌跡を描く。雷真の動きが鈍る。反応できていない！

「雷真―」

しかし、夜々が間に合う。夜々がすべり込み、かかとを受け止めた。

シンは飛び退くように後ろへ下がり――直後、慣性もへったくれもなく、すぐさまバクトルを反転した。フエイントだ！

「森閑 四八衝―」

夜々がやわらかく構え、相手の攻撃を待ち受ける。

受け止める体勢。しかし、シンの蹴りは途中で止まった。

タイミングを外され、夜々の体が泳ぐ。そこに、再び最高速に達した蹴りが炸裂。夜々は跳ね飛ばされ、雷真がガラあきになる。

シャルが割つて入る暇もない。シグムントは巨体が災いし、速度についていけない。戸惑う二人の目の前で、今度こそ、シンの蹴りが雷真の頭に決まった。

吹っ飛ぶ雷真。ひたいが切れ、血が飛ぶ。あるいは、頭蓋を砕かれたか。

雷真は石畳の上を転がり、動かなくなった。

ゆらりと、シンがシャルの方に向き直る。

「さて、今度はそちらを――」

ずどむっ、と夜々のブーツがシンの後頭部に激突した。

（――嘘――）

シャルは目を見張る。今の不意打ちにも、シンは微動だにしない。

むしろ、夜々の方がダメージを受けたようだ。着地した夜々は軽く（けんけん）して、足を気にする素振りを見せた。

夜々の背後に立つのは、ひゅー、ひゅー、と肩で息をする雷真。

頭を蹴られたせいとか、ふらついている。だが、その眼光はいまだ鋭い。

「シャルよ……」

シグムントが低い声でささやく。シャルははっとして、

「ラスターカノン――」

一瞬のタメの後、ごうっ、と光が放たれた。

シンの隙を狙ったものだが、シンは空中へと逃れ、射線を避けた。

逃がさない。シャルはもう一発、狙い済まして発射する。

ラスターカノンは飛ぶ鳥さえ落とす。これは当たる――

光線は確かにシンをとらえた。しかし、ばしんっ、と派手な音がして、ラスターカノンは向きを変え、あらぬ方向へ飛んで行った。

（弾いた!?）

魔術回路（魔剣）は宇宙の真理に関わる秘法。対象がどれほど硬かろうと、形あるものはすべて消滅させられる。それなのに……？

暗闇に目を凝らすと、シンの手はただれ、皮膚が焼け落ちていた。無傷ではないが、致命傷にはほど遠い。

おそらく、彼が操る魔術もまた、宇宙の真理に関わっているのだ。

驚いている暇もない。シンは燕のように下りてきて、シグムントの横つ面を蹴り飛ばした。シグムントの巨体が大きくよろめき、再び転倒する。

夜々がフォローに入ったが、こちらにもあっけなく蹴り飛ばされてしまう。強い。冗談じゃない。

動揺で真っ白になる頭を振り、シャルは何とか冷静になろうとした。

そして、あることに気付き、あたりに視線を走らせた。

「無駄ですよ、ミス・プリュー。探しものは見つかりません」

「……そんなはずないわー」

シンがやれやれというふうのため息をつく。ムカつく態度だ。

「どんなに精巧な自動人形も、ある一点において、人間とは違います」

そんなことは言われるまでもない。人形と人間は違う。人形は――

「左様、自動人形は魔力を生み出しません」

たとえ禁忌人形であつても、魔力を生み出すのは（人形）ではなく、内部に格納された（人間）の部分だ。

「ではなぜ、私は『ひとりで』戦っているのか」

「……笑わせるわね。本当に、ひとりだって言うの？」

「グランビル家の執事は優秀ですが、ただひとつ難をあげるとすれば、いささか口が軽いのです。教えて差し上げましょう。貴女の目の前にいる者こそ」

胸に手を当て、うやうやしく礼をする。

「神性機巧——（マシンドール）です」

3

医学部の廊下。長椅子に腰かけて、フレイはうとうとしていた。

医務室のアナリは十二頭の（ガルム）たちが見張っている。

苦手な犬たちに囲まれて、アナリは小動物のように震えていた。簡易ベッドの上に迫り詰められ、逃げ出す気配もない。（ガルム）は五感が鋭く、警戒心も強いので、敵の襲撃はすぐ察知できる。その安心感で、フレイも気がゆるんでいた。

ふと、枕まくらにしていたラビが、びっくりと耳をそば立てた。

フレイも目をこすりながら、ひょいと医務室をのぞき——飛び上がった。

アンリがメスを手首に当て、自ら血管を切ろうとしている——

「ロビン——」

ドア越しに命令。ダックスフンドが跳躍し、アンリの右手に噛みついた。

たまらずメスを落とすアンリ。同一髪、左手首は無事だった。

フレイはとこととアンリに近付き、メスを拾い上げた。

叱しとられると思ったのか、アンリは帽子ぼうしを目深めふかにして顔を隠した。

「ほ……放はなつておいてください——私なんて、生きてる価値がないんです——」

「貴女あなたが死んでも、私はかまわない」

「——だったら——止めないでください——」

「でも、ライシンは、哀かなしむ」

アンリはうつむき、唇を噛んだ。フレイは続けて、

「（暴竜）……悪いことしてる。それは、貴女に……生きていて欲しいから」

ぐさりと刺さる言葉。アンリは目を伏ふせ、肩を落とした。

「それ……ライシンさんにも、言われました……」

「じゃあ、わかって、くれる？」

「でも……私が悪いことに変わりはないです。私なんかが生きてるから、お姉さまは……それに、ライシンさんまで、あんな大怪我を……」

「（暴竜）——シャルロットは、私に言ったの。話してくれた。全部」

「——」

「だから、私は知ってた。貴女たちが脅されていること……」

昨日の夕方。フレイの前に現れたあのとき、シャルは秘密をうち明けたのだ。

「どうして……私に、言うの？」

そうたずねると、シャルは心持ち照れくさそうに、ふんとそっぽを向いた。

「あのバカひとりなら何とかなるけど、貴女にまでしやしやり出てこられたら、骨が折れそうだからよ」

それから、するような目でフレイを見つめた。

「でも、あのバカには言わないで。絶対に。自惚れかもしれないけど——ううん、自惚れじゃない。これが私じゃなくなつて、あいつは絶対、助けてくれる」

「だったら……」

「だからよ。私はいつには言わないし、貴女にも言つて欲しくないの」

約束よ、と念押しされて、フレイは思わずうなずいた。

本当は、シャルの言うことは、よくわかっていなかったけれど。

「でも、今、わかった……。ライシンは、血まみれになって、戦ってくれる。絶対に、私たちを見捨てない」

見上げてくるアンリに、フレイは言い聞かせるように言う。

「助けてくれるから、頼っちゃ……。いけない」

雷真は命を賭けてくれる。

世界を敵に回してくれる。

己の身をかえりみず、傷だらけになって。

だからこそ、巻き込んではいけないのだ。彼の無事を願うなら――

「だから、貴女も……。甘えてちゃ、だめ」

にこ、と微笑みかける。

その言葉を、果たしてアンリはどう受け止めたのだろうか？

アンリはうつむき、貝のようにおし黙った。

ふと、犬たちが一斉に窓の方を向く。

少し遅れて、フレイの聴覚も異常をとらえた。

窓の外に閃光が走る。とっさにラビの魔術回路（音圧操作）を起動、屋外の音を集めて

みると、激しい戦闘音が聞き取れた。

直感的に雷真の苦戦を悟る。フレイはうずうず、そわそわして、

「この子たち、置いていくから。あと、ロキもいるから、貴女は大丈夫」

ラビだけを連れて、医務室を出て行こうとした。

「え……どこに行くんですかっ？」

「ライシンのところ。いざとなったら、私がライシンを助ける」

フレイは上を向き、少し考え込んでから、こてんと首を傾けた。

「……一緒に、くる？」

4

そんなわけで、アンリは木陰に縮こまって、戦いの行方を見守っていた。

となりにはフレイもいる。二人とも、ラビの（音圧操作）のおかげで物音を立てない。そのため、敵はこちらに気付いていないようだ。

敵はシンひとり。見えない足場でもあるかのように、空中に留まり、ずたぼろの雷真、あせり顔のシャルを見下ろしている。

「……マシンドール？」

シンに言われた言葉を、雷真はそのまま繰り返した。

彼は聞いたことがないようだ。アンリもまた、聞いたことがない。

だが、フレイは理解したようだ。アンリのとまりで息をのむ。

「……何だ、そりゃ。自動人形じゃねーのか？」

「無知ですね、ミスター・アカバネ。学院の学生がそれではいけません。そうでしょう、ブリュー伯爵家のお嬢さま？」

「……完全なる、人形。つまり、あいつは完全に自律してゐることよ」

意味はよくわからない。だが、アンリもひとつ、得心した。

なぜ、人形使いの存在なしに、シンは魔術を行使できるのか。

禁忌人形というだけでは説明できない、無制限の魔術の行使。そのカラクリに、マシンドールという概念が関係している。

シンは芝居がかった仕草でうなずき、シャルの言葉を肯定した。

「機械であり、人形である存在。この場合のドールとは、神が創り給う〈己の似姿〉——すなわち人間のことですが」

機巧の人間——それがマシンドール！

雷真は不愉快そうに眉をひそめた。

「わからねーな。だから何だってんだ」

「失礼。グランビル家の執事は優秀ですが、ただひとつ難をあげるとすれば」

「説明が回りくどいってんだろ」

「左様で。つまり、私こそが（完全なる個）——不完全な存在たる貴方たちには、到底、勝ち目がないと申しました」

シンは再び攻撃を開始した。

残像を尾のように曳き、宙を駆ける。まるで稲妻。それは本物の稲妻よろしく、直角に向きを変え、雷真と夜々をジグザグにかわし、シャルに向かった。

シグムントが危険を察知し、シンに尾を叩きつける。

だが、シンはありえない角度に軌道を変え、するりとかわした。いささかも速度を緩めず、シグムントの腹へと突き進み、蹴り上げる。

爆発的な威力。脚がめり込み、シグムントの巨体が浮く。

「野郎！」

雷真が叫び、シンに夜々を差し向ける。夜々は山猫のように敏捷だったが、シンは木の葉のようにひらひらとかわし、またも上空へと逃げた。

淡い光がにじみ、少しずつ、シグムントの体が小さくなっていく。

「シグムントー 大丈夫？」

「うむ……問題はない」

嘘だ。シグムントはもう馬ほどの大きさになっている。これでは、シャルを乗せることも難しい。シャルは潰面になった。

「……無様ね、私たち」

悔しいのを通り越し、むしろさばさばした調子で、シャルは言った。

「屈辱だわ。ええ、ひどい屈辱よ。こっちは二人がかり——四人もいるつてのに、あんな男ひとりに手も足も出ないなんて」

「……まだ、やれそうか？」

「どこかの変態が無茶させてくれたおかげで、魔力が限界だわ」

「そいつは悪かったな。奥の手とかねーのか」

「バカなの？ 死ぬの？ 魔力がなければ、奥の手もくそもないじゃない」

「元貴族のご令嬢がくそなんて言うな」

「そっちこそ、前みたいな悪知恵はないわけ？」

「ない」

かくんつとシャルのあごが外れた。アテが外れたらしい。

「あいつの魔術が読めない。おまけにマシンドールとかいう、聞いたこともねえ存在だ。

やれるとすりゃ、小細工なしの力押しだが……大技はかわされちまうし、手数で攻めてもダメージが通らな——」

そこで、雷真の目が光った。何か思いついたようだ。

「じゃあ、よ。あと一発でいいと言ったら、どうだ？」

シャルは雷真の言葉を咀嚼し、ふっと笑った。

「一発でいいなら、時計塔だって蒸発させてやるわよ」

「上等。しくじるなよー」

「そっちがねー」

二人が左右に散る。アンリにはさっぱりわからないが、それだけで、二人は通じ合ったようだ。お互いに理解した。何か作戦のようなものを。

雷真は夜々を先行させ、シンの前に進み出た。

夜々の背中にてのひらを向け、巨大な魔力を送り込む。

夜々の全身に凄まじい魔力がみなぎる。何かするつもりだ。シンはベクトルを急転させ、何もさせまいと突っ込んできた。

認識が追いつかない、不自然な軌道を描き、ふっと消える。

一瞬後、雷真の背後に出現し――

そして、びたりと動きが止まった。

誰かがシンの体をつかみ、拘束している――

夜々が雷真とシンのあいだに割り込み、シンの動きを封じていた。

アンリは雷真が死ななかつたことに安堵し、同時に、疑問に思った。

先ほどのシンの速度と軌道は、雷真の認識を超越していたはず。

では、夜々をそこに動かしたのは……読み？

夜々を前に出し、わざわざ背中を開けたのも……わざと？

もし、シンが真正面から攻撃していれば、雷真は間違いなく死んでいた。

あまりに危険な二者択一。何という度胸！

「ロキの真似つてのが気に食わねーが、上手くいつて何よりだ」

「……上手くなどいつてませんよ、ミスター・アカバネ」

シンが冷ややかに言う。彼は夜々と力比べを続けながら、

「私の体は（魔舞）にも耐えるのです。貴方の人形がどれほどの魔力を持っていようと、私を傷つけることはできません。こんな戒めなど、すぐに――」

「あんたが自分で言ってたことだぜ」

「何……？」

「マシンドールだか何だか知らねーが、完全無欠つてわけじゃない」

すう、と息を吸い――一瞬後、雷真は莫大な魔力を練り上げた。

「光焔絶衝――」

それは夜々の全身に行き渡り、青白い燐光を放つ。

「（乱れ夜核）」

次の瞬間、夜々が弾けた。

そう見えるほどの動き。夜々のこぶしが、蹴りが、高速で繰り出される。それは嵐。あるいは機銃掃射。

シンはまったく動けない。多少動いたところで、夜々はそれに追隨する。シンの体には銃弾のごとき打撃が次から次へと叩き込まれていく。

ただし、攻撃はシンの肌に限られ、めり込みもしない。一撃が軽すぎるのだ。

それでも、雷真は攻撃をやめない。全身の魔力を絞り込み、花火のように激しく、ひたすら夜々を動かし続ける。

そして、ある一瞬に。

ガードを固めたシンの腕から、赤いしずくがひとつ、飛んだ。

それは見る間に数を増し、ひらり、ひらりと宙を舞う。

シンの皮膚が破れ、肉が裂け、傷がどんどん増えていく。

血しぶきが舞い散る。あたかも桜吹雪のように。

しかし、夜々の猛攻はそこまで。

水が濡れるように、雷真の体から力が抜け、魔力の放出が止まった。

よるめき、突っ伏す雷真。同時に夜々の動きも鈍り、しりもちをつく。

魔力切れだ！二人にはもう、戦う力が残っていない！

形勢逆転。シンになぶり殺しにされる——かと思ったが。

シンもまた、がつくりと膝を突き、その場に崩れ落ちた。

荒い息を吐く。全身、血だるま。だらりと垂れ下がったものは、破れた服か、それとも肌か。いずれにせよ、シンは立ち上がる素振りを見せない。

「……考えてみりや、理屈だぜ。殴られても平気な奴が、どうして夜々の攻撃をかわすのか。当然、損があるからだ」

雷真がうめき混じりにつぶやく。

「夜々がへばるのと同じことさ……。マシンドールだか何だかしらねーが、（生き物）である以上——魔力を使えば、当然バテる」

そうか、とアンリは思った。

シンの防御能力、移動能力、そして攻撃能力。それはいずれも同じ魔術によるものだ。肉体の運動方向を、分子レベルで、自在に操る魔術。

ダメージを受けないのも、空を飛べるのも、すべてそのおかげだ。

雷真はその特性を理解していながら、対策が見つけられなかった。

対策がないからこそ、もっとも非効率的な、しかし確実な戦法に訴えた。

つまり、相手の魔力を浪費させたのだ。相手が嫌う打撃を徹底的に叩き込んだ。つまりは根競べ。一対一では決して成立しない戦法だ。しかし、今なら……。

「今だシャルー」

動けないシンになら、ラストーカノンが当たる――

既にシャルは魔力の充填を終えている。シグムントの背中に手を添え、いつでも撃てる態勢だ。シグムントの口から火の粉のような光が漏れ――

しかし、撃たない。

シャルは表情を強張らせ、ためらっている。

相手の姿が人間だからか。姉妹にとっては憎むべき敵だというのに。

「撃て、シャルー」

シャルが目を開じ、魔力の引き金を引く。ようやく、光の大砲が撃ち出された。

シンは突然立ち上がり、すべるような動きで砲撃をかわした。

一瞬、余力が残っていたのかと思う。だが、違う。魔術師としては姉の足もとにも及ばないアンリだが、空中を漂うかすかな（糸）を知覚できた。

誰かがシンに魔力の糸を伸ばしている。

人形使い――どこに？

思わず立ち上がり、目をこらす。フレイもきよろきよろとあたりを探る。最初に動いたのは雷真だ。雷真は苦しげに息を吸い、ありったけの力で、

「リビエラー」

と叫んだ。

誰のことだろう、と思う間もなく、「がおんー」という声が響いた。

犬の吠え声だ。声は魔力を帯び、砲弾となって茂みから飛び出す。大気を引き裂く不可視の塊。それは柵を切り裂いて飛んだ。

その道路上、屋外灯の真上の枝に、少年が座っていた。

音の砲弾が届く前に、少年は軽やかに枝を蹴り、飛び降りてかわす。

しかし——着地したその場所に、雷真が待ち受けている。

少年に組みつき、屋外灯に押しつけると同時に、雷真はナイフを抜いた。

刃を少年の首に突きつける。少年が何か動きを見せれば、即座に切り裂く構え。これでは抵抗することも、シンを動かすこともできない。

そして、そのシンはと言えば。

いつの間にか、夜々に羽交い絞めにされていた。

シャルが呆然と立ち尽くす。アンリも、おそらくほとんどのフレイも、今のシャルと同じ気持ちだ。雷真が何をしたのか、まだ理解できない。

はつきりしているのは、雷真が敵を出し抜いたという、それだけ。

だが、出し抜かれたはずの少年は、むしろ嬉しそうに、

「これは驚いたねー。どうして僕の居場所が——存在が手見できたんだい？」

アンリもそれがわからない。居場所はあの犬が見つけたのだとして、どうして雷真は、

この少年がいることを予測できたのだろうか？

「……俺は学がない。そこの執事さんが何者なのか……正直、理解の外だ」
「それで？」

「だから、俺の知ってるものだ……自動人形だと、考えた」

「上手い考え方じゃないか。半分は当たりだよ」

少年が笑う。絶体絶命のはずなのに、まるで臆したところがない。

「続きを聞かせてよ。シンが自動人形なら、どうなんだい？」

「あいつには、人形使いがいらない。だったら、いるようにしてやればいい」
そうすれば、人形使いが現れる。

では、魔力が尽きたように見せかけたのも。

策が尽きたように思わせたのも。

すべては雷真の仕込み——

黒幕を引きずり出すための、命を賭けた、トラップか——

雷真は凄絶な笑みを頬に刻み、刃を少年の首に押しつけた。

「俺につき合ってもらうぜ、夜会執行部議長セドリック・グランビル。洗いざらい吐いてもらって、そのあとは血を吐いてもらう」

少年はばちばちとまばたきして、嘔き出した。

ふふつと楽しげに、場違いなほど明るく笑う。

「君は確かに無学かもしれない。でも、僕が保証する。君は利口だよ。僕の予想を二手も三手も上回ってくれた。けど、これでチェックメイトのつもりなら」

利那、少年の姿が消えた。

シンのそれとは違う。溶けるように、かき消されるように、見えなくなる。

「雷真！ 後ろですー」

夜々の叫び声。遅れてアンリも認識する。

雷真の前に少年の姿はなく――背後にあった。

「一手、足りないよ」

あわてて肘を振り回す雷真。だが、それはむなしく空を切る。少年は再び消え、一瞬後、シンに変わった。

いや、代わったのか。それとも、換わった？

いずれにせよ、いつの間にか少年は消え、シンは夜々の拘束を抜け出していた。

何が起こったのか理解できないまま、シンの蹴りが雷真のわき腹にめり込む。

ほきんつ、と嫌な音がして、雷真は草むらに転がった。

夜々とシャル、そしてアンリの悲鳴が重なる。そんな中、ただひとりまともに対応できたのは、意外にもフレイだった。

ラビが飛び出し、シンにのしかかる。鋭い犬歯がシンの喉笛に迫り、食いちぎる寸前、シンはするりと真後ろに下がり、かわした。

先ほどと同様、あまりにも唐突に、シンの肩に少年が出現する。

夢を見ているようだ。あるいはイリユージョンか。

少年は倒れた雷真を見下ろし、にっこりと優しく微笑んだ。

シンが空中に浮き上がり、そのままいずこかへと飛び去る。

そうして、あまりにもあっけなく、夜の静寂が戻ってきた。

5

「ちょっとやりすぎたかな？ 死んでなければいいんだけど」

シンの肩で、彼の主は心配そうにつぶやいた。

と言っても、主の顔は笑っている。声とは裏腹に、憂いも何もない。

木立ちの中を音もなく飛びながら、シンはこうべを垂れた。

「申し訳ありません。私は……とんだ失態を」

「おや、今度は何を謝るんだい？」

「あのような敗北、デモンストレーションとしては最悪です」

「とんでもない。君は人形使いの手助けもなしに、（十三人）級の魔術師二人を圧倒したんだよ。（マシンドール）の存在感は十分に示せたさ」

ふふつと声に出して笑う。主は上機嫌だ。

「今、とてもいい気分なんだ。僕ははしゃいでる。新しいおもちゃを手に入れたみたいだね。彼は素敵だ。僕のてのひらで、きつと楽しく踊ってくれるよ」

「バーンスタインの執事は優秀ですが……ただひとつ難をあげるとすれば、いささか魔病者のようです」

「何が怖いんだい、シン」

「あの男はいずれ、お嬢さまのてのひらを飛び出しかねない……そんな気がします」

「わかってないね。だから魅力的なんだろう？」

主はどこまでも屈託がない。そのくせ瞳は破滅に飢えている。

「これでますます、夜会が楽しみになってきたよ」

「夜会……また何か、底意地の悪いことをお考えで？」

「僕が何のために、八七位なんてしょっぱい順位につけたと思うんだい？ この（加速の妖精）——アリス・バーンスタインがさ」

花びらが散るように、主の髪が、肌が、服がはがれ落ちていく。

「次は夜会の舞台で遊んであげるよ。極東のマシンドールと、その使い手さん」

そう言った主は、銀色の髪を持つ、麗しい乙女の姿をしていた。

まとめていた髪がほどけ、流星のようにたなびく。

二人の影は木々を跳び越え、朝焼けの森へと消えて行った。

6

戦いの終結を悟った瞬間、アンリはべたん、と座り込んでしまった。

どっと力が抜ける。安堵するのはまだ早いとわかっているのに、すさまじい疲労感が肩

にのしかかっていた。夜の静寂が耳に痛い——と思う間もなく。

「雷真——大丈夫ですか雷真——」

訪れた静寂は、すぐに夜々の悲鳴で破られた。

見ると、雷真は横向きに倒れたまま、びくりともしない。

危険な状態だ。アンリが立ち上がるより早く、シャルがそちらに駆け寄り、泣き出した夜々の後ろから、おっかなびつくり問いかけた。

「その……生きてる？」

耳を澄ますと、蚊の鳴くような声で、返答があった。

「……どうにか、な」

「ふ、ふん。別に心配してなかったわ。貴方は頑丈なだけ^{かた}が取り得^との変態^{へんた}なもの」
アンリは少しほっとして、緊張をゆるめた。

フレイがアンリを突つき、シャルを示す。「行きなさい」と言っている。気まずいことこの上ないが、何となく逆らえなくて、アンリはおずおずと歩き出した。

「お姉さま……」

遠慮がちに声をかける。シャルは既に、こちらには気付いていたらしい。振り向かず、背中を向けたまま、ほつりと言った。

「ごめんね、アンリ」

「え……」

「確かに私……貴女と一緒にいるとき、いい気になっていたのかもしれない。一緒にいて安心できるのって、そういうことかもしれない」

何のことだろう？ 誰かに、何か言われたのだろうか？

「でも、私だって、貴女に劣等感を覚えることは、あったのよ」

「え……私に？」

アンリはぼかんとした。あまりにも意外だった。

容姿も、知性も、魔力も、何もかも、シャルはアンリを上回っている。

シャルはちらりとアンリを見て、もじもじと、言いにくそうに言った。

「貴女の方が……一インチ、大きいじゃない」

「身長……？ 同じくらいだよ」

「……ね、よ」

「え？」

「胸よー」

かああああつと耳まで赤くなる。

「もうやだー！ 一生言わないつもりだったのに！」

シャルは真つ赤になった顔を背け、そして雷真に気付き、激怒した。

「何見てるのよー 何でここにいるのよっ変態！」

「うっわ蹴るなバカ！ 折れてんだぞー」

「まさか、今の聞いて……シグムントー！ こいつを宇宙の座にするわよ！」

「落ち着け、シャル。言いにくいことだが、君の秘密——つまり上げ底のことだが——は、とっくにバレている」

そのやりとりを見ているうちに、くすつと、アンリの口から笑いが漏れた。

くすくす、くすくす。

「なあんだ。そっか。そうだったんだ……」

「何笑つてるのよ！ もう！」

湯気を出して怒りながら、しかしシャルも釣られて、くすりと笑った。完璧だと思つていた姉にも、大きな欠落意識があり。

妬んだり、うらやんだりする、当たり前の人間。

私と同じ、人間なんだ。

心のしこりがほぐれていく。春のうらかな目に、日陰の残雪が消えるように。

こんな私でも、お姉さまより素敵な部分が、きつとある。

もちろん、この平らかな胸だけじゃなくて。

そのことを教えてくれたのは雷真だ。

雷真は夜々に支えられながら、血だらけの顔で、まぶしそうにアンリを見ていた。

男の人は怖いけど、彼はそうでもない、かもしれない。

（ありがとう、ライシンさん。私も、いつか……）

ほんの少しなら、自分が好きになれそうです。

木々の合間からオレンジの光が差し込む。小鳥たちが騒がしくコーラスを奏で、新しい

朝の訪れを告げていた。



その戦いの一部始終を、高いところから見下ろす者がいた。

学院長公邸の屋上。銀の仮面をつけた若者が、二人の乙女を従えて、木立ちの向こうを眺めている。

その背後に、すどん、と誰かが着地した。

二人の乙女が身構える。だが、相手は怖じもせず、気さくに声をかけてきた。

「夜更かしがすぎるようだな、マグナス。徹夜かね？」

「……貴女こそ。せつかくの美貌が泣いていますよ、キンバリー先生」

「屋外で夜明かしするのは慣れているのさ。少女の頃からね」

背後を取られているのに、マグナスは振り向きもしない。たった今まで戦いが繰り広げられていた方を、見定めるように眺めている。

「学院長の護衛に駆り出されたのか。優秀すぎるというのも考え物だな。少しは爪を隠したらどうだね？ 君の国のことわざだろう？」

マグナスは答えない。キンバリーは「ふん」と笑って、

「それにしても笑わせる。あんなできそこないがマシンドールとはな」

「……できそこない？」

「あれのたわ言を信じたわけではあるまい。これは君の得意分野だ」

マグナスが肩越しに振り向く。ようやく、こちらに興味を向けた。

キンバリーはしてやったりの表情で、さらに踏み込んだ。

「知っているか、マグナス。樺東のド田舎にね、生きた少女の体を使ってマシンドールを作ろうとした馬鹿者がいたそうさ。ほんの二年前のことだがね」

「……生体を使ってしまえば、それはただの禁忌人形です」

「初めはな」

底の底まで見透かすような視線。マグナスの紅い瞳がキンバリーに刺さる。

キンバリーは肩をすくめ、はぐらかすように言った。

「なに、新技術の開発は前段階の研究をともなうものだ。完全なマシンドールを作るために、禁忌人形を量産する者がいたとしても、おかしくはあるまい？」

「……それが一体、何だと？」

「魔術師協会が君を見ているということだよ、テンゼン・アカバネ」

しばし、マグナスは沈黙した。

それから、再び興味を失くしたように、正面に向き直った。

「おや、否定しないのか？」

「俺が彼であったとしても、そうでなかったとしても、それは些細な問題です。俺は俺の

道を行き——あいつは俺を殺そうとする」

マグナスの視線の先には、草むらに横たわる雷真らいしんがいる。四人もの少女たちに囲まれ、なぜか寄つてたかつて責められている。

「玉虫、鎌切やまづし。もう護衛の必要はない」

きびすを返す。乙女二人があわててついてくる。そのまま立ち去ろうするマグナスに、キンバリーは刺すように言った。

「忠告だ。教授としてではなく、人生の先達としてね」

「うかがいましょう」

「おぼえておきたまえ。人間人間を作ること人間を作ることは魔術師最大の禁忌だ」

「……肝に銘じておきます」

振り向きもせずに去っていく。

キンバリーは雷真を見て、皮肉めいた笑みを浮かべた。

「さて……イブから木の実を受け取って、最初にかじる者は誰かな？」

白々とした空が色づき、ほのかな赤みを帯びて輝く。

それは乙女の肌の色に似ていると、キンバリーは思った。



Epilogue

優しき修羅



「はい、ライシンさん。あーん、してください」

ベッドサイドに座るアンリは、クラシツクなエプロンドレスに身を包んでいた。皮をむき、八つ切りにしたりんごを雷真の口に運ぶ。

指を動かすだけで激痛が走る現状、彼女の好意はありがたくもあり――

悩ましくもあった。

ちらり、と窓の外を見る。そこにナースキャップがのぞいている。

もちろん、夜々だ。その沈黙が恐ろしくて、雷真はアンリの手を押し返した。

「いや……気持ちにはありがたいんだがな」

「食べないとだめですー 治らないじゃないですかー」

「ふん、そんな奴、治らなくていいだろう」

病室の外から冷徹な声がかかる。

黒ぶちの眼鏡をかけた医師――タルーエルが廊下からのぞいていた。

「いや、むしろ治るな。つないでやつた骨を数時間で折るような間抜けは死ね」

「そ、そんなこと言わないくださいー」



真に受けたアンリは、男嫌いもどこへやら、クルーエルに詰め寄った。

「先生、お願いしますー 早くライシンさんを治してくださいー」

「はは、もちろんだとも。君、可愛いね。新人生？」

「いえ……私は……きやつー」

肩に手を回されて、さわさわと撫で回される。アンリは見る間に青くなった。

「いやーっー 男ーっー」

パンチが飛ぶ。だが、クルーエルは慣れた様子でひょいとかわし、

「君みたいな美少女は大歓迎だ。ちよくちよく遊びにきなさい。で、名前は？」

「アンリエット。私の妹よ、ドクター」

背後から冷ややかな声が飛ぶ。振り向くと、戸口のところにシャルが立っていた。彼女の帽子の上には、もちろんシグムントが乗っている。

お姫さまにはドラゴンの護衛がついていた。

がつくりとうなだれ、病室を出て行くクルーエル。

入れ替わりでシャルが入ってきて、雷真の前に立った。

もじもじと視線をさまよわせ、締め切られたカーテン——ロキのベッドの方を一瞥し、
とんとんとつま先で床を打ち、さんざんためらった後で、

「その……今回は……面倒を、かけたわね」

シャルは頬を染め、雷真を見つめた。熱でもあるのか、瞳がうるみがちだ。

「俺が勝手にやったことさ。それより」

アンリとシャルを見比べて、雷真はうなずいた。

「こうやって並べて見ると、確かに姉妹だな。よく似てる」

「どこを見て言ってるのよ……!」

シャルの肩がわななく、シグムントに魔力が流れ込み、隆戦態勢になった。

「……アレ? 何でいきなりキレて——ちよつ、落ち着け!」

「ああ、そうだったわね。貴方は女性の価値を胸でしか判断できない変態乳星人だったわね。貴方みたいな変態、その乳とよろしくやってればいいわ!」

ぱっと後ろを示すシャル。

そこに、所在なげに立つフレイがいた。シャルと一緒にきていたようだ。フレイは不満そうに肩を吊り上げ、シャルをにらんだ。

「……何よ、フレイ。文句でもあるの?」

「う……大きいのに、別にいいことじゃ、ない……!」

「大きくて何が悪いってのよ」

「お風呂で……大変。腕が、だるくなる」

ほよよんほよんと洗うジュエスチャーをする。乳房の表面積が広く、しかも重いので、

確かに腕が疲れそうだ。

かあああつとシャルの顔が赤くなる。シャルは頭から湯気を出し、

「何それ嫌み!? どーせそんな心配いらないわよー 洗うの簡単よー うわーんー」
いきなり泣き出した。アンリにしがみつき、顔を埋める。

「お、お姉さま? あの、元氣出してください。大丈夫、ライシンさんは小さいのもいけるクチです。大小ともに獸欲をかきたてられるタイプですー」

「妙な言い方するなー 俺はどんな色狂いだー」

「小さいのはダメですか? 私、てつきり……」

「てつきり何だー あと、おまえらの場合、問題は胸の大小じゃないからな?」

「そ、そんな言い方ひどいですー 私のこと『他人じゃない』って言ったくせにー」
刹那、室内の空気が凍った。

窓の外から殺気のようなものが流れてくる。いや、外だけではない。室内の二人からも、冷たい陰の気が流れ出しているー

「他人じゃないって……どういうことよ……!?」

「ライシン……へんたいやろう……ごーかんま」

「阿呆ー おまえらの誤解はとどまるところを知らねーのかー」

必死に弁解しようとする雷真。しかし、その言葉はすぐに封じられてしまう。

じゃきつ、と鋭い音を立て、ケルビムのブレードが首に食い込んだ。

「……何の真似かな、おとなりのロキくん」

ばさつと乱暴にカーテンが開けられ、半眼のロキが顔を出す。

ひたいに無数の青筋が立っている。明らかに爆発寸前だ。

「オレは謙虚で寛大だが、自習の邪魔をする奴はぶつ殺したくなる」

「俺は悪くないよな？ 何の落ち度もないよな？」

「黙れ。貴様の女癖が悪くて、女にだらしないからそうなるんだろうバカが」

「バカはおまえだー 今の展開で、どうして俺の女癖が悪いことになるー」

「うふふ、雷真つたら……女癖が悪いだなんて……うふふ♡」

べきべきつと窓枠を握りつぶして、ついに阿修羅が降臨する。

巻き添えを怖れたのか、ラビがこそこそと部屋のすみへ逃げていく。シグムントもばさ

ばさと飛んで、その背面装甲にとまった。

ついに惨劇の幕が開く——寸前、ばちんつ、と誰かが鋭く手を打った。

「くるたびに騒々しくなるな、ここは」

一同が一斉に振り向き、そして一斉に畏まる。

キンバリーは颯爽と入ってきて、にやりと皮肉っぽく笑った。

「モテモテで楽しそうだな、（下から）『番目』」

「……あんたまで何だ。誤解を招くような言い方はやめてくれ」

その手の煽りは、たとえ冗談でも危ないのだ。命に關わるのだ。

「都合よくそろっているな。事後処理がおおむね終わったので、君たちに学院長のお沙汰を伝えにきてやったのさ。ご多忙中の私が、わざわざな」

恩着せがましく言つて、一同を見回す。

「まず、時計塔の件だが。魔術による復元は難しいことがわかつた。ゆえに、新たに建造されることになる。当然、莫大な費用がかかるわけだが——」

シャルの肩が強張る。キンバリーはふつと口元をゆるめ、

「英国政府に凍結された、ブリュー伯爵家の資産を使うことにした」

きよとん、とするシャルに、相棒のシグムントが言い添える。

「つまり政府に支払わせるといふことだ、シャル」

凍結された資産は、既にシャルが自由にできる金ではない。

「え——なすりつけ!? そんなアクロバット、どうやって……?」

「私も詳しくは知らん。学院長がおっしゃるには、とある富豪——名は聞くな——がイギリス議會に口利きをしてくれたそうだ」

「富豪……?」

「学院にご息女がいらっしゃる。祖相のないようにしろ」

キナクさい、と思つてしまつたのはなぜだろう。

首をひねる雷真を無視して、キンバリーは話を続けた。

「次。既に聞いているかもしれないが、アンリエットは入学申請書に不備———というか虚偽が見つかったので、学籍を抹消される」

こちらは厳しい処分だ。アンリの居場所とは、もう学園にはない——

「そこで、私の研究室に置くことにした。ちやうど雑用係が欲しいと思つていたのでね。まあ、研究室付きのメイドだな。その格好はそういうわけだ」

雷真はキンバリーの研究室を思い返した。確かに、雑用係が必要かもしれない。

「今後は私の使用人だ。当然、私が責任をもつて面倒をみよう」

つまり、魔術師協会が警護してくれるという意味だ！

「先生……」「ありがとうございます！」

姉妹が感極まつたように頭を下げ、感謝の意を示す。

一方、キンバリーは意外にもほくほく顔だつた。

「礼には及ばんよ。私としても、《君臨せし暴虐》に貸しができるのは悪くない」

雷真、ロキ、シャルの三人が同時に「うげっ」という顔になった。

この構図は……キンバリーのひとり勝ちだ！

ロキとシャルは《十三人》に名を連ねる優等生。フレイは今やかなりの強豪だし、雷真

には世界最高の自動人形がついている。

この四人を意のままにできるなら、夜会の行方さえ、操作できるかもしれない。一体、キンバリーは何を考えているのか。正直、恐ろしいとさえ思う。

「私からは以上だ。男子諸君はせいせい養生したまえ」

現れたときと同様、颯爽と去っていくキンバリー。

その後ろ姿を見送りながら、雷真は考え込んだ。

今回の事件はまだ解決していない。

あの執事——シンとかいう男を取り逃がし、黒幕の正体を暴いていない。

そして、アンリを監視していた者の存在。

シンだけでは死角が生じる。学院の内部にアンリの監視役がいたはずなのだ。

学院地下の大型洞や、魔術師協会の恩恵も気になる。

そして、あまりにも速すぎる、マダナスの背中。

正直、不安だ。だが、雷真の目の前には、仲むつまじく笑い合う姉妹がいる。

それは、掛け値なしにめでたいと思えるので。

雷真もまた、姉妹に釣られて笑ったのだった。

夕刻。弱々しい西日が差し込み、ばやけた影が病室に広がる。

フレイは夜会に出るために、シャルはその見學に、ロキはケルビムの修理にと、皆が出払い、室内には雷真と夜々の二人きり。

夜々は窓際で夕陽を見上げ、そよ風に目を細めていた。

雷真には痛み止めが打たれ、先ほどからうつらうつらしている。

「起きてますか、雷真」

「……ああ」

「皆さん、いいひとですね」

「……別に、誰にも惚れてないからな？」

「否定するのが怪しい……」

勝手に瞳孔が開いていく。だが、夜々はぶるぶるとかぶりを振って、

「そうじゃなくて。皆さんと、戦わなければならないんですね……」

雷真はしばしの沈黙ののち、低い声で「……ああ」と言った。

「シグムントや、ラビを……」

その先は言わない。雷真を苦しめてしまうかもしれないから。

本当はこう言いたかったのだ。彼らを、破壊しなければならぬのかと。

「心配するな。おまえは世界最高の自動人形だ」

「……そういうことじゃなくて」

「俺ももっと力をつけて、おまえに相応しい人形使いになる。だから……」

続きが気になって振り向くと、雷真は優しく笑って言った。

「このくそつたれな修羅道でも、上手くやれるさ」

思いやりを秘めた言葉。

その言葉の意味を理解し、夜々は嬉しくなって手を挙げた。

「はい」

それから、にこにこと上機嫌で、雷真のベッドに手をかける。

「ところで雷真」

「何だよ」

「今、夜々に相応しい男になるって……♡」

「そうは言っていない！ おまえのそれは悪意的な解釈だ！」

「雷真は今のままで十分です。だから、今すぐ夜々をお嫁さんにしてください！」

「断る！ 頼むから養生させろ！」

じりじりと間合いをはかり、互いに牽制し合う二人。琥珀色に染まる室内を、さらりと、

涼しい風が吹き抜けた。

そして今夜も、夜会が始まる――

あとがき

こんにちは、海冬レイジです。

今回はどんなお話にしましょうかねー、と担当の庄司さんに訊いたところ――

「(す)いい勢いで」「ロキが下着泥棒をする!」というのはどうでしょう!」

「えっ、ロキが……っ?」

「じゃあ、雷真が下着泥棒をする!」

「……えー」

一瞬、庄司さんに下着泥棒の亡霊がとり憑いたのかと思いましたー

庄司さんは土日返上でバリバリ働くスーパー編集者なので、きっと過労でテンションがおかしかったんです。僕はそう信じています。でも若干怖かったので、供養のために下着ネタを仕込みました。亡霊さん、僕にはとり憑かないでください。

そんな感じで機巧少女3をお届けいたします。

今回も、るろおさんの素敵イラストが最強ですー

カパーの破壊力がホント凄(すご)いよー 前回エピソードでハブられた不遇な子(こ)シヤルも、

これで溜飲りゅういんを下げたことでしよう。

るろおさん、今回も助言をありがとうございます。おかげさまで、初稿では「アレ？」という感じだったお話も、どうにか読めるレベルになった……はずー

毎回頼りすぎですよ〜と反省しつつ、次回もお力にすがりたいと内心ひそかに期待してしまいう海冬レイジであった——（ナレーション）

突然ですが、プロダを始めました。

作者の残念な人間性をセキララにさらしちゃってます。たまりに重大情報をボロリして各方面に叱いづられます。あと、近々プレゼント企画なんてのも考えてますよー 興味を持たれた方はぜひ「海冬レイジログ」で検索してみてください。

庄司さんの全方位アタック&応援してくださる皆さんのおかげで、本シリーズの勢いもますますヒートアップー 大盛ありがたいことに、次回は「ドラマCDつきー」の特装版も出ますよっ。ぜひゲットしてくださいねー

ではまた次回、機巧少女4でお会いできますようにー

こんにちわ、絵の人です。
そんな訳で機巧少女の三巻です。

今回は妹でメイドです。しかも、姉より大きいお嬢さん。
相変わらず海冬さんの脳味噌は素敵な演算具合です。
ところで、何気に妹が多いのは気のせいでしょうか。
まったくもーふふふ。レッツ背徳。
さて。ナースプレイやメイドプレイがきたので
次は婦警さんプレイかな？ なんて予想をしてみると楽しいかも。



ドラマ ソング ラジオと盛りだくさんの内容で
**文庫4巻とコミック1巻
特装版衝撃の
同時発売!!**

「機巧少女は
傷つかない」イメージソング
「MACHINE DOLL」で
大きな話題を呼んだ
原田ひとみ×とくPの

**コラボが再び
登場!**

Machine-Doll Project 3rd

2010
Autumn

MF文庫J「機巧少女は傷つかない4」CD(Side-A)付き特装版
発売決定! 「機巧少女は傷つかない1」CD(Side-B)付き特装版
詳細は「機巧少女は傷つかない」公式サイトで!! <http://www.machine-doll.com/>

**2010年
秋発売!**



マシンドール
機巧少女は傷つかない3
Facing "Elf Speeder"

発行	2010年7月31日 初版第一刷発行
著者	海冬レイジ
著者名	三坂崇二
発行者	株式会社 メディアファクトリー 〒154-0861 東京都中央区銀座 8-4-17
印刷・製本	株式会社南済堂

©2010 Reiji Kaseo
Printed in Japan ISBN 978-4-8401-3452-1 C3493

※本書の内容を無断で複製・転写・放送・データ配信などすることは、固くお断りいたします。

※表紙はカバーに準拠してあります。

※見下本・見上本は取寄販売いたします。下記カスタマーサポートセンターまでご連絡ください。

※その他、本書に関するお問い合わせも下記までお願いいたします。

メディアファクトリー カスタマーサポートセンター

電話 03-70-002-001

受付時間 10:00～18:00(土日、祝日除く)

【ファンレター、作品のご感想をお待ちしています】

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷3-3-5 NBF渋谷イースト 株式会社メディアファクトリー
MF文庫J編集部宛付 「海冬レイジ先生」係 「るるお先生」係



左記より本書に
関するアンケートに
ご協力ください

★お答えいただいた方全員に、この書籍で使用している画像の無料
権利を優待プレゼント! ★サイトにアクセスする際や、登録・メール通
信時にかかる通信費はご負担ください。★中学生以下の方は、保
護者の方の了承を得てから回答してください。

